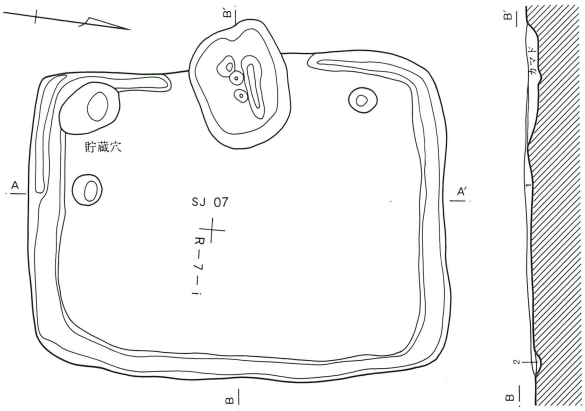
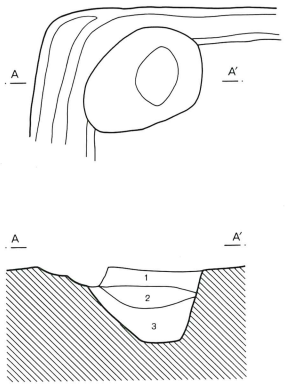
図版	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
9	坏		1.4	6.6	BCDF	B	淡灰色	98%	№113
10	坏		1.1	8.4	CDF	B	白灰色	92%	№170　覆土
11	壷	(11.3)	5.0		BC	A	白灰色	25%	№141
12	蓋	18.8	3.5		BCDF	A	青灰色	95%	№172,189,190,195
13	甕	26.2	9.8		CDF	A	黒灰色	15%	№52
14	甕	40.7	10.7		BC	A	黒褐色	5%	№49
15	長頸壺		8.7		BCDF	A	灰褐色	50%	№4,5,53
16	砥　石								№145

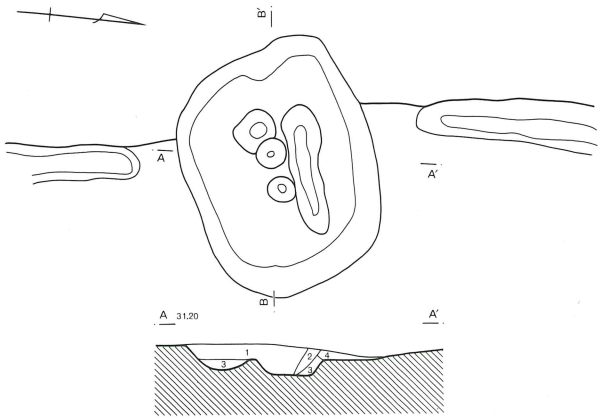


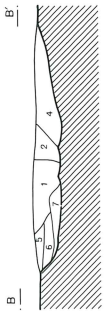
1　暗褐色土　ローム粒子、炭化物を含み、しまりは弱い。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。



1　黒褐色土　炭化粒子（径５～10㎜）を含む。
2　黒褐色土　炭化・焼土粒子含む。
3　暗褐色土　２より焼土粒子多い。

0　　2m





1　暗褐色土　焼土粒子を多量含み、炭化粒子を混在。
2　黒褐色土　若干の焼土粒子を含み、ローム粒子を混在。
3　黄褐色土　ローム粒子を主体。しまりややもつ。
4　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。
5　暗褐色土　焼土粒子・ブロックを混在。やや粗雑。
6　暗褐色土　５に比べ、ロームブロックやや多い。
7　暗褐色土　ロームブロックを多く含み、しまりもつ。

0　　1m

第29図　第７号住居跡・カマド・貯蔵穴

第７号住居跡（第29図）

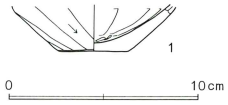
Ｒ－６・７区に位置し、西側調査区の中央付近にあたる。本住居跡も第６号住居跡と同様に多く切り合っている。平面形態はほぼ長方形で、小型の住居跡である。規模は長軸3.35m、短軸2.57m、深さ６cmである。主軸方向はＳ－70°－Ｗである。

床面は、全体に平坦で地山のロームを利用し堅く踏み固められている。壁溝は幅15～23cm、深さ８cmであり全周している。

カマドは、西壁の中央部に設置され、規模は長さ0.95m、焚口幅75cmである。構造は、燃焼部が皿状に浅く掘り込まれ屋外にわずかに張り出し、カマド袖はほとんど残らない。

出土遺物は、覆土中から土師器甕が１点検出されただけである。「コ」の字状口縁甕の底部破片と考えられる。

時期は不明である。



第30図　第７号住居跡出土遺物

第７号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕		2.5	3.7	ＡＢＣＤ	Ｂ	茶褐色	50%	

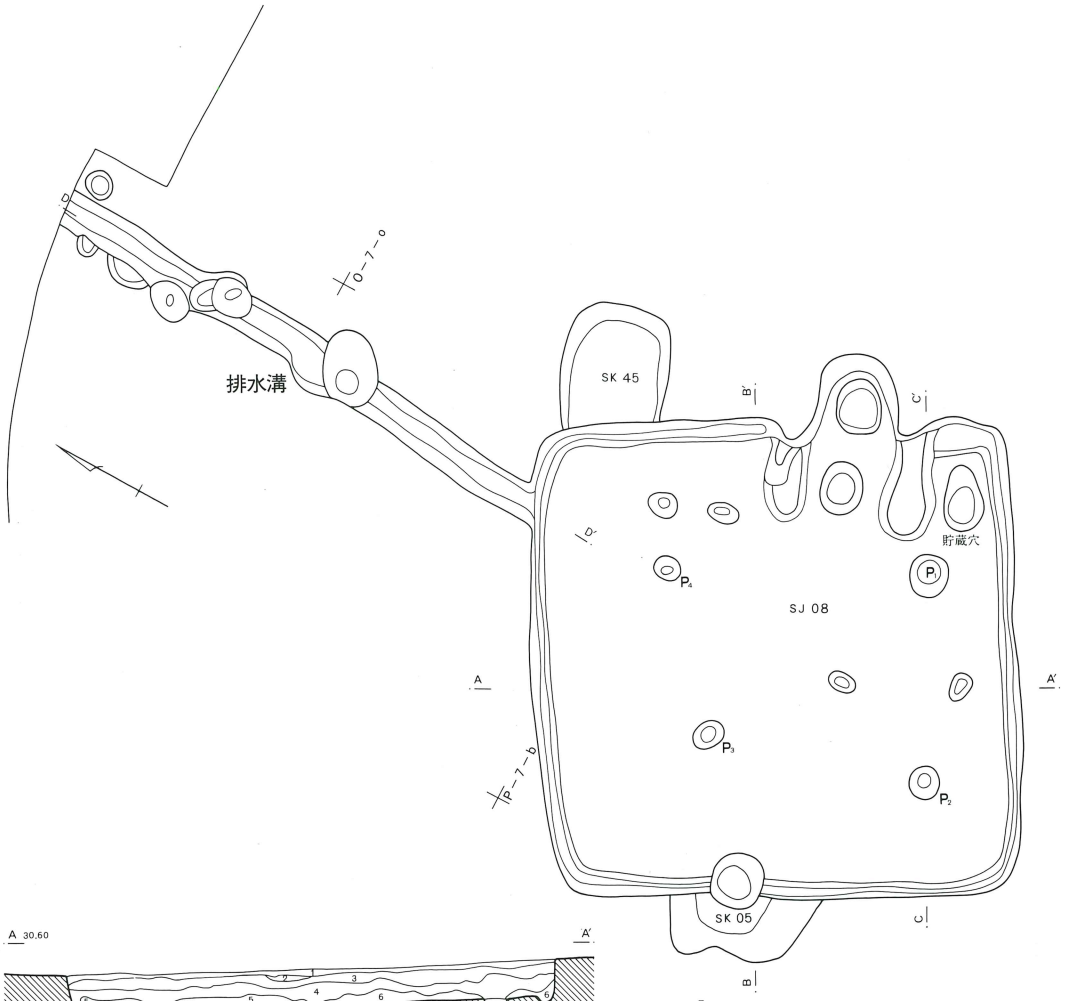
第８号住居跡（第31図）

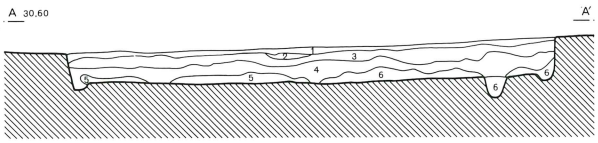
Ｏ・Ｐ－７区に位置する。調査区の北西にあたり、舌状に伸びる台地の北西縁辺にあたる。本住居跡は、中世の鋳造関連土壙である第５号土壙と第45号土壙に壊されている。平面形態は方形で、北東コーナーの北壁からほぼ真北方向に排水溝の施設を持つ。住居規模は長軸3.85m、短軸3.80m、深さ27cmであり、排水溝の規模は長さ4.42m、幅27cm、深さ17cmで中型の住居跡である。貯蔵穴はカマド右側に検出された。主軸方向はＮ－62°－Ｅである。床面は平坦で地山のロームを利用している。中央部分を中心に堅く踏み固められている。壁溝は幅15～20cm、深さ７cmで全周している。

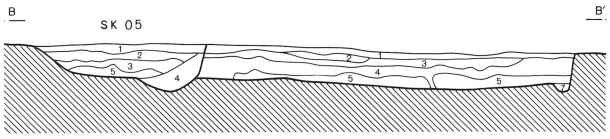
カマドは、東壁の中央部やや南寄りに設置され、規模は長さ1.40m、焚口幅63cmである。構造は、焚き口部に円形の掘り込みがあり、深さ８cmと浅いが黒灰が堆積しカマドの火床となっている。カマド袖は右袖で80cm、左袖は残りが悪く30cm程であった。掛け口の付く燃焼部は壁より屋外にやや突出する。また、燃焼部の火袋となる両壁には甕を反割りにして補強材に利用していた。

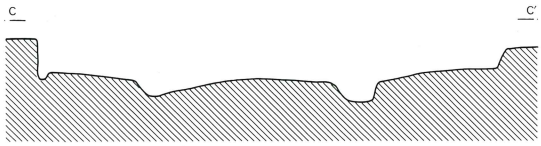
出土遺物は、カマドおよび貯蔵穴周辺に多く検出された。１は比企型坏で、口縁部外面から内面にわたって赤彩が施されている。カマド内から検出した。２～６は鬼高系の模倣坏である。２は素口縁であるが、他の口縁部は二段の稜をもち口径は12～13cm程のものと、やや小振りの口径11cm程のものとがある。器高はやや深く底部はわずかに丸みをもつ。７・８は椀形態で丸底をしている。２～８の胎土はきめが荒く、砂粒を多く含む。９～12は長甕である。甕は胴部にやや張りをもち口縁部は横ナデを施し開いて立ち上がる。13は磨製石斧で、長さ14.2cm、幅8.2cm、厚さ4.2cmである。断面はレンズ状で、材質は緑泥片岩を使用し、幅の広い上下面を磨き先端は敲打されている。縄文時代の遺物であるがこの時期に二次利用された可能性も考えられる。14～16は石製の臼玉である。

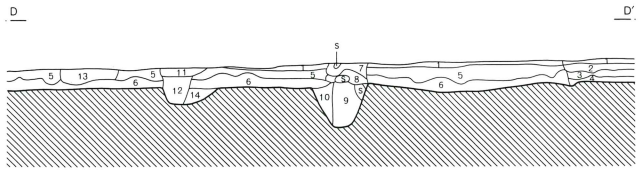
時期は稲荷前Ⅲ期と考えられる。











ＳＪ－08

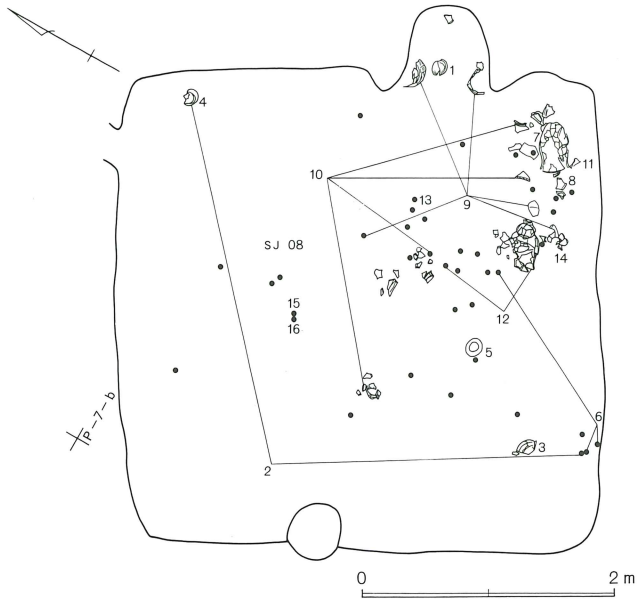
1　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、非常にハード。
2　黒褐色土　炭化物、炭を多量に含む。
3　暗褐色土　炭化物、焼土・ローム粒子を微量含み、やや粘性がある。
4　暗褐色土　ローム・焼土粒子を微量含み、３より暗い。
5　黒褐色土　ローム粒子を微量含み、ソフト。
6　暗褐色土　ローム粒子を少量含み、砂質粘土状。
7　暗褐色土　砂質ロームを多量含む。

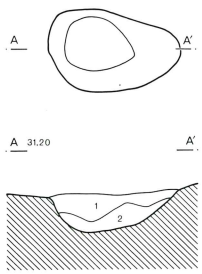
ＳＪ－08　排水溝（Ｄ－Ｄ'）

1　暗褐色土　焼土・ローム粒子を含み、ハード。
2　黒褐色土　焼土・ローム粒子を含み、しまりソフト。
3　黒褐色土　焼土・ローム粒子を含み、ソフト。
4　黒褐色土　ローム粒子（径３㎜）をまばらに含む。
5　黒褐色土　ローム粒子、炭化物を含む。２に近似。
6　黒褐色土　ローム粒子を少量含み、５よりソフト。
7　暗褐色土　ローム粒子（径３㎜）を多量含む。
8　黒褐色土　ローム粒子（径３㎜）を少量含み、やや砂質。
9　黒褐色土　ローム粒子（径３㎜）、小砂利を多量含み、しまりは弱い。
10　黒褐色土　ローム粒子（径５㎜）を多量含む。
11　黒褐色土　ローム粒子を少量含み、ハード。
12　黒褐色土　ローム粒子（径３㎜）をまばらに含み、ややソフト。
13　黒褐色土　暗茶褐色ローム粒子（３㎜）をまばらに含み、ややソフト。
14　黒褐色土　６に近似。

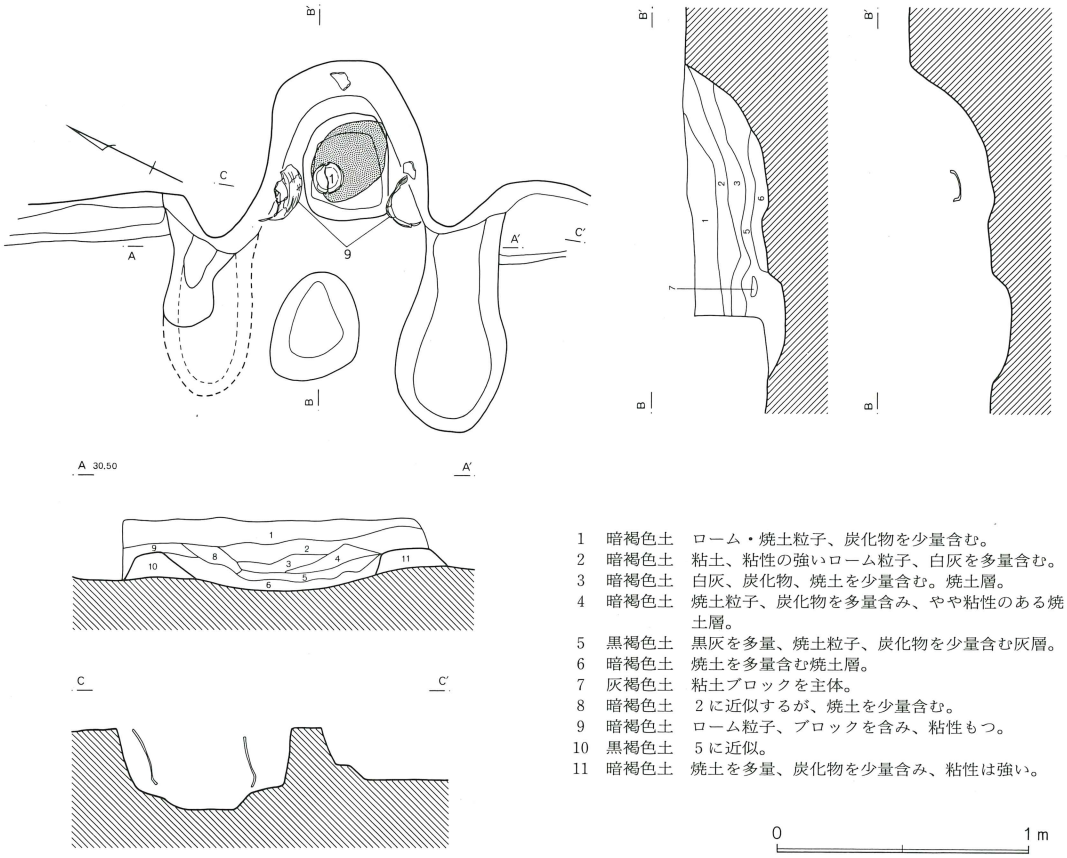
0　2m

第31図　第８号住居跡



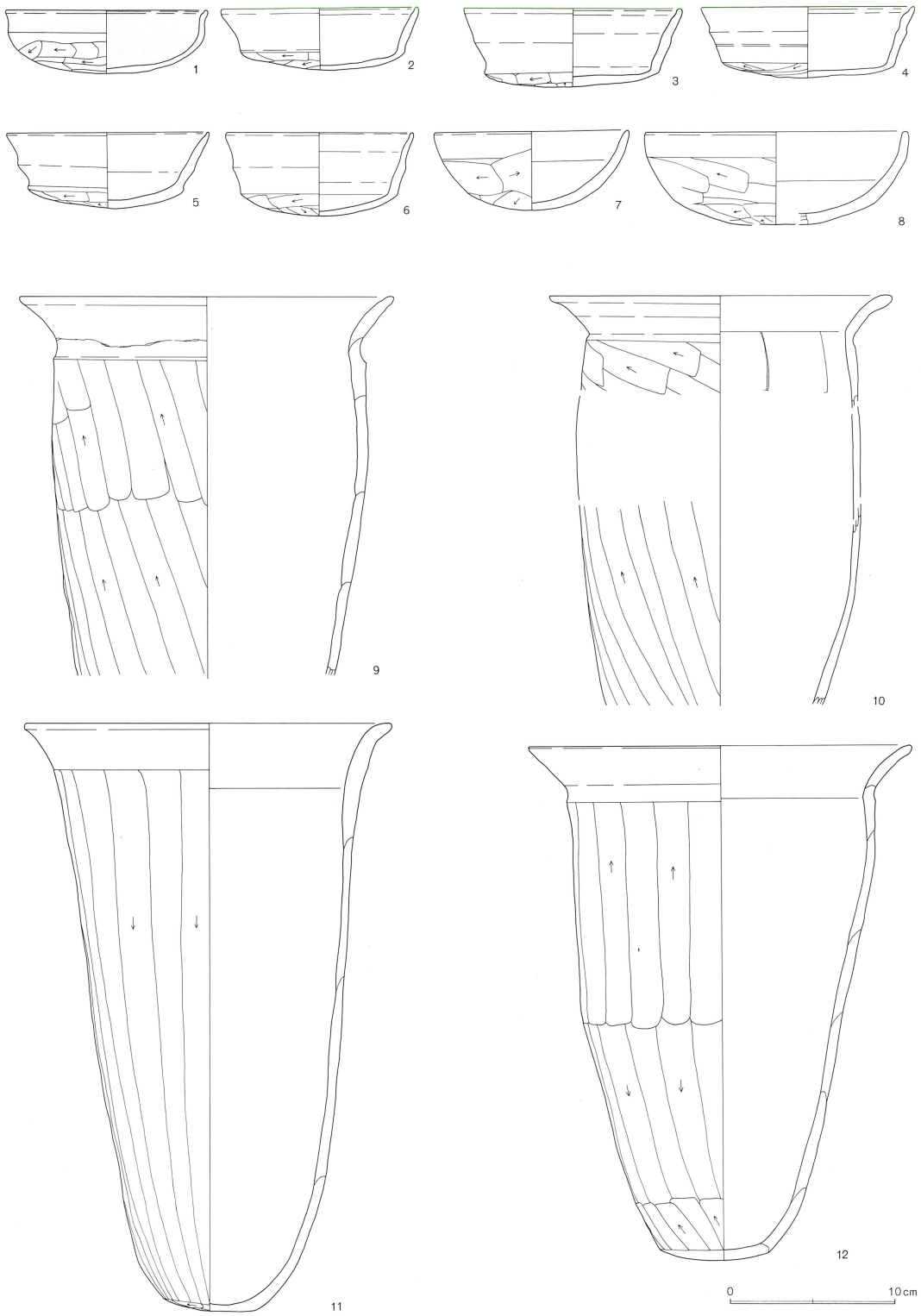


1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物を微量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、焼土を多量、炭化物を少量含み、やや粘性がある。

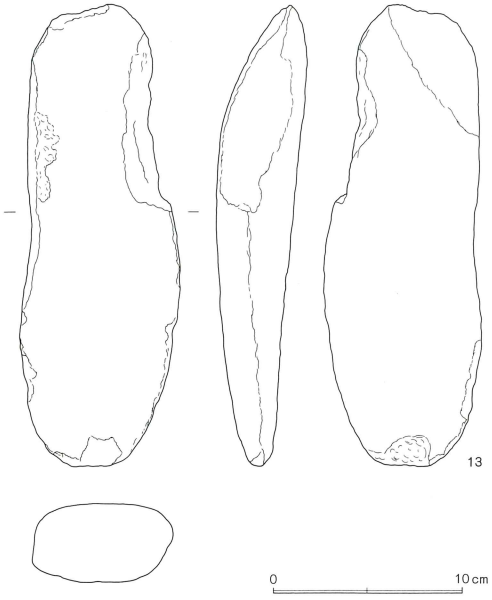


1　暗褐色土　ローム・焼土粒子、炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　粘土、粘性の強いローム粒子、白灰を多量含む。
3　暗褐色土　白灰、炭化物、焼土を少量含む。焼土層。
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を多量含み、やや粘性のある焼土層。
5　黒褐色土　黒灰を多量、焼土粒子、炭化物を少量含む灰層。
6　暗褐色土　焼土を多量含む焼土層。
7　灰褐色土　粘土ブロックを主体。
8　暗褐色土　2に近似するが、焼土を少量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子、ブロックを含み、粘性もつ。
10　黒褐色土　5に近似。
11　暗褐色土　焼土を多量、炭化物を少量含み、粘性は強い。

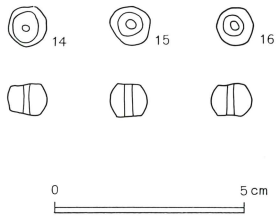
第32図　第8号住居跡遺物分布図



第33図　第８号住居跡出土遺物(1)



第34図　第８号住居跡出土遺物(2)



第35図　第８号住居跡出土遺物(3)

第８号住居跡遺物出土状況

第８号住居跡出土遺物観察表（第33～35図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	3.9		ABCDF	A	橙褐色	98%	カマドNo.2
2	坏	12.0	3.7	5.0	ＡＢＣＤ	C	褐色	80%	No.1,35　覆土
3	坏	13.3	4.8		ＡＢＣＤ	C	茶褐色	95%	No.2
4	坏	13.0	4.3		ＡＢＣＤ	C	褐色	80%	No.1
5	坏	12.0	4.7	9.6	ＡＢＣＤ	C	茶褐色	100%	No.3
6	坏	(11.2)	5.1	9.6	ＡＢＣ	C	褐色	50%	No.31,33,35
7	坏	11.8	4.8		ＢＣＤ	C	黄褐色	95%	No.6　貯穴1
8	鉢	16.1	5.6		ＡＢＣＤ	C	橙褐色	25%	No.11
9	甕	23.0	23.3		ABCDF	B	橙褐色	70%	カマドNo.3,4
10	甕	21.0	25.0		ＢＣＤ	B	褐色	60%	貯穴No.3　覆土
11	甕	22.6	36.0		ＡＢＣ	C	淡褐色	70%	No.4
12	甕	23.4	31.4		ＡＢＣ	B	橙褐色	70%	No.7
13	石　器								No.23
14	臼　玉								No.48
15	臼　玉								No.40
16	臼　玉								No.40

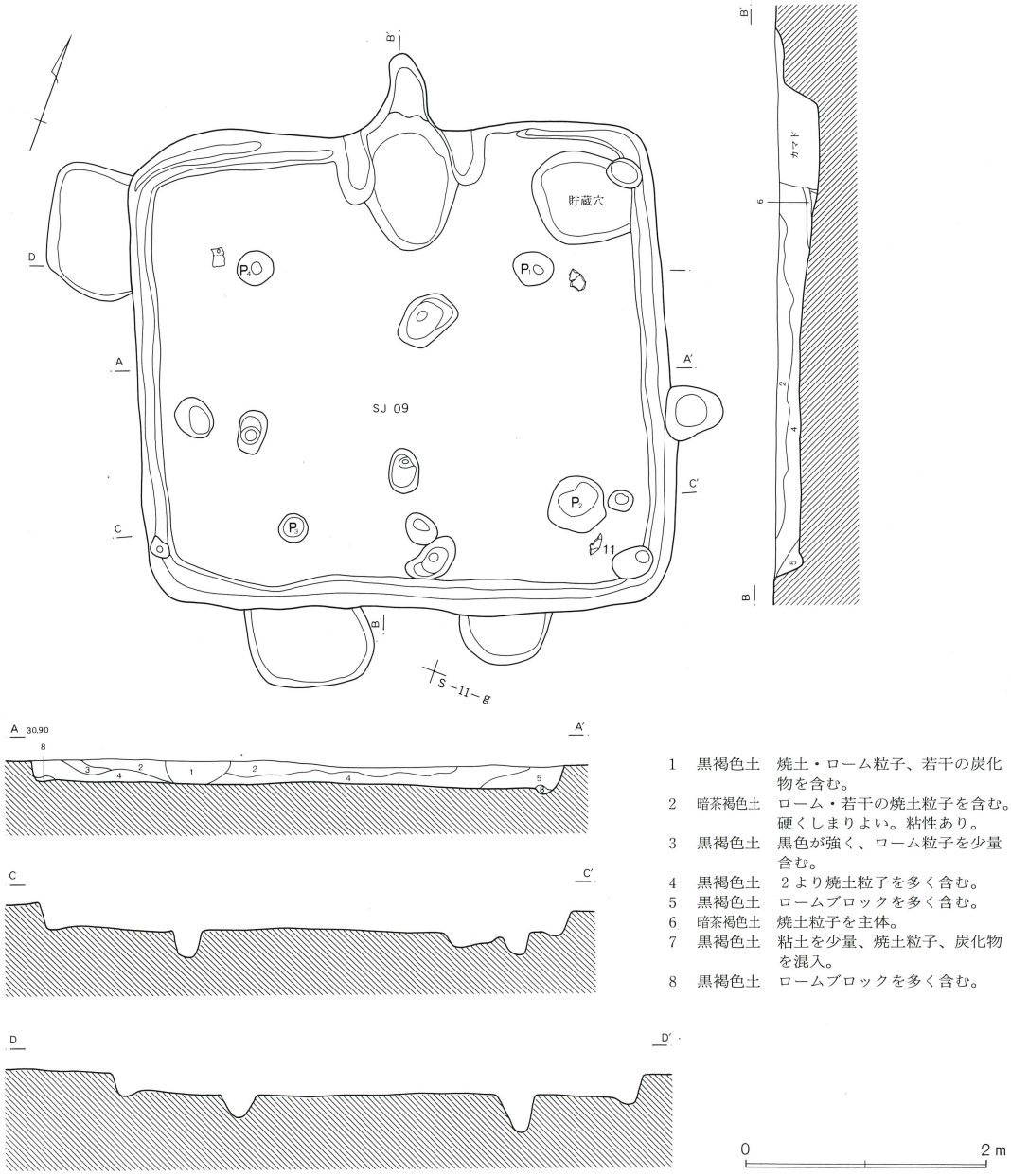
第９号住居跡（第36図）

Ｒ・Ｓ－11区に位置し、東側調査区の南隅にあたる。本住居跡は、第20号掘立柱建物跡に切られている。平面形態は長方形で、規模は長軸4.50m、短軸4.05m、深さ31cmで、中型の住居跡である。主軸方向はＮ－24°－Ｗである。

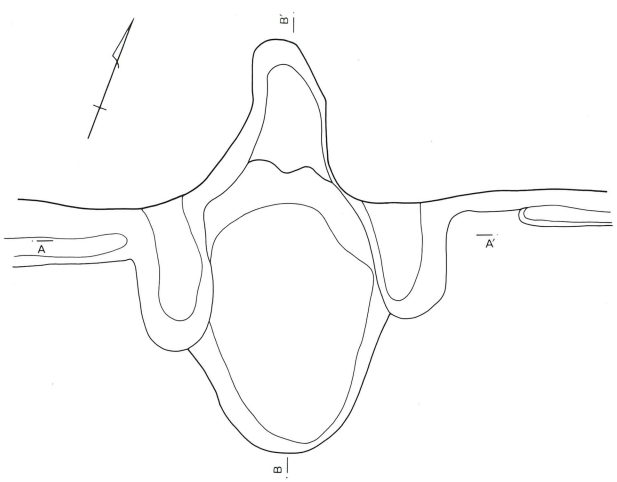
床面は、全体に平坦で地山のロームを利用している。中央部を中心に堅く踏み固められている。壁溝は幅18～30cm、深さ４cmで全周している。

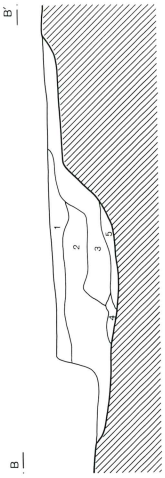
カマドは、北壁のほぼ中央部に設置され、規模は長さ1.63m、焚口幅73cmである。構造は、焚き口が大きくせり出し、両袖が45cm、60cmと住居跡内に張り出している。燃焼部の掘り込みは９cm程あり、掛け口は住居跡内に位置する。煙道部は屋外に徐々に幅を狭めながら65cm程伸びて立ち上がる。

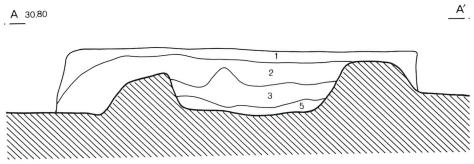
出土遺物は覆土中から検出されている。１は須恵器の坏で、白色針状物質を含む。２～４は比企型坏で、いずれも、口縁部外面から内面にかけて赤彩を施す。５～７は北武蔵型坏で、５は赤彩を施す。８～11は土師器甕である。時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。



第36図　第９号住居跡

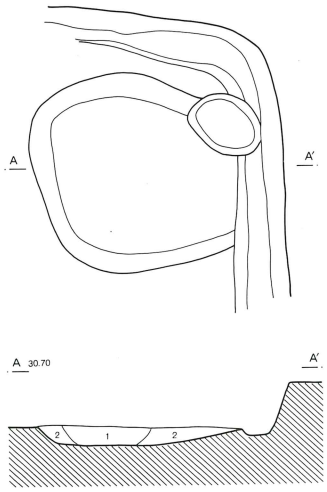






1　黒褐色土　ローム粒子、ブロック、粘土の他、少量の炭化物、焼土粒子を含む。
2　黒褐色土　1より焼土粒子を多く含む。
3　暗茶褐色土　焼土粒子、炭化物、粘土を多量含む。しまりやや弱い。
4　暗赤褐色土　焼土を主体。
5　暗灰色土　灰を多く含む。焼土粒子、炭化物を混入。

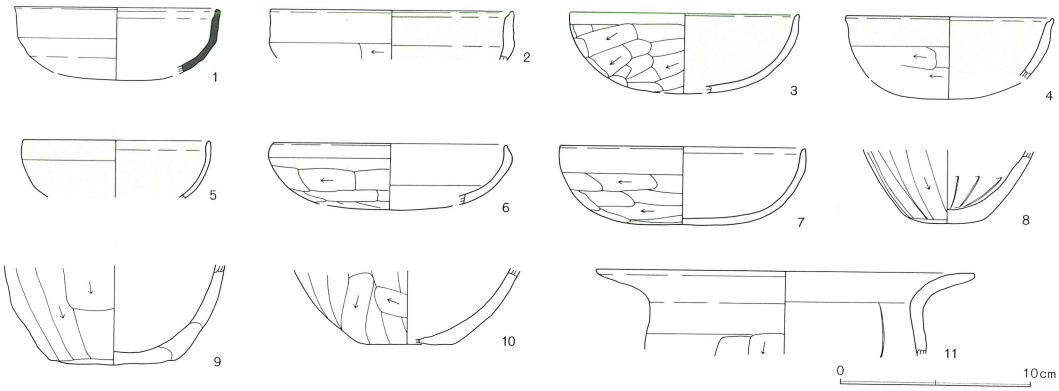
0　1 m



1　黒褐色土　ローム粒子、多量の焼土、炭化物を含む。
2　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック、少量の焼土を含む。

0　1 m

第37図　第9号住居跡カマド・貯蔵穴



第38図　第９号住居跡出土遺物

第９号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.8)	3.8		ＢＣＤＦ	Ａ	青灰色	10%	覆土
2	坏	(12.9)	2.6		ＢＣＤＦ	Ａ	茶褐色	10%	覆土
3	坏	(6.1)	4.2		ＡＢＣＤ	Ａ	橙褐色	50%	貯穴上部
4	坏	(11.0)	4.3		ＢＣＤＦ	Ａ	茶褐色	10%	覆土
5	坏	(9.8)	3.1		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	10%	貯穴上部
6	坏	(12.4)	3.2		ＡＢＣＤ	Ａ	橙褐色	10%	覆土
7	坏	(13.0)	4.1		ＡＢＣＤ	Ａ	橙褐色	40%	覆土
8	甕		3.9	4.0	ＢＣＤ	Ａ	橙褐色	80%	覆土
9	甕		5.2	6.0	ＢＣＤ	Ｃ	褐色	70%	貯穴上部　覆土
10	甕		3.9	5.2	ＡＢＣＤ	Ｂ	褐色	40%	カマド一括　覆土
11	甕	(20.0)	4.4		ＢＣＤ	Ｂ	橙褐色	30%	№３

第10号住居跡（第39図）

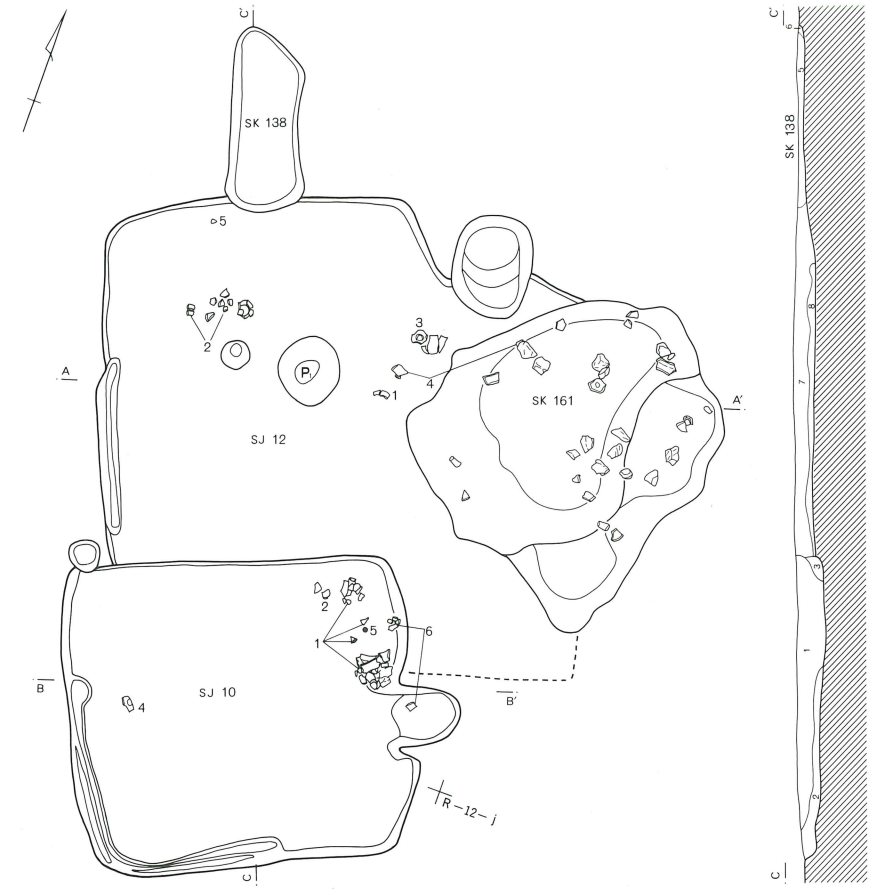
Ｒ－11・12区に位置し、第９号住居跡・第20号掘立柱建物跡の東側にあたる。本住居跡は、第12号住居跡を壊して構築されている。平面形態は長方形で、規模は長軸2.77m、短軸2.45m、深さ19cmの小型の住居跡である。主軸方向はＮ－70°－Ｅである。

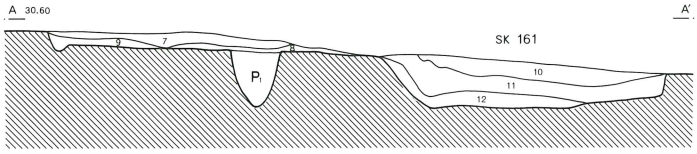
床面は、地山のロームを利用し、全体的にやや凹凸があり地形に合わせてカマドの付く東壁方向にわずかに傾斜している。壁溝は南西コーナーのみ検出できた。幅11～20cm、深さ６cmである。

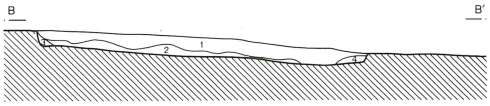
カマドは、東壁の中央部に設置され、規模は長さ0.70m、焚口幅45cmである。構造は、燃焼部の掘り込みはほとんどみられず、位置は屋外にあたる。カマド袖はほとんど残らず、わずかに、左袖が残存していた。

出土遺物は、カマドの左側からまとまって検出された。１は「く」の字状口縁の甕である。２は擬宝珠つまみの張り付く須恵器蓋で、天井部の肩は器肉が厚い。３は推定径ではあるが、口径14.0cmとやや大ぶりの須恵器坏である。底部は欠損し、体部下端はヘラケズリを施す。４・５は底部回転糸切り離しで、やや上げ底気味である。口唇部肥厚して外へ開く形態をしている。６・７は灰釉陶器である。

時期は稲荷前ⅩⅣ期と考えられる。



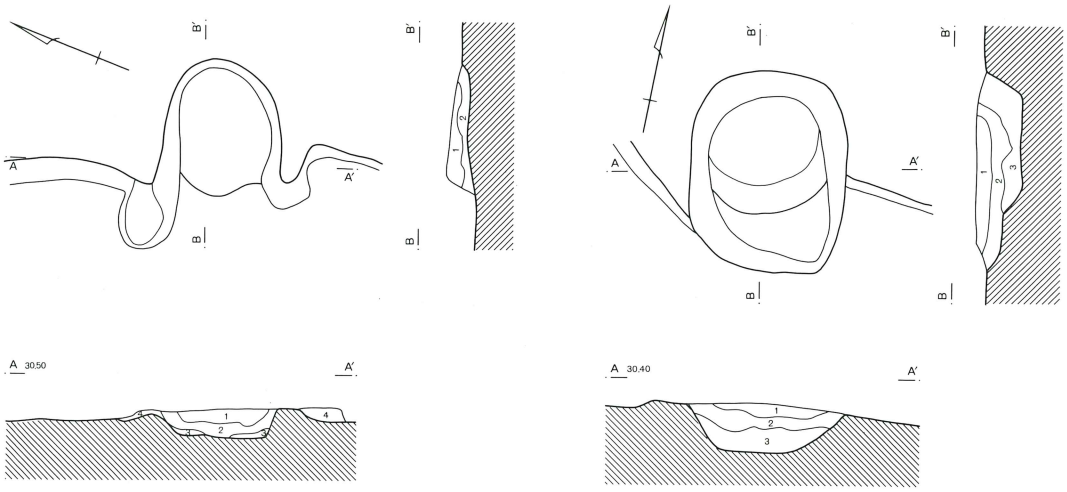




1	黒褐色土	ローム粒子、炭化物、焼土粒子を多く含み、しまりよい。粘性有り。
2	暗茶褐色土	軟質ロームを多く、焼土粒子を僅かに含む。粘性強い。
3	暗茶褐色土	軟質ローム主体。粘性強い。
4	黒褐色土	ローム・多量の焼土粒子を含み、しまりよい。
5	黒褐色土	ローム粒子を多量含む。色調は茶色が強く、粘性強い。
6	茶褐色土	軟質ローム主体。粘性強い。
7	黒褐色土	ローム・焼土粒子を少量含み、しまりよい。
8	黒褐色土	ローム粒子を多量含み、粘性強い。
9	黒褐色土	ローム・焼土・炭化粒子を若干含み、しまりよい。
10	暗茶褐色土	ローム・焼土粒子、炭化物を多く含む。
11	黒褐色土	1より焼土が少ない。
12	暗黄褐色土	ローム土と黒色土の混合。炭化物、焼土粒子を含む。

0　2 m

第39図　第10・12号住居跡

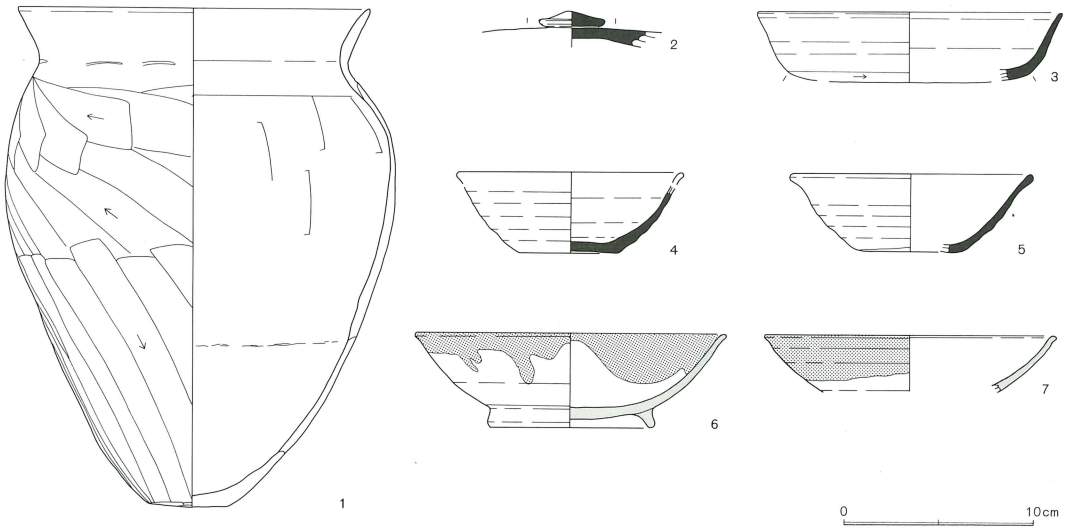


ＳＪ－10　カマド
1　暗茶褐色土　ローム粒子、粘土、焼土を含む。
2　暗茶褐色土　１より焼土を多く含む。粘土は少ない。
3　暗茶褐色土　２より粘土を多く含む。
4　黒褐色土　　ローム・焼土粒子、炭化物を少量含む。

ＳＪ－12　カマド
1　茶褐色土　焼土、炭化物、ローム粒子を含む。
2　茶褐色土　１より多く焼土を含む。
3　黒褐色土　焼土ブロック・粒子を多く含む。

0　1m

第40図　第10・12号住居跡カマド



第41図　第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕	18.6	26.3	4.5	ＡＢＣＤ	Ｂ	褐色	95%	№6
2	蓋	3.5	1.9		ＣＤＦ	Ａ	青灰色	20%	№7
3	坏	(16.0)	3.7	(10.8)	ＣＤＦ	Ａ	青灰色	20%	覆土
4	坏		3.6	5.2	ＣＤＦ	Ｃ	黄褐色	50%	№9
5	坏	(12.6)	4.1	(5.8)	ＡＣＤＦ	Ｃ	黄褐色	30%	№4

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
6	高台皿	16.4	4.9	8.5	BC	A	褐灰色	50%	№1,5　覆土
7	高台皿	15.4	2.95		B	A	白灰色	20%	覆土

第12号住居跡（第39図）

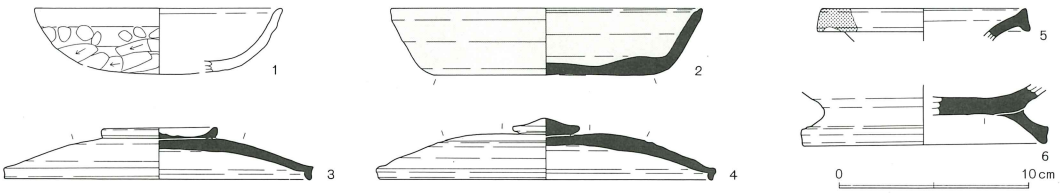
R－11・12区に位置する。本住居跡は第10号住居跡に壊され、第161号土壙と重複関係にある。平面形態は長方形と推定され、規模は長軸3.85m、短軸(2.83)m、深さ12cmである。主軸方向はN－18°－Wである。

床面は、地山のロームを利用し、全体的に凹凸が見られる。北壁側は、やや凹み軟弱であるが、中央部分は堅く踏み固められている。主柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。壁溝は西壁に一部確認され、規模は幅15cm、深さ6cmである。

カマドは北壁の東寄りに設置され、規模は長さ0.80m、焚口幅60cmである。遺存状態が悪く構造はわからない。ただ、カマドの火床が確認され、形態は隅丸方形をし20cmの掘り込みを持っていた。両袖は残存せず不明である。

出土遺物は、1が土師器の坏で、やや器肉が厚い造りの粗雑な感じである。口縁部は横ナデを施し、体部に指頭による未調整部分をもち下半はヘラケズリを施す。2は盤状坏で、器面全体に赤彩が施されていたと考えられるが、磨耗が激しく、部分的に残るだけである。ロクロ整形され、底部外面は手持ちによるヘラケズリを施す。形態は底面が大きく、体部は直線的に立ち上がり口唇部内面に沈線が巡る。底部は内面が大きく波打ち、器肉も厚い。3・4は須恵器蓋で、天井はやや低く器肉が厚い。3は貼り付けのリングつまみをもち、白灰色でややザラつくきめの荒い胎土である。4は擬宝珠つまみである。

時期は稲荷前Ⅴ期と考えられる。



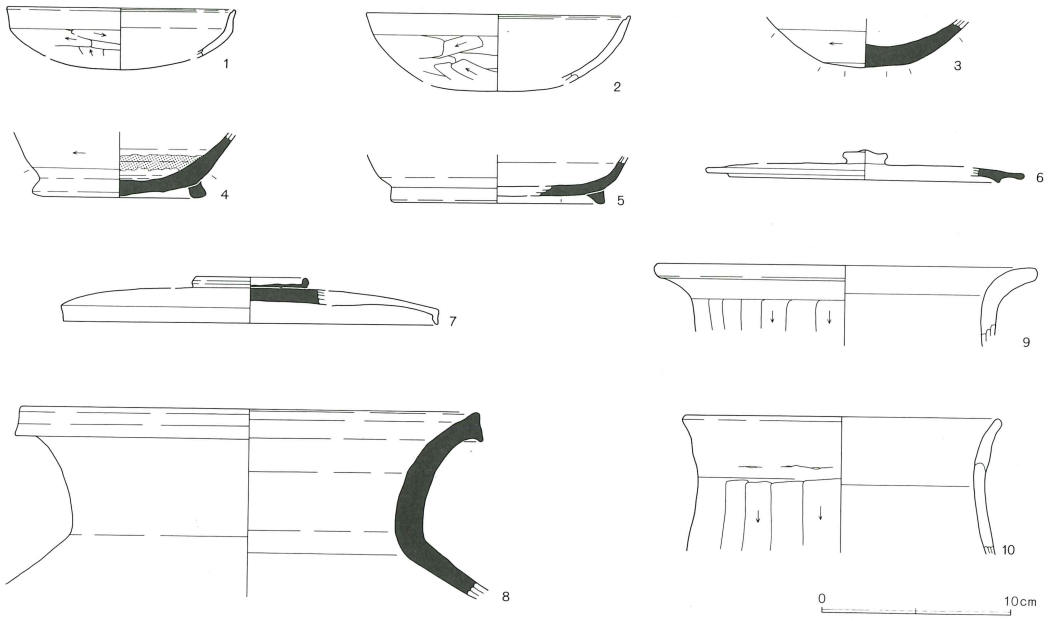
第42図　第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	3.5		ABCDF	B	褐色	60%	№9　Pit1
2	坏	16.4	3.5	11.4	ABC	C	淡褐色	80%	№2,3,4
3	蓋	16.1	2.7		CDF	A	白灰色	65%	№5
4	蓋	17.6	3.2		BCDF	C	茶褐色	50%	№8　SK69№15
5	壺	(10.8)	1.7		BC	A	褐灰色	20%	№1
6	壺		3.0	(12.9)	BCDF	C	白灰色	25%	

第161号土壙（第39図）

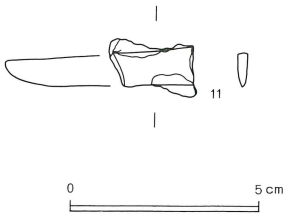
R－12区に位置する。本土壙は第12号住居跡より古く、覆土中からは古代の遺物を多く検出した。形態は不整形で、遺構の性格は不明である。規模は東西2.52m、南北2.50m、深さ38cmである。



第43図　第161号土壙出土遺物(1)

出土遺物は、須恵器壺、高台坏、蓋、甕、土師器甕を検出した。1・2は口縁部内面に沈線を持つ比企型坏と考えられる。3は丸底の、4は貼り付け高台の須恵器壺である。5はややでっちりタイプの高台付坏と思われる。6・7は蓋である。6は返りをもち端部よりも返りが突出する。7は天井部厚くリングつまみが張り付く。9・10は器肉のやや厚い土師器甕である。

時期は稲荷前Ⅴ期と考えられる。



第44図　第161号土壙出土遺物(2)

第161号土壙出土遺物観察表（第43・44図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.6		ABC	B	橙褐色	10%	No.7
2	坏	(14.0)	3.6		ABC	A	褐色	10%	覆土
3	壺		2.6	4.5	BCDF	B	灰色	10%	No.13
4	壺		3.5	9.2	BCDF	B	淡灰色	10%	No.6
5	高台坏		2.5	11.4	BCD	A	白灰色	10%	覆土
6	蓋	17.0	0.7		CDF	B	灰色	5%	覆土
7	蓋	5.8	1.9		CDF	A	青灰色	50%	No.8
8	甕	24.3	9.9		BCD	B	淡灰色	20%	No.6
9	甕	20.0	4.2		ABCF	C	黄褐色	10%	No.9
10	甕	16.7	17.1		ABCF	C	茶褐色	15%	No.12
11	刀　子					A	褐色		No.5

第11号住居跡（第46図）

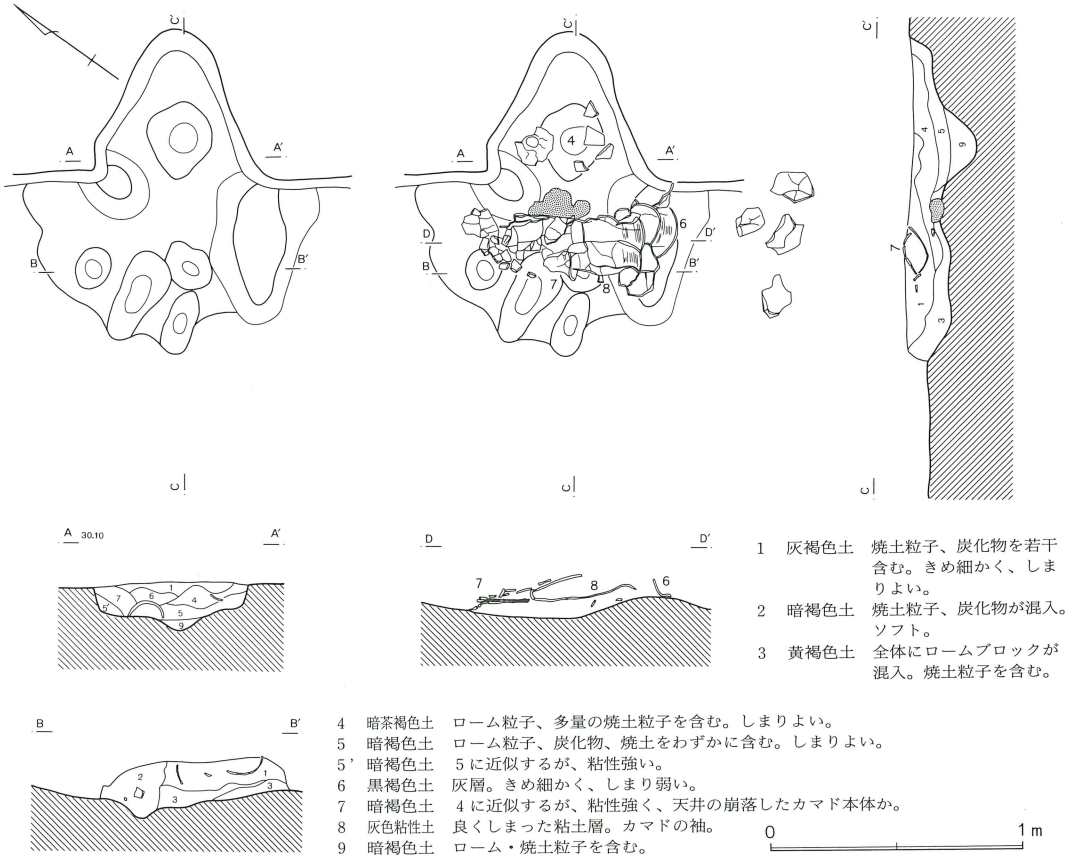
Ｒ－12・13区に位置する。本住居跡は、調査区域内を舌状に伸びる平坦な台地が東側に向けて緩やかに傾斜する縁辺にあたり、西側に第10・12住居跡が近接する。重複遺構は、中世の第23号掘立柱建物跡が存在する。平面形態はほぼ方形で、規模は長軸4.40m、短軸4.35m、深さ９cmの中型の住居跡である。主軸方向はＮ－52°－Ｅである。

床面は、全体に平坦で地山のロームを利用し、中央部分を中心に堅く踏み固められている。主柱穴はＰ１～Ｐ４があたると考えられ、貯蔵穴はカマドの左右に設けられている。壁溝は幅15～20cm、深さ５cmであり、北側コーナーが中世の溝によって壊されているもののほぼ全周している。

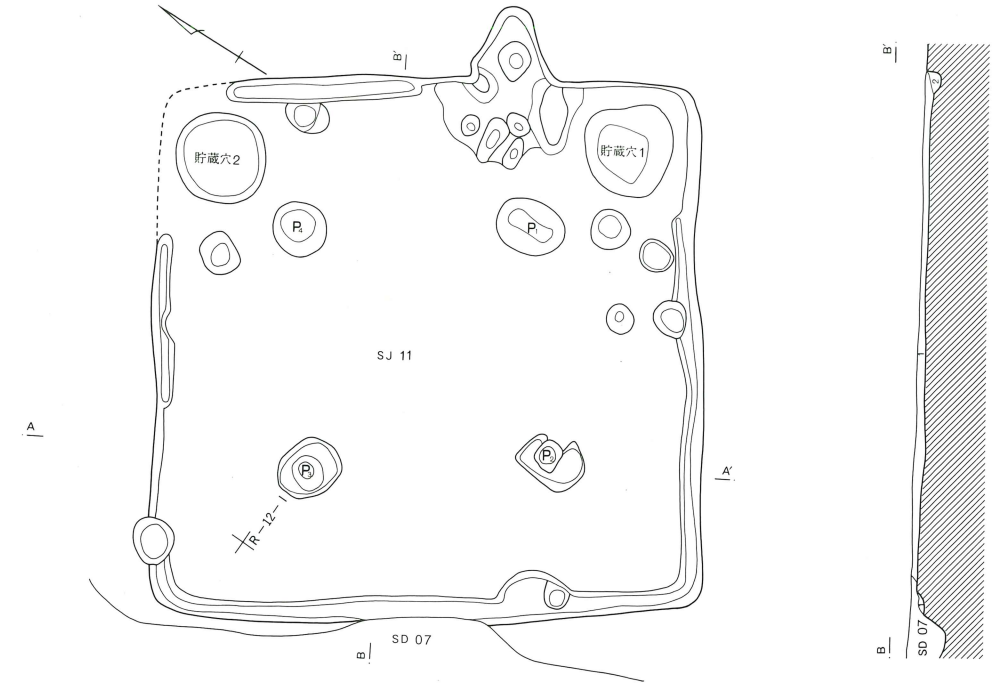
カマドは東壁のやや南寄りに設置され、規模は長さ1.28m、焚口幅45cmである。構造は左袖の残存状態が悪く短いが、右袖は住居跡内に55cm程伸び、天井部は３個体の土師器甕を入れ子状に連結させて芯材とし、粘土を張り込んで構築されたものと考えられる。燃焼部の掘り込みは浅く床面から８cm程で、掛け口は壁よりもやや外に出ていたものと考えられる。煙道部は屋外に伸びるが、掛け口からの距離をあまり持たない。

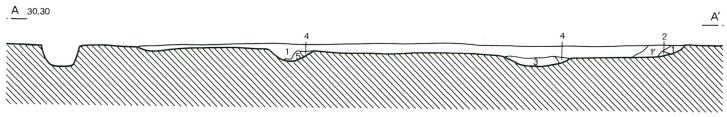
出土遺物は、土師器の坏、鉢、小型台付甕、甕が検出された。１は貯蔵穴２から検出。４・６～８の長胴甕はカマド内から、５は貯蔵穴１から検出した。

時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。



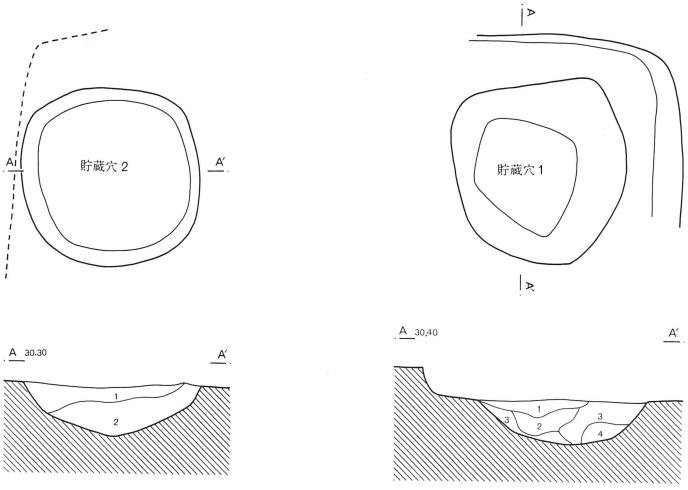
第45図　第11号住居跡カマド





1　暗褐色土　炭化物、焼土粒子を含む。橙色スコリアも混入。砂質だが極めてハード。
1 '暗褐色土　1に近似するが、白色パミスの混入が顕著。
2　褐 色 土　1に斑点状にローム粒子混入。
3　黄褐色土　ローム粒子の混入多く、1よりソフト。
4　暗褐色土　1に近似するが、混入物はなく、黒味を帯びる。
5　黄褐色土　ローム土を主体。

0　2 m

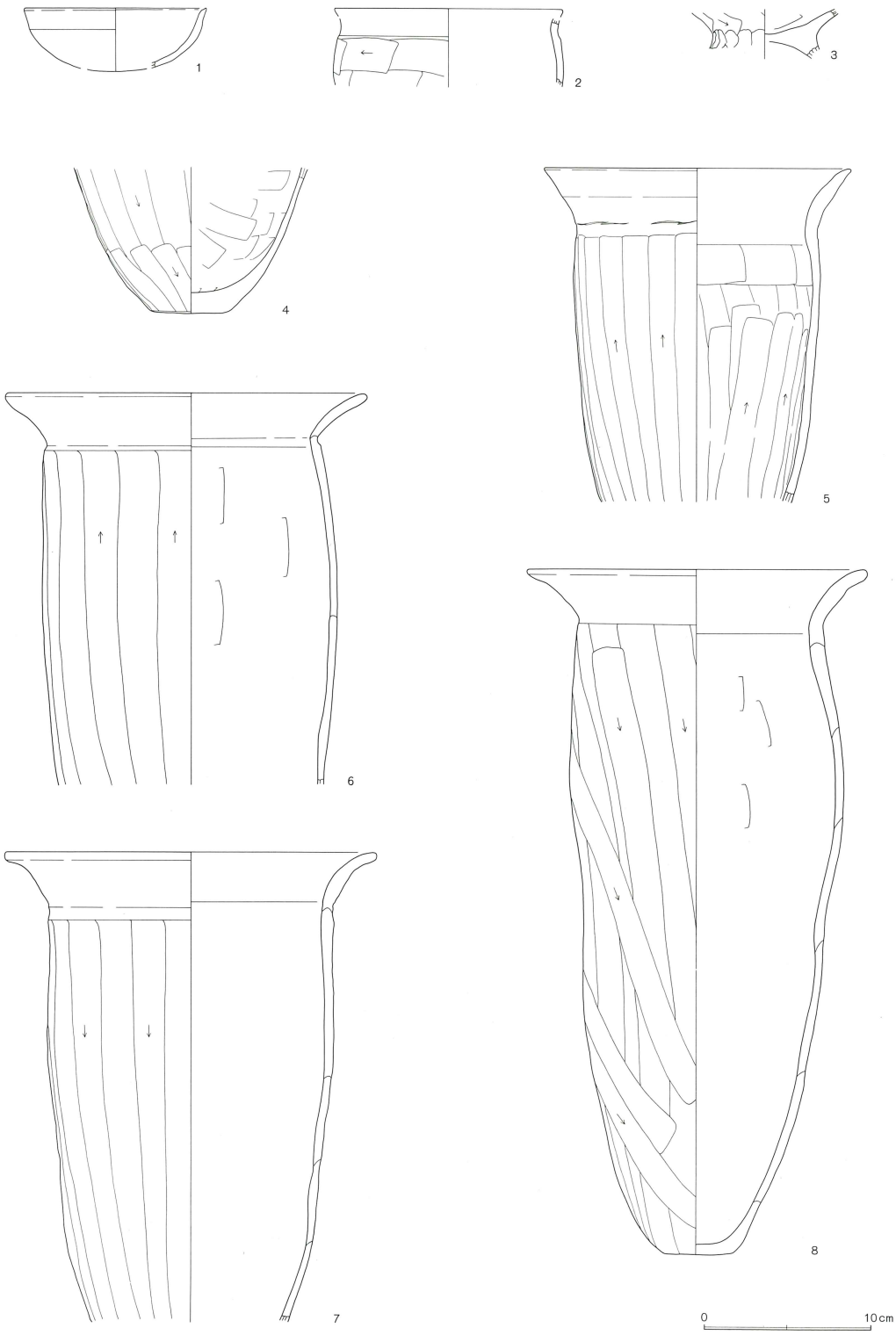


貯蔵穴1
1　暗褐色土　住居覆土1に近似。
2　暗褐色土　1に近似するが、焼土粒子を多量含む。
3　暗褐色土　1に近似するが、焼土粒子少なく、炭化物多い。
4　褐 色 土　黄褐色土のローム粒子が混入。砂質でソフト。

貯蔵穴2
1　褐 色 土　黄褐色のローム粒子が一様に混入。粘性強い。
2　暗褐色土　炭化物、ローム粒子微量含む。1よりソフト。

0　1 m

第46図　第11号住居跡・貯蔵穴



第47図　第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.9)	3.8		ABCDF	B	茶褐色	25%	貯穴2　一括
2	鉢	13.4	4.0		ＡＢＣＤ	B	褐色	15%	覆土
3	台付甕		3.0	6.2	ＢＣＤＦ	B	茶褐色	30%	カマド　覆土
4	甕		8.7	4.8	ABCDF	A	茶褐色	20%	カマドNo.4
5	甕	18.4	20.0		BCDEF	A	茶褐色	25%	貯穴1
6	甕	21.4	24.9		ＡＢＣ	B	褐色	60%	カマドNo.1,2
7	甕	22.2	28.1		ＡＢＣ	B	褐色	50%	カマドNo.3　覆土
8	甕	20.4	40.1	4.2	ＡＢＣＤ	A	橙褐色	70%	カマドNo.2,3

第13号住居跡（第48図）

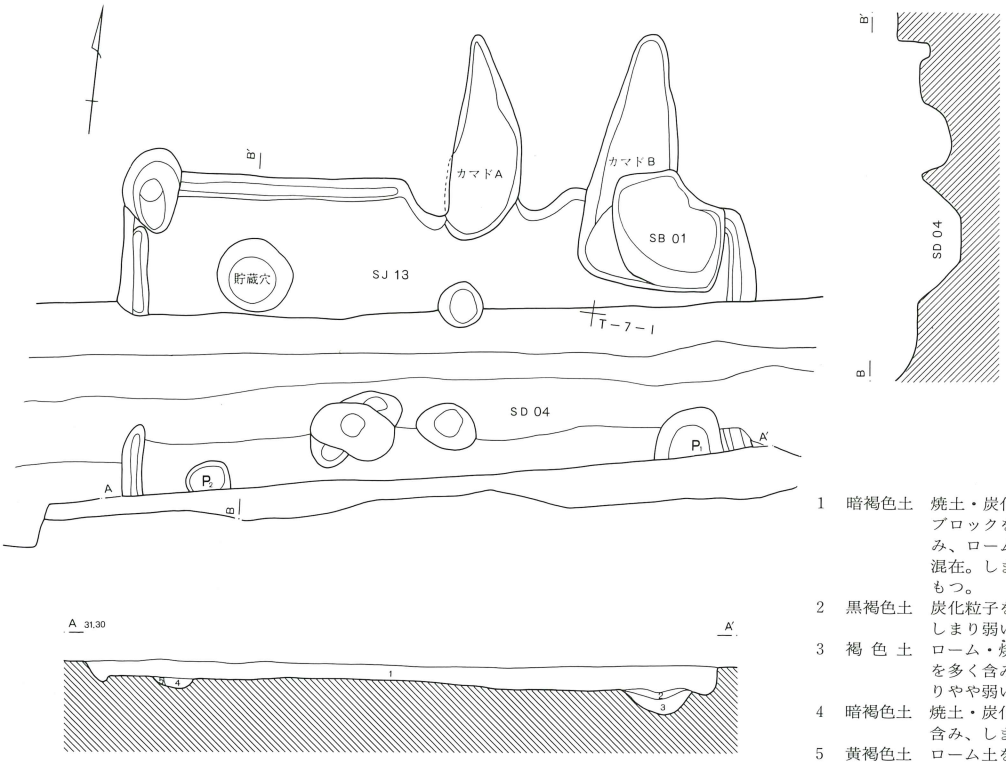
Ｔ－７区に位置する。本住居跡は調査区南西隅にあたり、周辺には第１～４号住居跡、すぐ東側には同じ主軸方向をもつ第14号住居跡が存在する。南側は調査区域外に伸びている。重複遺構は、住居跡中央を東西に走る　中世の第４号溝跡が存在する。平面形態は長方形と推定され、やや大型の住居跡であろう。規模は長軸5.50m、短軸(2.70)m、深さ19cmである。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。

床面は、第４号溝に中心部分を壊されているためほとんど残存しない。辛うじてカマドの取付く北壁側のみ残り、全体に平坦で地山のロームを利用している。主柱穴は、北側のＰ１・Ｐ２があたると考えられる。深さはＰ１が40.3cm、Ｐ２が14.8cmである。貯蔵穴はカマドの左に設けられている。形態は円形で、直径30cm、深さ20cmである。壁溝は、幅17～25cm、深さ５cmであり、全周していたものと考えられる。

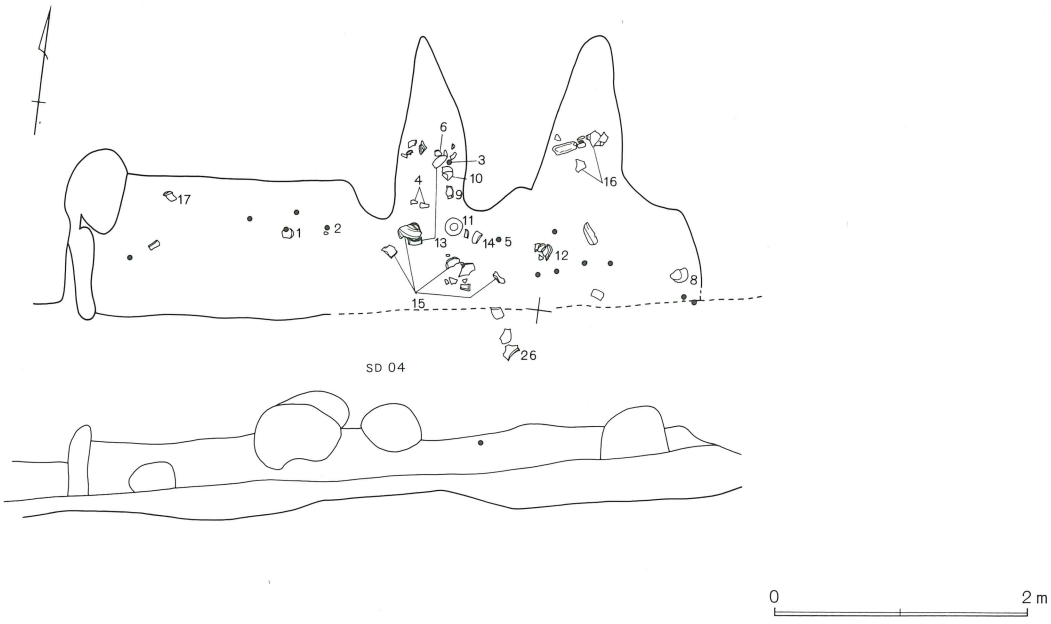
カマドは北壁に２基設置されている。西側をカマドＡ、東側をカマドＢとする。新旧および同時併存であったのかは明らかにできなかった。しかし、カマドＢの袖が残存していないことからカマドＡが造り替えられた新しいカマドの可能性が考えられる。規模はカマドＡが長さ1.68m、焚口幅60cmである。カマドＢは長さ1.58m、焚口幅58cmである。２基の規模はほぼ同じであり、構造は、燃焼部の火床が床面から13cm掘り下げ、長さ80cm程の掘り込みをもつ。掛け口は壁外にあったと考えられ、煙道は長く伸び徐々に立ち上がり屋外に排気する。カマド袖は地山のロームが屋内にわずかに伸びている。

出土遺物は、須恵器の坏、椀、蓋、壺、鉢、土師器甕が検出され、若干の瓦片を確認した。１～12は須恵器坏で８・９・12は糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリを施す。10・11は糸切り離しのままである。13は椀である。やはり、糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリを施す。15は須恵器長頸壺である。頸部は欠損し、張りをもつ肩部から貼り付けの高台をもつ底部にかけて残存する。外面肩部から胴部にかけて自然釉が流れている。16は「コ」の字状口縁甕である。18～20は平瓦である。いずれも、凸面には横ナデ後、部分的に格子叩きを施し叩き締められている。凹面は細かい布目痕を認める。

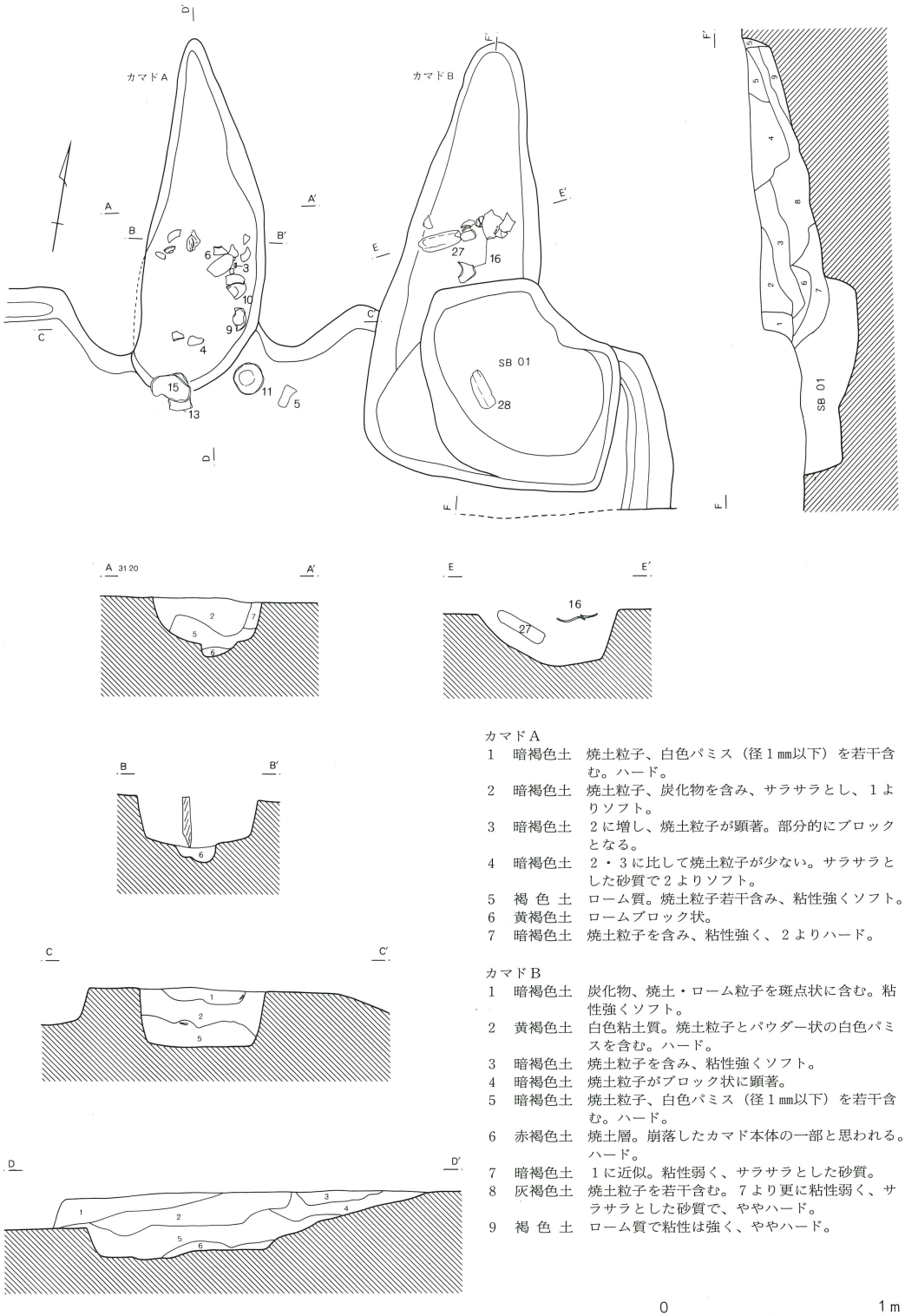
22～25は弥生土器の小片である。22・23は、台付甕の口縁部破片である。どちらも口唇部きざみをもち、内外面に粗い刷毛目後、横ナデを施す同様の技法である。24は甕の胴部破片で、器肉やや



1　暗褐色土　焼土・炭化粒子、ブロックを多く含み、ローム粒子を混在。しまりややもつ。
2　黒褐色土　炭化粒子を主体。しまり弱い。
3　褐 色 土　ローム・焼土粒子を多く含み、しまりやや弱い。
4　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまり弱い。
5　黄褐色土　ローム土を主体。



第48図　第13号住居跡・遺物分布図



カマドA

1　暗褐色土　焼土粒子、白色パミス（径１㎜以下）を若干含む。ハード。
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を含み、サラサラとし、１よりソフト。
3　暗褐色土　２に増し、焼土粒子が顕著。部分的にブロックとなる。
4　暗褐色土　２・３に比して焼土粒子が少ない。サラサラとした砂質で２よりソフト。
5　褐 色 土　ローム質。焼土粒子若干含み、粘性強くソフト。
6　黄褐色土　ロームブロック状。
7　暗褐色土　焼土粒子を含み、粘性強く、２よりハード。

カマドB

1　暗褐色土　炭化物、焼土・ローム粒子を斑点状に含む。粘性強くソフト。
2　黄褐色土　白色粘土質。焼土粒子とパウダー状の白色パミスを含む。ハード。
3　暗褐色土　焼土粒子を含み、粘性強くソフト。
4　暗褐色土　焼土粒子がブロック状に顕著。
5　暗褐色土　焼土粒子、白色パミス（径１㎜以下）を若干含む。ハード。
6　赤褐色土　焼土層。崩落したカマド本体の一部と思われる。ハード。
7　暗褐色土　１に近似。粘性弱く、サラサラとした砂質。
8　灰褐色土　焼土粒子を若干含む。７より更に粘性弱く、サラサラとした砂質で、ややハード。
9　褐 色 土　ローム質で粘性は強く、ややハード。

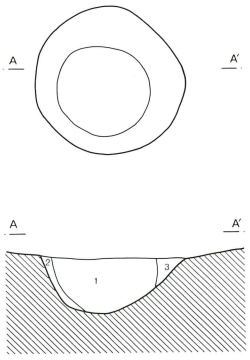
0　1 m

第49図　第13号住居跡カマド

厚く外面に刷毛目をもつ。25は壺の底部破片で、外面は刷毛目を、内面は篦ナデを施す。

27・28はカマド内から検出した。27は緑泥片岩の支脚である。28は片岩で先端および両側が鋭角で刃部の可能性があり、加工用の石器と考えられる。

時期は稲荷前Ⅹ期と考えられる。

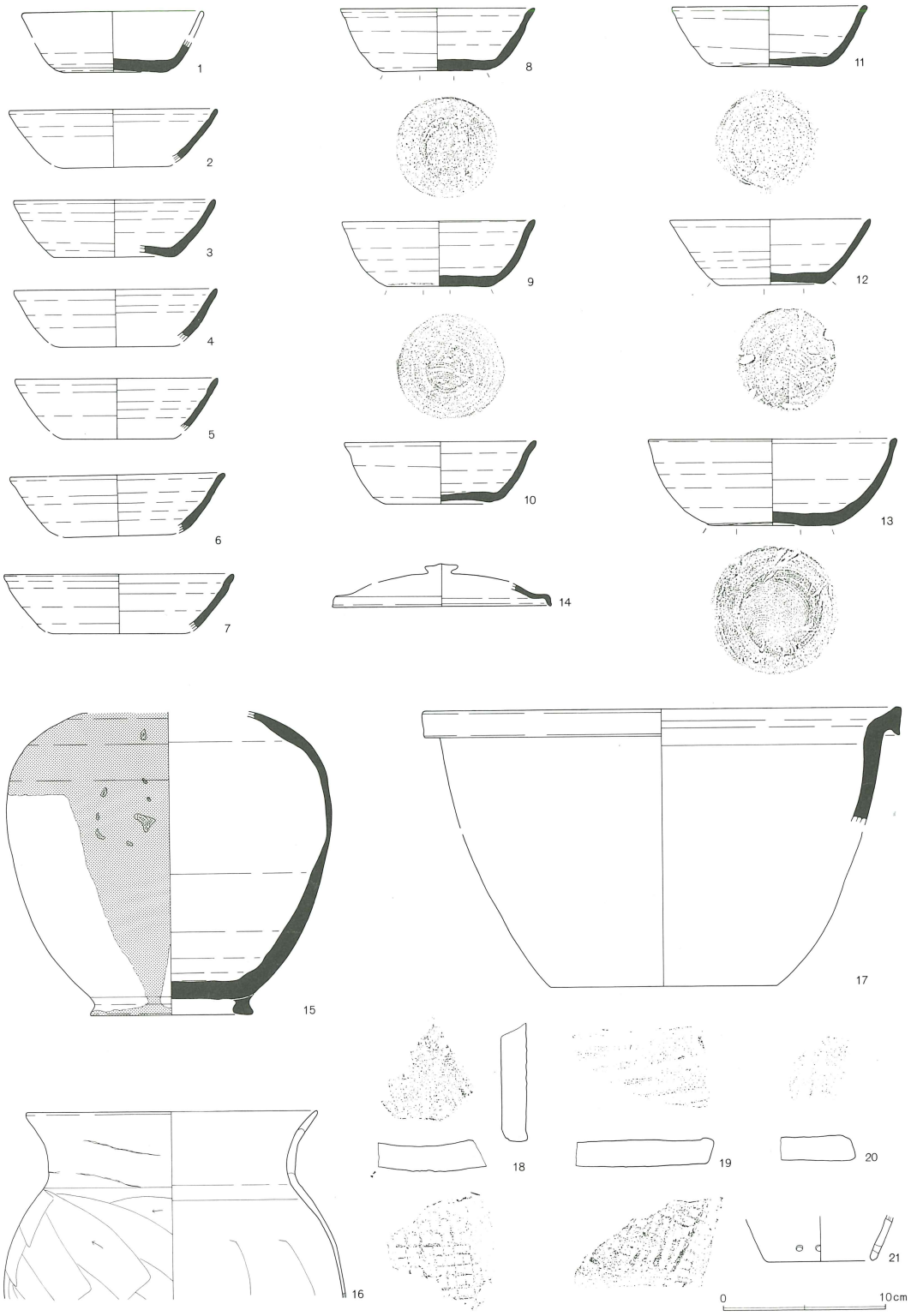


1　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、きめやや細かい。
2　黄褐色土　ローム土を混在。しまり粘性もつ。
3　暗褐色土　1に比べ、焼土・炭化粒子を少量含む。

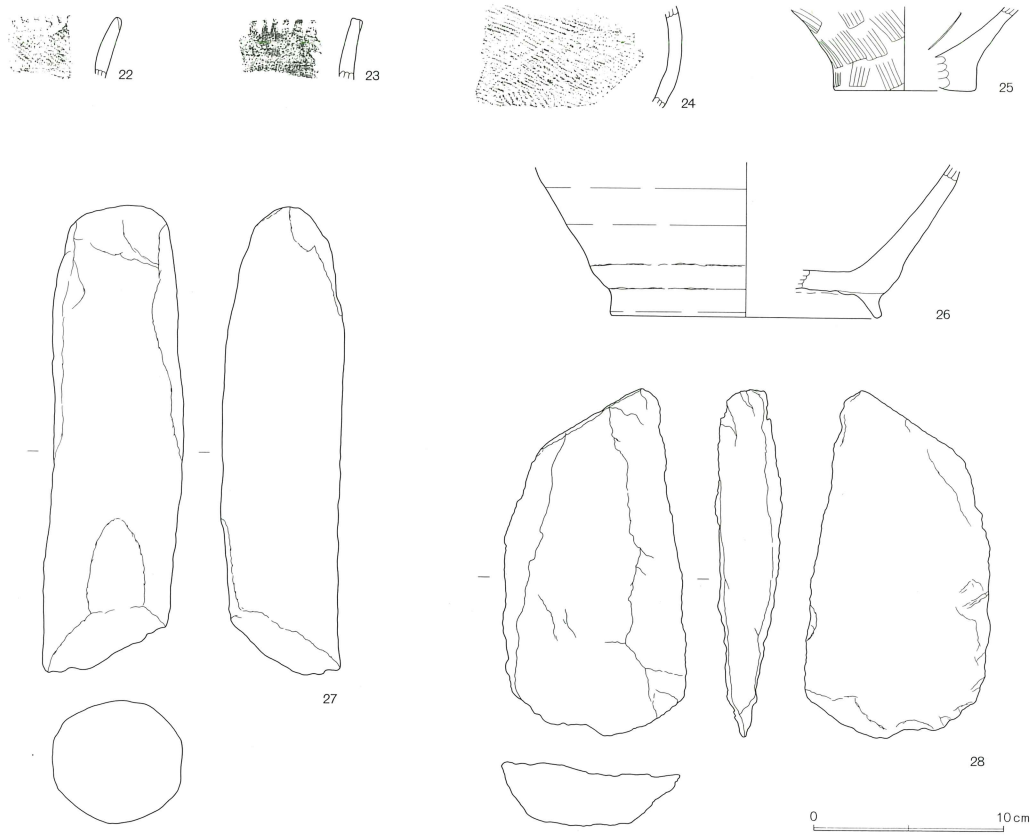
第50図　第13号住居跡貯蔵穴

第13号住居跡出土遺物観察表（第51・52図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏		1.8	6.9	CDF	A	褐灰色	40%	№21
2	坏	(12.8)	3.3		CDF	B	灰色	20%	№17　覆土
3	坏	12.4	3.5		BCDF	B	灰色	70%	№35　カマドA覆
4	坏	(12.5)	3.5		CDF	B	灰色	20%	№45.46
5	坏	(12.4)	3.2		CDF	B	灰色	20%	№30
6	坏	(13.2)	3.6		CDF	B	灰色	20%	№39　覆土
7	坏	(14.1)	3.5		BCDF	C	灰色	25%	カマドA　覆土
8	坏	12.0	3.8		BCDF	A	青灰色	80%	№1　覆土
9	坏	(12.0)	4.0		BCDF	A	灰色	60%	№32　覆土
10	坏	11.8	3.8		BCDF	B	灰色	55%	№33
11	坏	11.9	3.6	6.4	CDF	A	青灰色	100%	№31
12	坏	12.4	4.0		BCDF	B	黒褐色	70%	№9　覆土
13	椀	15.2	5.3	7.6	BCDF	A	灰色	80%	№48
14	蓋	(13.5)	2.3		BCDF	A	青灰色	10%	№13
15	壷		18.5	10.0	BCD	A	灰色	70%	№12,15,16,26,47　覆土
16	甕	(18.0)	11.5		ABCD	B	橙褐色	25%	№50,51
17	鉢	(29.5)	8.2		BCDF	B	灰色	10%	№24
18	平　瓦				CF	B	灰色		覆土
19	平　瓦				CF	B	褐灰色		覆土
20	平　瓦				CF	B	灰色		覆土
21	甑		2.8	86.5)	ACF	B	橙褐色	10%	覆土
22	甕				BCDF	A	褐色	5%	覆土
23	甕				BCDF	A	橙褐色	5%	覆土
24	甕				BCDF	A	橙褐色	5%	覆土
25	甕		4.4	7.4	BCDF	A	橙褐色	20%	覆土
26	鉢		8.1	(14.2)		C	白灰色	25%	覆土。常滑系
27	石　器					A	褐色		№54
28	石　器								№56



第51図　第13号住居跡出土遺物(1)



第52図　第13号住居跡出土遺物(2)

第14号住居跡（第53図）

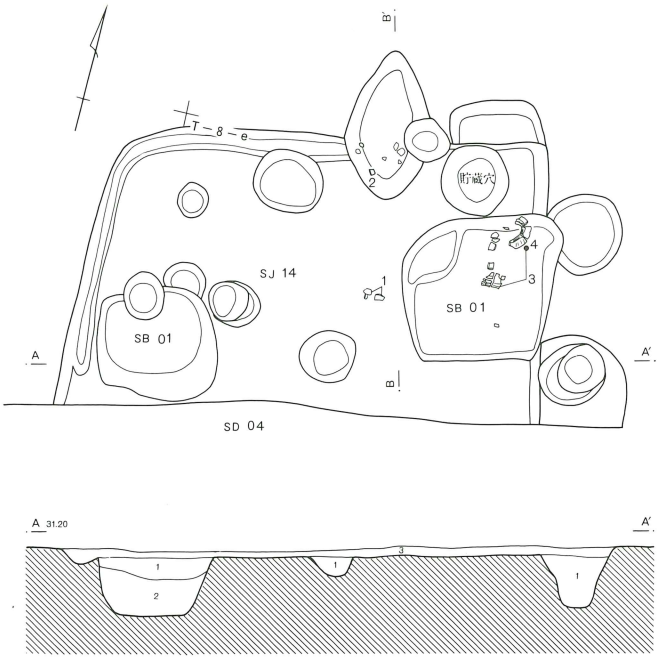
Ｔ－７・８区に位置する。本住居跡は調査区南西隅にあたり、周辺には第１～４号住居跡、すぐ西側には同じ主軸方向をもつ第13号住居跡が存在する。南側は調査区域外に伸びる。重複遺構は、住居跡中央を東西に走る中世の第４号溝跡が存在し、また、本住居跡は第１号掘立柱建物跡を壊している。平面形態は長方形と推定され、やや大型の住居跡である。規模は長軸3.87m、短軸(2.14)m、深さ７cmである。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。

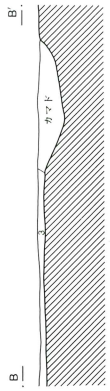
床面は、第４号溝に中心部分を壊されているためほとんど残存しない。辛うじてカマドの取付く北壁側のみ残り、全体に平坦で地山のロームを利用している。主柱穴は検出できなかった。貯蔵穴はカマドの右側に設けられ、形態は円形で直径55cm、深さ17.2cmである。壁溝は、幅15～20cm、深さ５cmであり、北・西壁に取付いている。

カマドは北壁やや東寄りに設置され、規模は長さ1.17m、焚口幅55cmである。構造は、燃焼部の火床が床面から16cm掘り下げ、煙道はやや短く徐々に立ち上がり屋外に排気する。

出土遺物は、須恵器の坏、土師器甕が検出された。１は褐色で焼成、整形ともやや粗雑な須恵器坏である。内外面には火襷の跡が残る。２は須恵器の皿である。３・４は床面から出土した「コ」の字状口縁甕である。

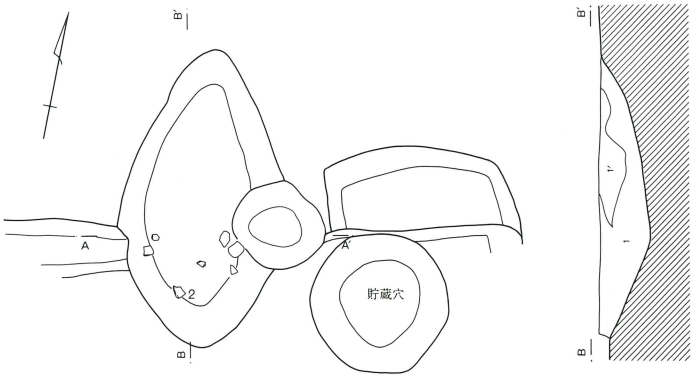
時期は稲荷前XIII期と考えられる。

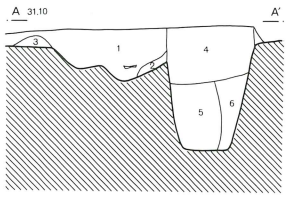




1　暗褐色土　黄褐色ローム、焼土粒子含む。
2　黒 色 土　ロームブロックとの混合層。
3　暗褐色土　炭化物、焼土粒子を少量含み、しまり弱い。

0　2 m

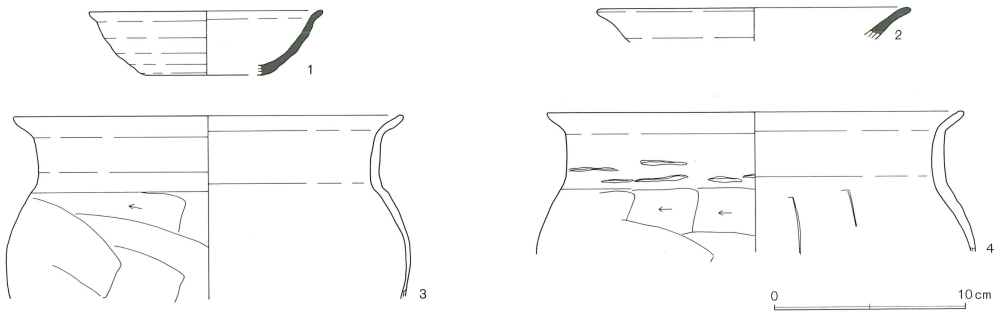




1　暗褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
1'　暗褐色土　焼土ブロック特に多く含む。
2　黄褐色土　ローム粘土を主体。
3　褐 色 土　1に比べ焼土ブロック混在。
4　黒褐色土　焼土・炭化粒子を含む。しまりややもつ。
5　暗褐色土　焼土・ローム粒子を含み、しまりやや弱い。
6　褐 色 土　ローム土を含み、粘性しまりもつ。

0　1 m

第53図　第14号住居跡・カマド



第54図　第14号住居跡出土遺物

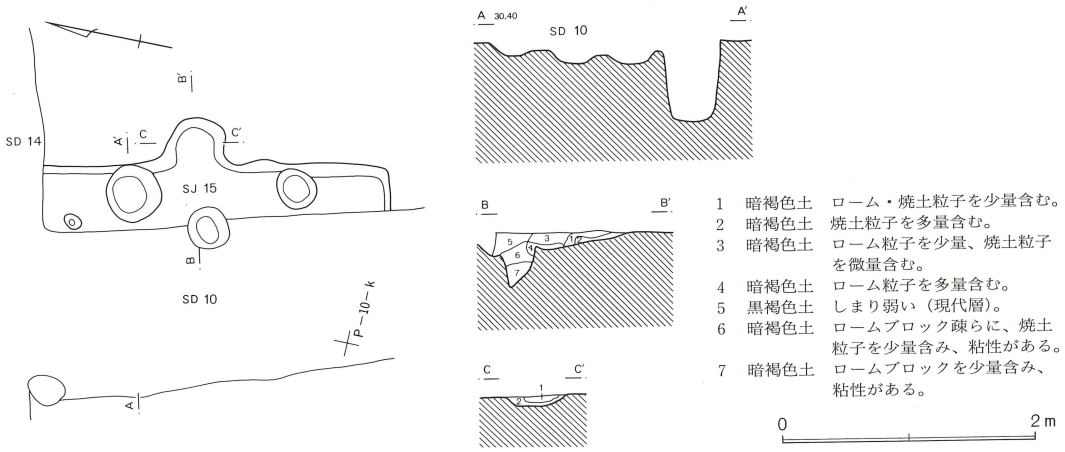
第14号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.4		BCDF	C	黄褐色	40%	№5,7
2	皿	(16.6)	1.7		BCDF	C	淡灰色	10%	カマドNo.11
3	甕	20.6	9.7		ABCD	B	橙褐色	20%	№1,4
4	甕	(22.0)	7.4		ABCD	B	褐色	40%	№4

第15号住居跡（第55図）

P－10区に位置する。本住居跡は東側調査区の西端にあたり、周辺には第18号住居跡がすぐ東側に存在し、西側は調査区域外に伸びている。重複遺構は、住居跡中央を南北に走る中世の第10・12号溝跡に壊され、北壁は、第14号溝跡が東西に走り壊されている。さらに、中世の第19号掘立柱建物跡にも壊され、住居跡の形態を留めない。辛うじて、カマドの取付く東壁が確認でき住居跡と判断できた。平面形態は不明である。規模は南北(2.57)m、深さ9cmである。主軸方向はN－75°－Eである。

床面は、東壁寄りの幅25cm程が残存するだけで地山のロームを利用している。覆土は、第1～4



第55図　第15号住居跡・カマド

層がカマドおよび住居跡の覆土で、第５層は第10号溝跡、第６・７層は住居跡よりも新しく溝よりも古い柱穴の覆土である。主柱穴・貯蔵穴は、確認できず、壁溝も検出されなかった。

カマドは東壁に設置され、規模は長さ0.40m、焚口幅46cmである。構造は、燃焼部の火床が床面とほとんど変わらず掘り込みを持たない。カマド袖は残存せず、掛け口は壁と同じか、壁よりも外にあったと考えられる。煙道は短く立ち上がり屋外に排気する。

出土遺物は、検出されなかった。

時期は不明である。

第16号住居跡（第57図）

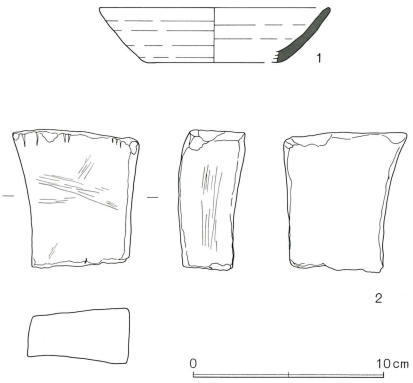
Ｓ－13区に位置する。北東に向けて舌状に伸びた台地の東側肩口縁辺部で、東側調査区の南隅にあたる。すぐ東側にはほぼ同じ主軸方向をもつ第17号住居跡が存在する。平面形態は、南壁および西壁が調査区域外に伸びているため不明である。規模は長軸(4.30)m、短軸(2.15)m、深さ７cmである。主軸方向はＮ－21°－Ｗである。

床面は全体に平坦で地山のロームを利用し、主柱穴は貯蔵穴の脇にP_1を確認した。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。形態は隅丸の長方形をしており、規模は長軸91cm、短軸62cm、深さ22cmである。第１・２層が貯蔵穴の覆土と考えられ、第３層は新たに掘り込まれた遺構の覆土と考えられる。壁溝は検出されなかった。

カマドは北壁に設置されている。規模は長さ1.42m、焚口幅57cmである。構造は、燃焼部の火床が床面から20cm掘り下げ掘り込みをもち、覆土の堆積状況から見ると、第３層は灰層と考えられる。また、第４層は赤褐色土で良く焼けていることから天井の崩落土と思われ、その一部が18cm程切れていることからこの部分が掛け口部分にあたるものと推定される。煙道は長く伸び徐々に立ち上がり屋外に出る。カマド袖は地山のロームが屋内にわずかに伸びている。

出土遺物は、カマド内から土師器甕の胴部破片を検出した。このほか、土師器鉢・台付甕の破片も検出した。また、カマド左側の北壁際から１の須恵器坏と２の砥石を検出した。砥石は、やや幅広の上面および側面には擦痕が見られ使用したものと考えられ、先端部も角が欠け落ちている。砥石中央の細くくびれた部分で欠損している。

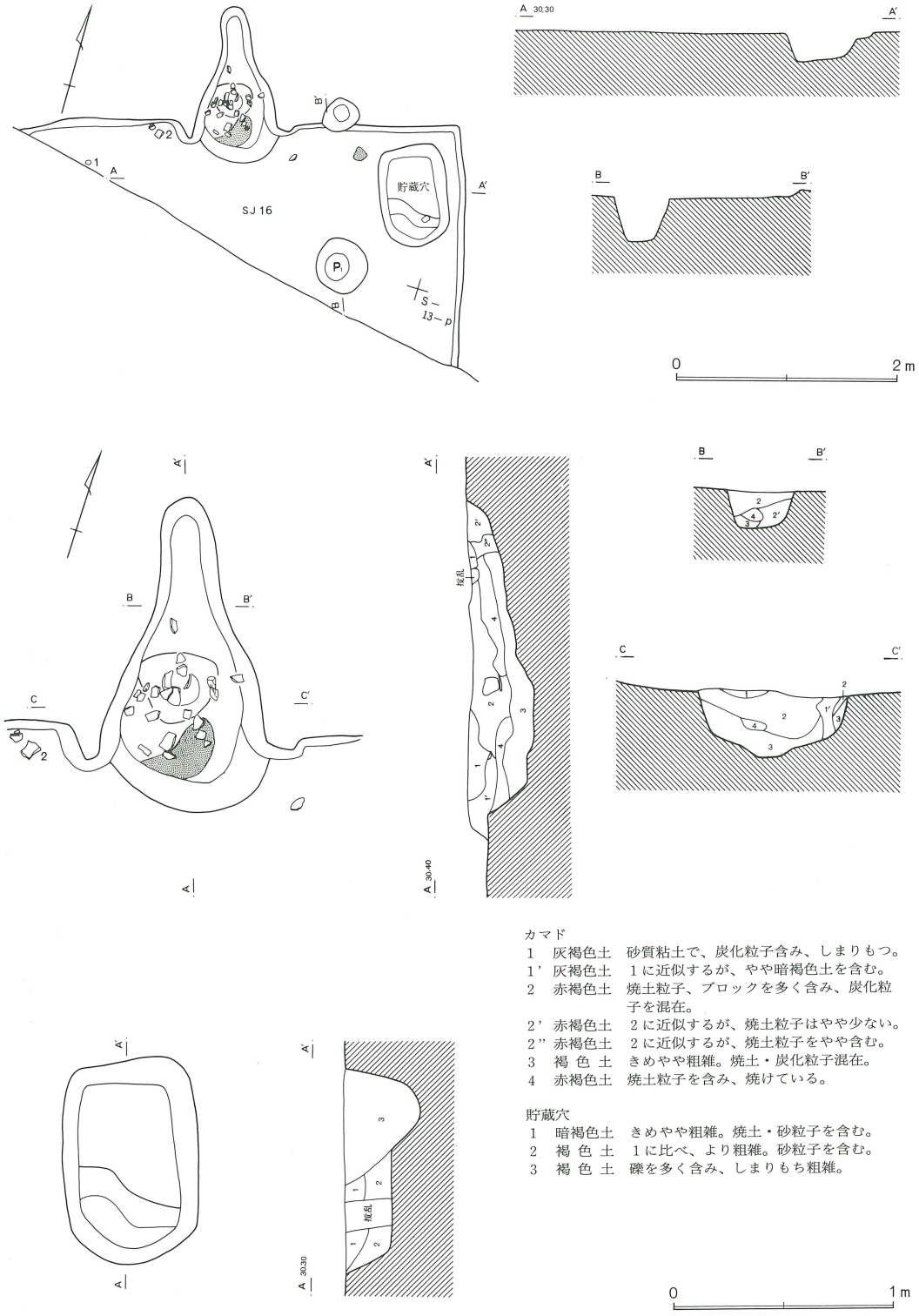
時期は稲荷前Ⅵ～Ⅶ期と考えられる。



第56図　第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	2.9		ＢＣＤＦ	Ａ	青灰色	10%	№28
2	砥　石								№24



カマド

1　灰褐色土　砂質粘土で、炭化粒子含み、しまりもつ。
1'　灰褐色土　1に近似するが、やや暗褐色土を含む。
2　赤褐色土　焼土粒子、ブロックを多く含み、炭化粒子を混在。
2'　赤褐色土　2に近似するが、焼土粒子はやや少ない。
2''　赤褐色土　2に近似するが、焼土粒子をやや含む。
3　褐色土　きめやや粗雑。焼土・炭化粒子混在。
4　赤褐色土　焼土粒子を含み、焼けている。

貯蔵穴

1　暗褐色土　きめやや粗雑。焼土・砂粒子を含む。
2　褐色土　1に比べ、より粗雑。砂粒子を含む。
3　褐色土　礫を多く含み、しまりもち粗雑。

第57図　第16号住居跡・カマド・貯蔵穴

第17号住居跡（第59図）

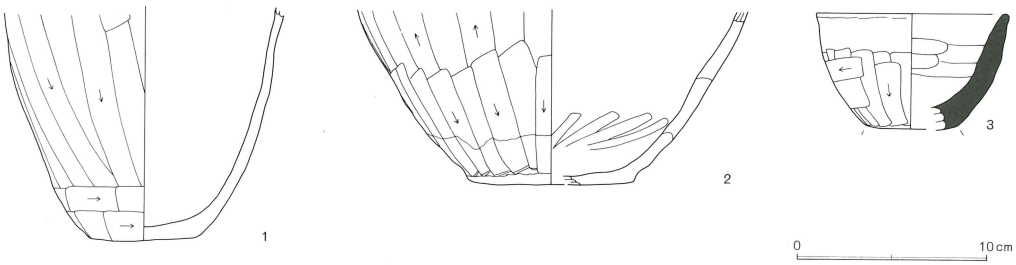
Ｓ－13・14区に位置する。本住居跡は、第16号住居跡の東側に隣接している。平面形態は、西壁および南壁が調査区域外に伸びているため不明である。規模は長軸(3.72)m、短軸(3.05)m、深さ13cmである。主軸方向はＮ－15°－Ｗである。

床面は中央部がやや踏み固められて堅くしまっている。全体に平坦で地山のロームを利用している。主柱穴は北側のＰ１・Ｐ２があたると考えられる。深さはＰ１が20cm、Ｐ２は30cmである。貯蔵穴はカマドの右側に設けられ、ほぼ円形をしており、長軸94cm、短軸84cm、深さ22cmである。壁溝は検出されなかった。

カマドは北壁の中央に設置されている。規模は長さ1.89m、焚口幅57cmである。構造は、燃焼部の火床は床面から６cm程掘り下げられ、長さ1.07m程の掘り込みをもち中心部は焼けている。また、その部分に土師器甕の底部が逆位の状態で検出されたことから支脚として利用されていたものと考えられる。煙道は長く伸び徐々に立ち上がり屋外に出る。カマド袖は地山のロームが屋内に伸び、地山の造り出しのカマド袖である。

出土遺物は、１が支脚に転用された土師器甕である。底部のみの残存であるため全体の器形は不明だが、形態としては長胴気味の甕と見られ、胴部やや張りをもち底径はやや大きい。器肉は厚く胎土はやや粗い。整形は胴部下半を上から下方向に縦ヘラケズリを施し、底部下端を横方向のヘラケズリが見られる。２は土師器壺の底部と考えられる。底部の中央に穴が開けられており、甑として転用されていた可能性もある。やや大きめの底部から胴部は大きく開いて外傾に立ち上がる。底部と胴部の２箇所に輪積み痕が見られる。整形は胴部上方向の縦ヘラケズリの後、底部下端を下方向へのヘラケズリを施す。１・２とも白色針状物質を含まず、１は雲母片が目立つ。３は須恵器鉢である。

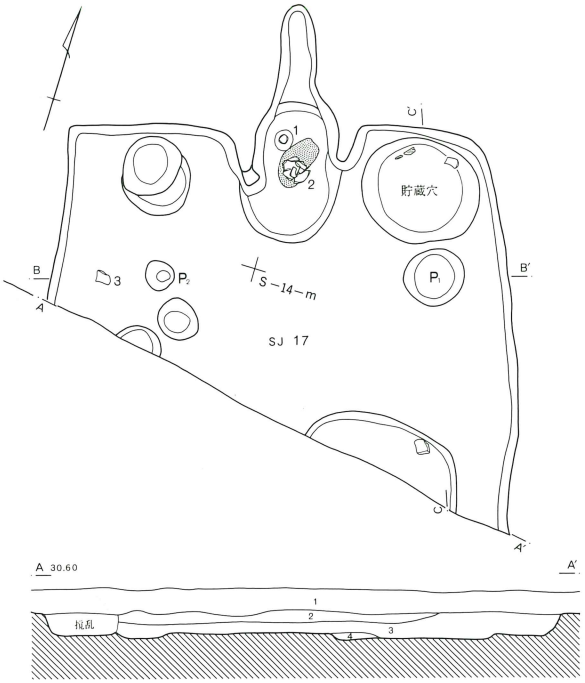
時期は稲荷前Ⅲ期と考えられる。

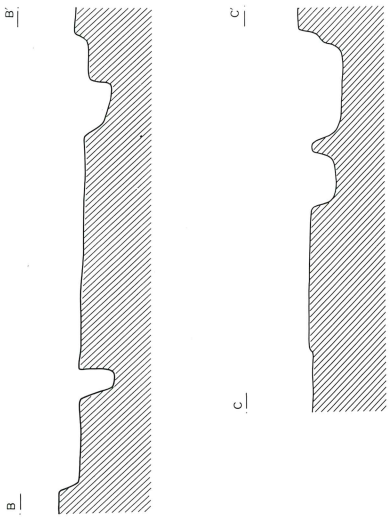


第58図　第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物観察表（第58図）

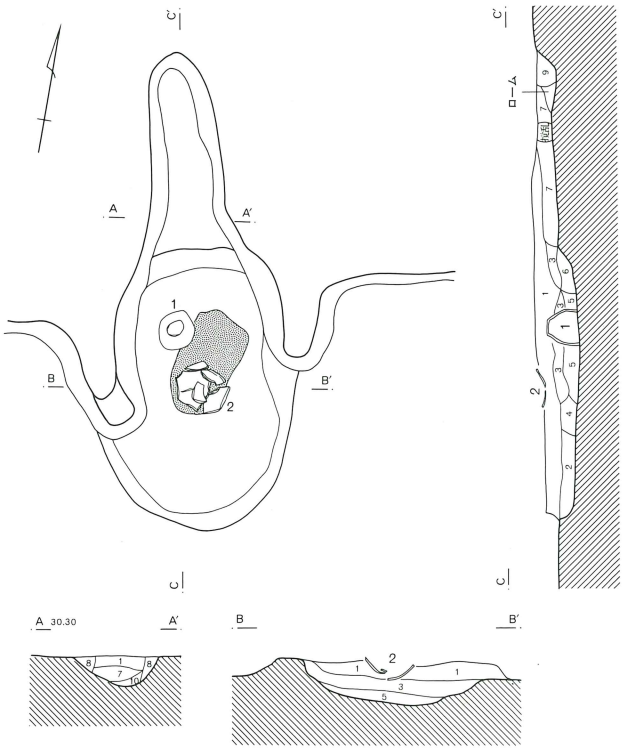
番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕		12.3	5.9	ＢＣＤＦ	Ｂ	橙褐色	40%	カマドNo.2
2	壺		9.2	8.8	ＡＢＣ	Ａ	茶褐色	40%	カマドNo.1
3	鉢	(10.2)	6.1		ABCDF	Ｂ	灰色	40%	No.5





1　褐 色 土　耕作土。
2　黒褐色土　ロームブロックを含み、しまり弱い。
3　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、ローム粒子混在。
4　赤褐色土　焼土・炭化粒子を含む。しまり弱い。

0　2 m



1　暗褐色土　焼土・ローム・砂粒子を混在。
2　暗褐色土　焼土粒子、ブロックを含む。砂粒子を混在。
3　赤褐色土　ローム土を含み、砂粒子を混入。
4　褐 色 土　焼土粒子、ブロックを含み、炭化粒子を混在。
5　褐 色 土　ローム土、砂粒子を含む。
6　茶褐色土　若干の焼土・炭化粒子を含む。
7　褐 色 土　ローム・砂粒子を混在。
8　赤褐色土　焼土粒子、ブロックを主体。
9　暗褐色土　焼土粒子を含む。しまり弱い。
10　黄褐色土　ローム粒子を含む。しまり強い。

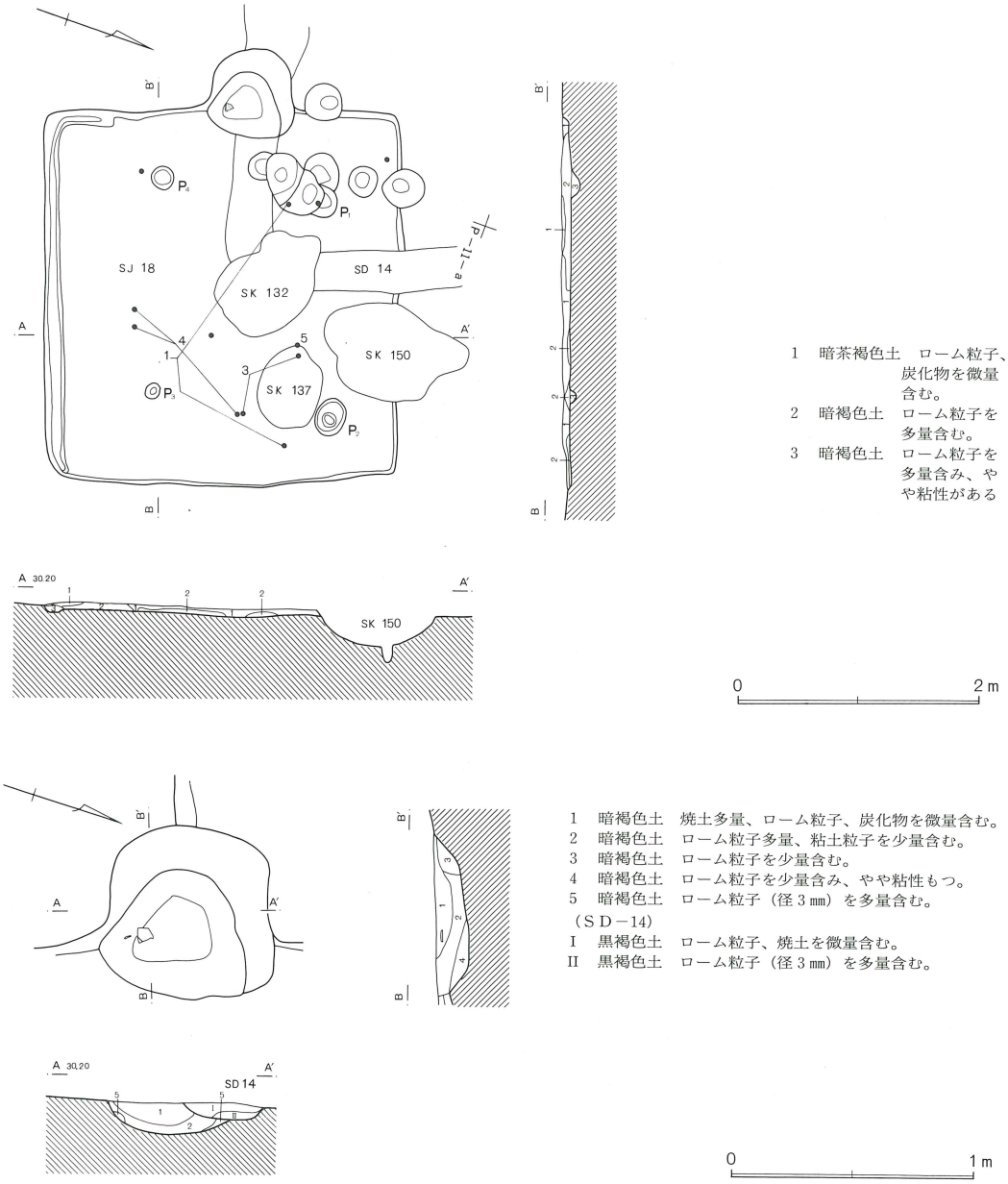
0　1 m

第59図　第17号住居跡・カマド

第18号住居跡（第60図）

Ｐ－10・11区に位置する。本住居跡は東側調査区の中央西寄りにあたり、周辺には第15号住居跡が存在する。重複遺構は、第132・137・150号土壙と第14号溝跡が存在しこれらに壊されている。平面形態は方形で、中型の住居跡である。規模は長軸3.07m、短軸3.00m、深さ８cmである。主軸方向はＳ－60°－Ｗである。

床面は第14号溝に中央部分を「Ｌ」字状に壊され、中世の土壙にも壊されているため西側部分しか残存していないが、平坦で地山のロームを利用している。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４があたると考え



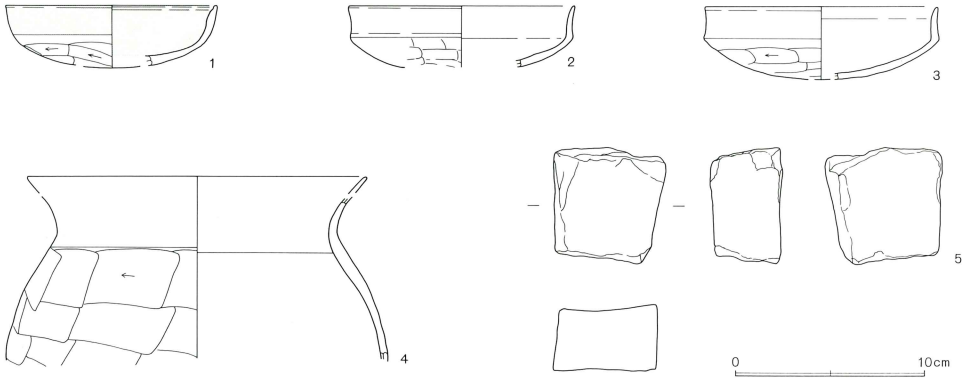
第60図　第18号住居跡・カマド

られる。深さはそれぞれ、Ｐ１が17cm、Ｐ２が９cm、Ｐ３が３cm、Ｐ４が８cmである。貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は、南西コーナーから南東コーナーにかけて検出され、幅13～18cm、深さ５cmである。

カマドは西壁に設置され、北側半分を第14号溝に壊されているもののカマド掘り方は辛うじて残存している。規模は長さ0.72m、焚口幅73cmである。構造は、燃焼部の火床が床面から８cm程の掘り込みをもつ。煙道は短く屋外に立ち上がり、カマド袖は検出できなかった。

出土遺物は、住居跡南側から比企型の土師器坏と土師器甕を検出した。１は口縁部外面から内面にかけて赤彩が施され、胎土中には白色針状物質を含む。２～４は胎土中に白色針状物質を含まない。４は「く」字状口縁甕である。

時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。



第61図　第18号住居跡出土遺物

第18号住居跡出土遺物観察表（第61図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.2)	3.15		ＢＣＤＦ	Ｂ	赤褐色	30%	№1
2	坏	12.0	3.2		ＡＣ	Ｂ	褐色	30%	
3	坏	(12.4)	3.8		ＡＢＣ	Ｃ	褐色	30%	№7,9
4	甕		8.5		ＡＢＣＤ	Ｃ	褐色	20%	№4
5	砥　石								№8

第19号住居跡（第62図）

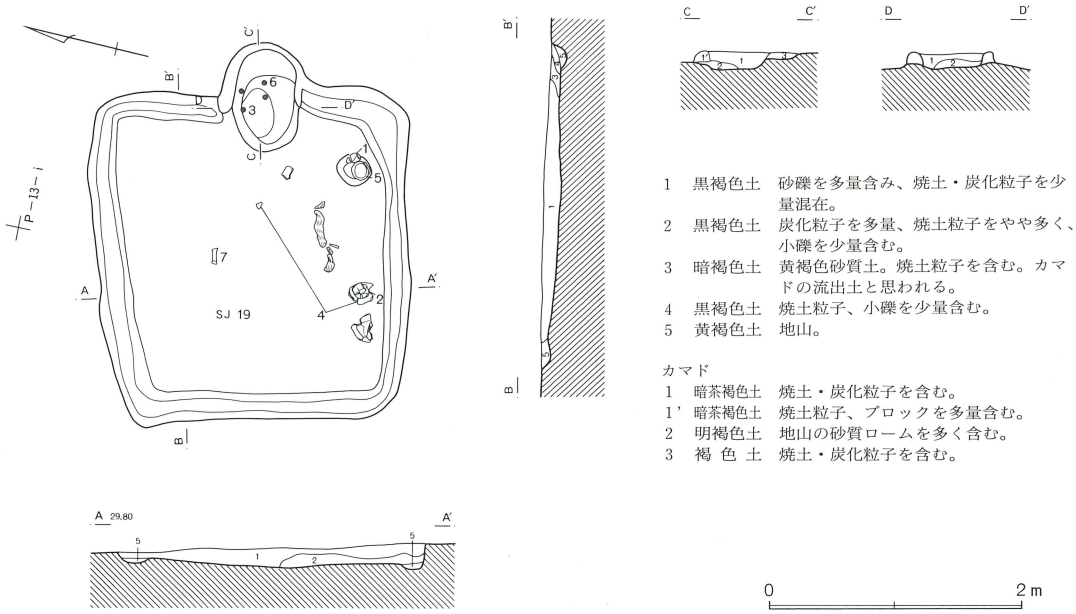
Ｐ－12・13区に位置する。本住居跡は北東に伸びる舌状台地の東側縁辺で、東側の調査区中央にあたる。南側に第20号住居跡、北側に第22号住居跡が存在する。平面形態は、東壁に比べ西壁がやや短いがほぼ方形の小型の住居跡である。規模は長軸2.62m、短軸2.50m、深さ15cmである。主軸方向はＮ－79°－Ｅである。

床面は中央に向かって緩やかに傾斜する。中央の凹みには炭化物・焼土を多量に含む黒色土が堆積し、床面から炭化材も検出した。焼失家屋の可能性が考えられる。また、カマドの右側にピット状の掘り込みがあり貯蔵穴の可能性が考えられる。壁溝は、幅15～25cm、深さ５cmを測り全周する。

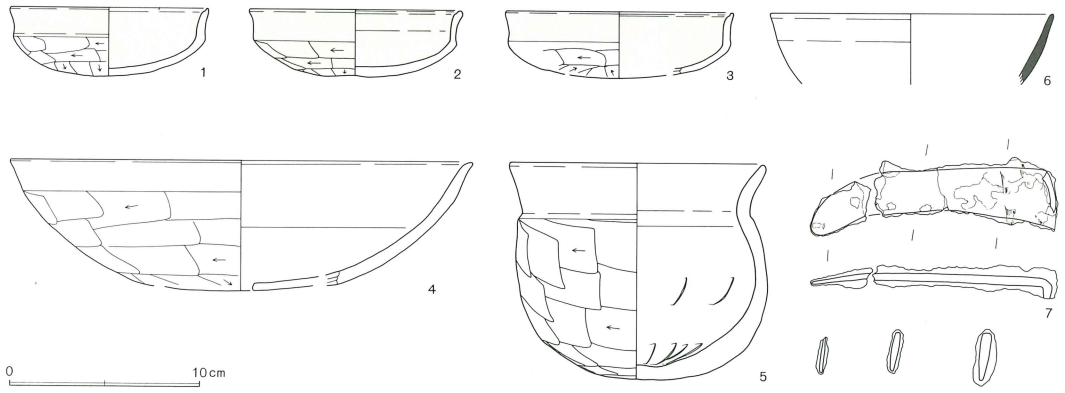
カマドは東壁に設置され、規模は長さ0.86m、焚口幅56cmである。構造は、燃焼部の火床が床面から6cm程の掘り込みをもつ。煙道は短く屋外に立ち上がり、カマド袖はほとんど残存せず、わずかに、ロームを張り込んだ痕跡が見られる。

出土遺物は、1～3が土師器の比企型坏である。いずれも、口唇部内面に沈線をもち、口縁部から体部内面にかけて赤彩を施す。また、胎土中には短い白色針状物質が含まれる。6は口唇部の器肉やや薄く、体部が厚い須恵器坏である。4は土師器の鉢型をした甑と考えられる。5は短頸の土師器鉢である。7は鉄製の鎌で、全長12.9cm、基部幅3.1cmで、刃部は弓なりになり基部を折り返す形態である。

時期は稲荷前Ⅴ期と考えられる。



第62図　第19号住居跡



第63図　第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物観察表（第63図）

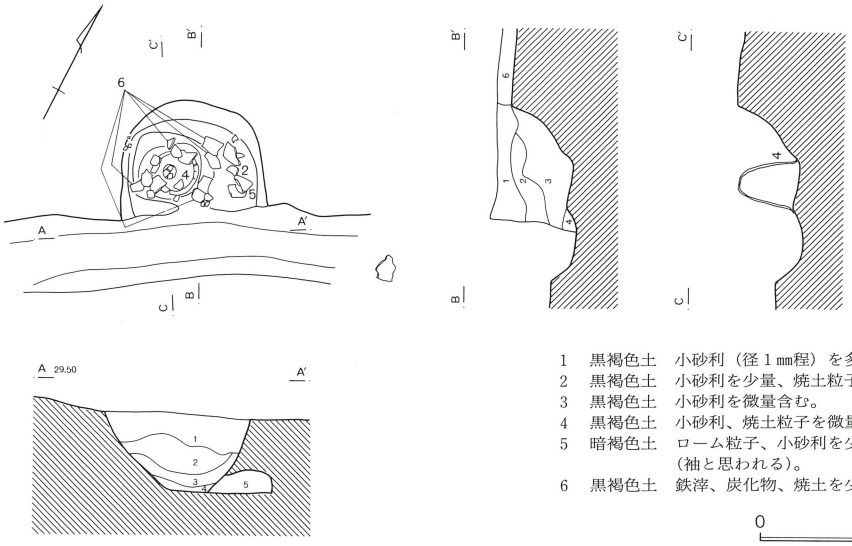
番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.5	3.6		ＡＢＣＦ	Ｂ	赤褐色	95%	№6
2	坏	12.1	3.5		ＡＢＣＦ	Ｂ	赤褐色	95%	№4
3	坏	(12.0)	3.5		ＡＢＣＦ	Ａ	橙褐色	10%	カマドNo.9
4	甑	24.5	6.9		ＢＣＤ	Ｃ	褐色	50%	№3,8
5	鉢	13.4	11.3		ＢＣＥ	Ｃ	褐色	95%	№5
6	坏	(15.0)	3.7		ＢＣＤＦ	Ａ	青灰色	10%	カマドNo.11
7	鉄製鎌							90%	№1

第20号住居跡（第65図）

Ｑ－13区に位置する。本住居跡は舌状台地の緩やかな東側斜面部にあたり、確認面は中世の鋳造遺構の堆積土に覆われていたため15cm程下げたところで住居跡のプランを確認した。第１層が住居跡の覆土であり、この上に滓や炉壁を含んだ中世の鋳造時の堆積土が載っており、北壁および西壁・南壁は「コ」の字状に斜面を切り込んで造られている。重複遺構としては、第６鋳造遺構群の鋳造土壙が切り込んでいる。平面形態は長方形で、やや大型の住居跡である。規模は長軸4.50m、短軸4.30m、深さ27cmである。主軸方向はＮ－31°－Ｗである。

床面は小砂利や礫を含んだローム土で形成され、中央部がやや高く壁寄りは低くなり、主柱穴はＰ１～Ｐ４があたると考えられる。住居の構造は最初に壁溝を全周させ、その後でカマドを構築している。このためカマド袖の粘土は壁溝を埋め戻して張り込んでいる。周溝は幅17～36cm、深さ13cmである。

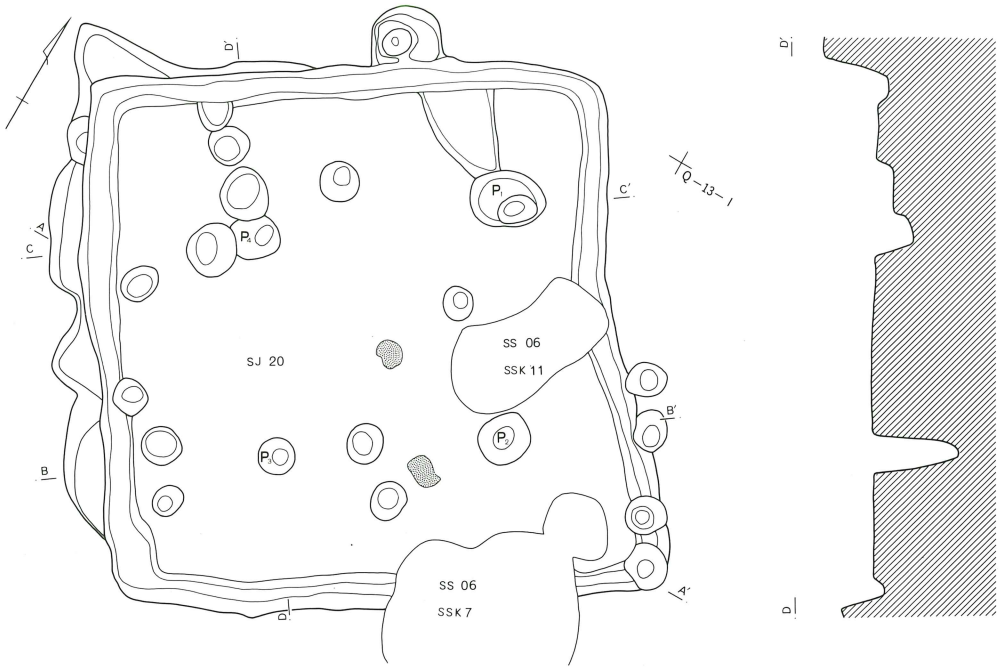
カマドは北壁に設置されている。規模は長さ(0.50)m、焚口幅59cmである。構造は壁外に半円状の掘り込みをもち、燃焼部の火床は床面からの掘り込みがほとんどない。さらに、掛け口部分には４の土師器甕が逆位の状態で据えられ、支脚として利用されたものと考えられる。煙道は短く屋外

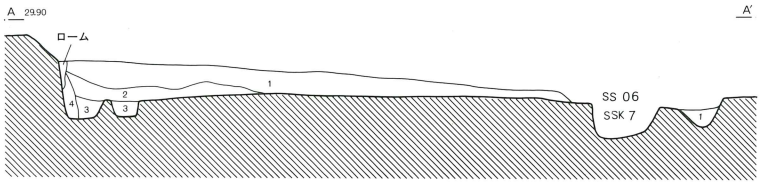


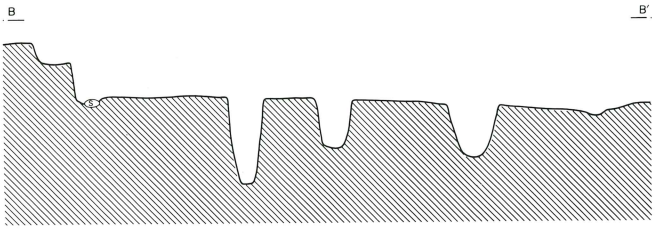
1　黒褐色土　小砂利（径１mm程）を多量含む。
2　黒褐色土　小砂利を少量、焼土粒子を疎らに含む。
3　黒褐色土　小砂利を微量含む。
4　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を微量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子、小砂利を少量、焼土粒子を微量含む（袖と思われる）。
6　黒褐色土　鉄滓、炭化物、焼土を少量含む。

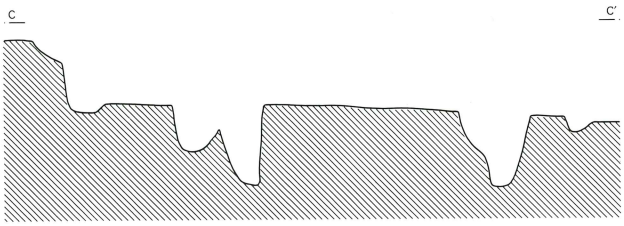
0　1m

第64図　第20号住居跡カマド





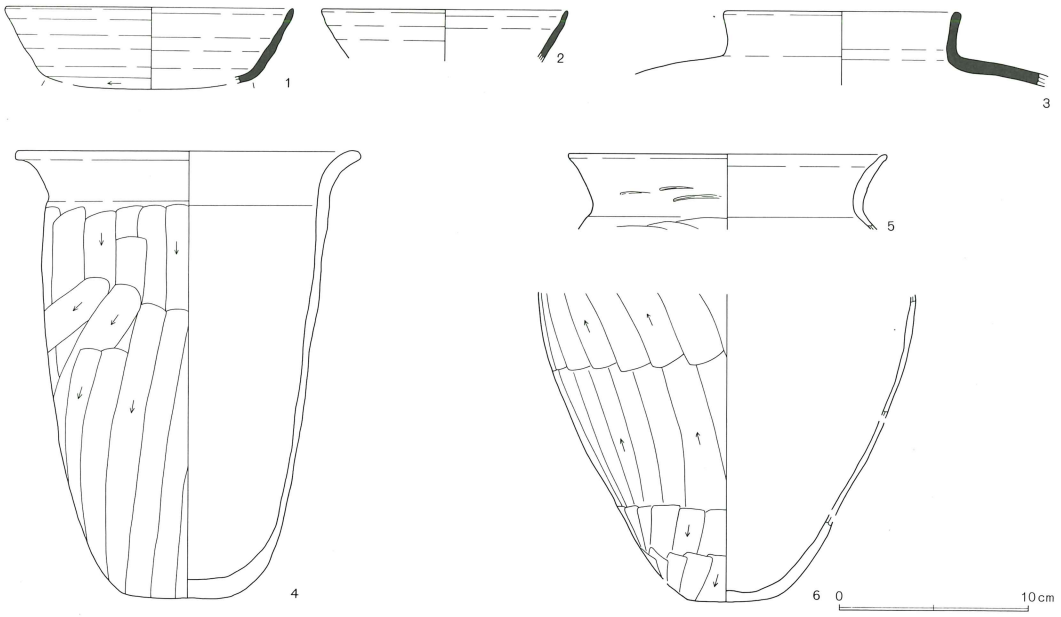




1　暗褐色土　焼土・ローム・炭化粒子を混在。しまりやや強い。
2　暗褐色土　ローム・焼土・炭化粒子、砂利を混在し、しまり強い。
3　暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりやや強い。
4　黄褐色土　ロームブロックを混在。しまりもつ。

0　2m

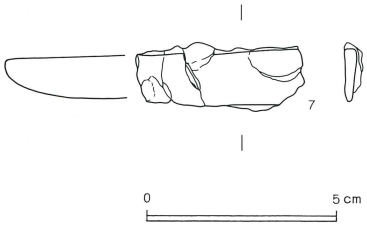
第65図　第20号住居跡



第66図　第20号住居跡出土遺物(1)

に立ち上がっていた。

出土遺物はカマドを中心に検出された。1・2は須恵器の坏、3は須恵器短頸壺である。4は土師器甕で、支脚として再利用されたために二次的な被熱がみられ器面はザラザラし、全体に細かな剝離が見られる。5は台付甕の口縁部破片である。7は刀子の刃部破片である。残存長4.5cm、最大幅1.6cmである。



第67図　第20号住居跡出土遺物(2)

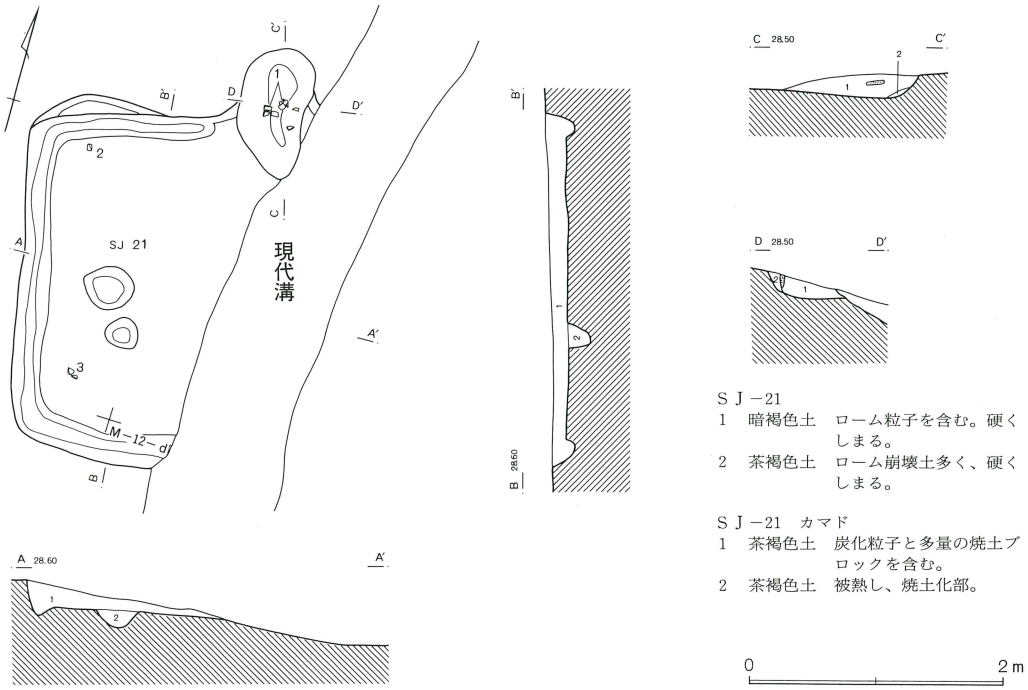
時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表（第66・67図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.2)	4.0		ＢＣＤ	Ｂ	淡灰色	10%	カマド
2	坏	(13.0)	2.7		ＢＣＤＦ	Ａ	灰色	10%	カマドNo.4
3	壺	(12.4)	3.9		ＢＣＤＦ	Ａ	灰色	10%	覆土
4	甕	18.0	23.5		ＡＢＣＤ	Ｂ	茶褐色	98%	カマドNo.25
5	台付甕	(16.8)	4.0		ＢＣＤ	Ａ	茶褐色	10%	カマドNo.5
6	甕		16.2	4.6	ＡＢＣＤ	Ｂ	褐色	40%	カマドNo.7,8,10,13,21　覆土
7	刀　子								掘り方

第21号住居跡（第68図）

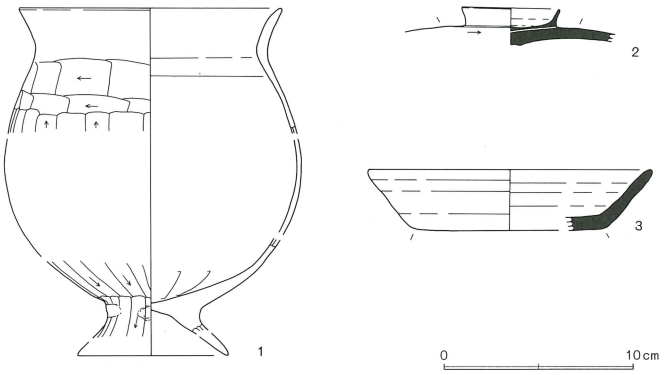
Ｌ・Ｍ－12区に位置する。本住居跡は調査区の北東にあたり、舌状に伸びた台地の東縁辺にあたる。北壁および西壁、南壁は小砂利や礫を含む地山のローム土を「コ」の字状に切り込んで造られ、住居跡の構築形態は第20号住居跡と類似し、東壁は現代の溝に壊され確認できなかった。南東方向には第24号住居跡が位置する。平面形態は方形と推定され、小型の住居跡であろう。規模は長軸2.



第68図　第21号住居跡

80m、短軸(2.25)m、深さ15cmである。主軸方向はN－22°－Wである。

床面は現代の溝に東側半分を壊され、西側は全体に平坦で地山のロームを利用し、南壁寄りが小砂利・礫を含んだローム土である。主柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。壁溝は、カマドの左側から残存する部分では全て確認でき、溝幅18～25cm、深さ８cmである。



第69図　第21号住居跡出土遺物

カマドは北壁に設置されている。規模は長さ1.01m、焚口幅48cmである。構造は、燃焼部の火床が床面からわずかに掘り込みをもち、煙道は短く屋外に立ち上がり、カマド袖は残存しない。

出土遺物は、カマド内から１の土師器台付甕を検出した。北西コーナーの床直上から２の須恵器の蓋を検出し、この形態は天井部の器肉が厚く、「ハ」の字状に開き薄く端部はシャープで、つまみは径5.2cmと大きめのリング状である。３は器肉厚く底径の大きな須恵器坏である。底部外面は回転ヘラケズリを施す。

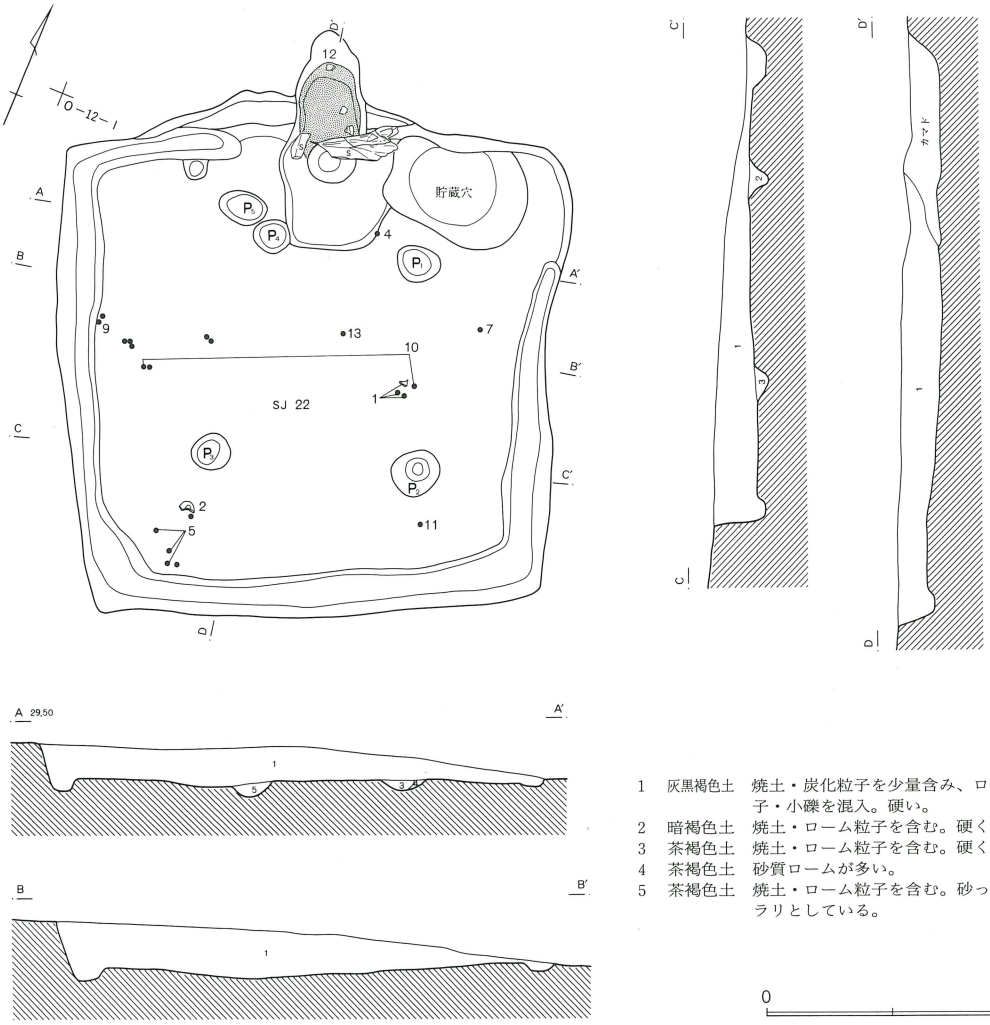
時期は稲荷前Ⅵ～Ⅶ期と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	(13.8)	18.0		ＡＢＣＤ	Ｂ	茶褐色	40%	カマドNo.1, 3, 4
2	蓋	(5.2)	1.9		ＢＣＤＦ	Ａ	灰色	40%	No.7
3	坏	(15.0)	3.2		ＢＣＤＦ	Ａ	褐灰色	10%	No.8

第22号住居跡（第70図）

Ｏ－12・13区に位置する。本住居跡は調査区の東側にあたり、舌状に伸びる台地の東側斜面部に造られていた。北壁および西壁、南壁は小砂利や礫を含む地山のローム土を「コ」の字状に切り込んで造られ、南壁は確認できずわずかに周溝の痕跡の見られる住居跡を確認した。住居跡の構築形態は第20・21号住居跡と類似し、北西のわずかに高い位置に第21号住居跡が存在する。平面形態は長方形で中型の住居跡である。規模は長軸4.70m、短軸3.80m、深さ36cmである。主軸方向はＮ－26°－Ｗである。



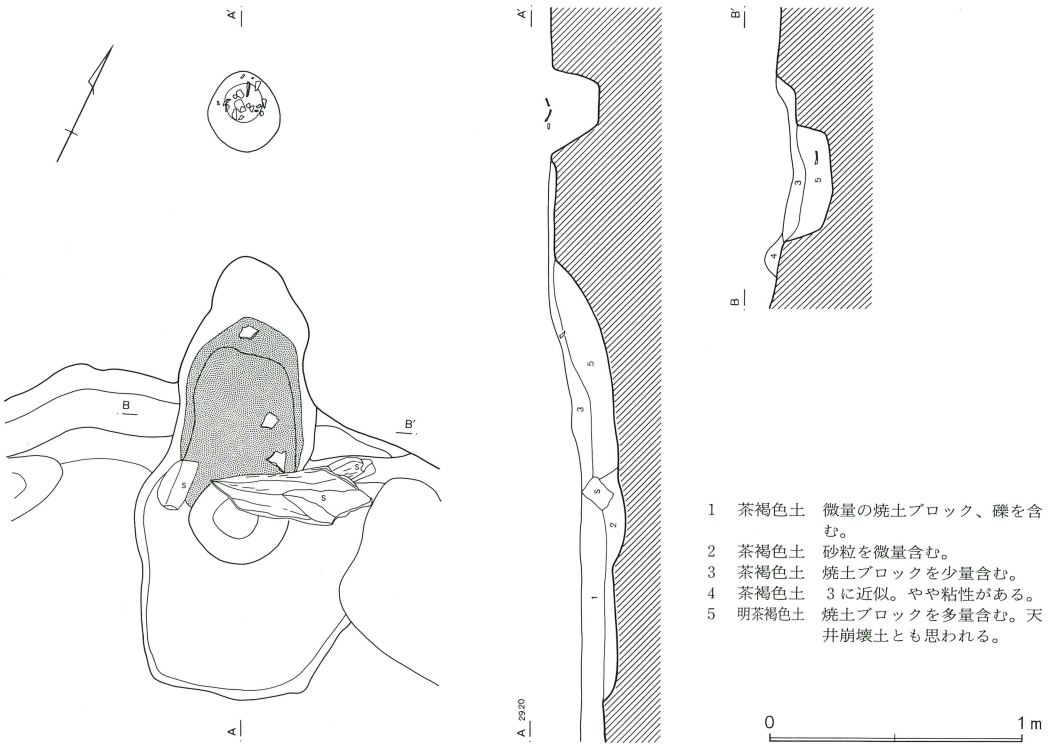
第70図　第22号住居跡

床面は堅くしまっているが、中央に向けて緩やかに傾斜し、わずかに凹んでいる。　主柱穴は、Ｐ１～Ｐ３を確認し、Ｐ４・Ｐ５は主柱穴としてははっきりしない。深さはＰ１が11.5cm、Ｐ２が18.0cm、Ｐ３が11.9cm、Ｐ４が11.7cm、Ｐ５が10.5cmである。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。煙道の先端40cmの位置に浅いピットを確認した。住居跡との関係は不明であるが覆土上面から土師器片を検出した。壁溝は、幅17～43cm、深さ10cmでありほぼ全周している。

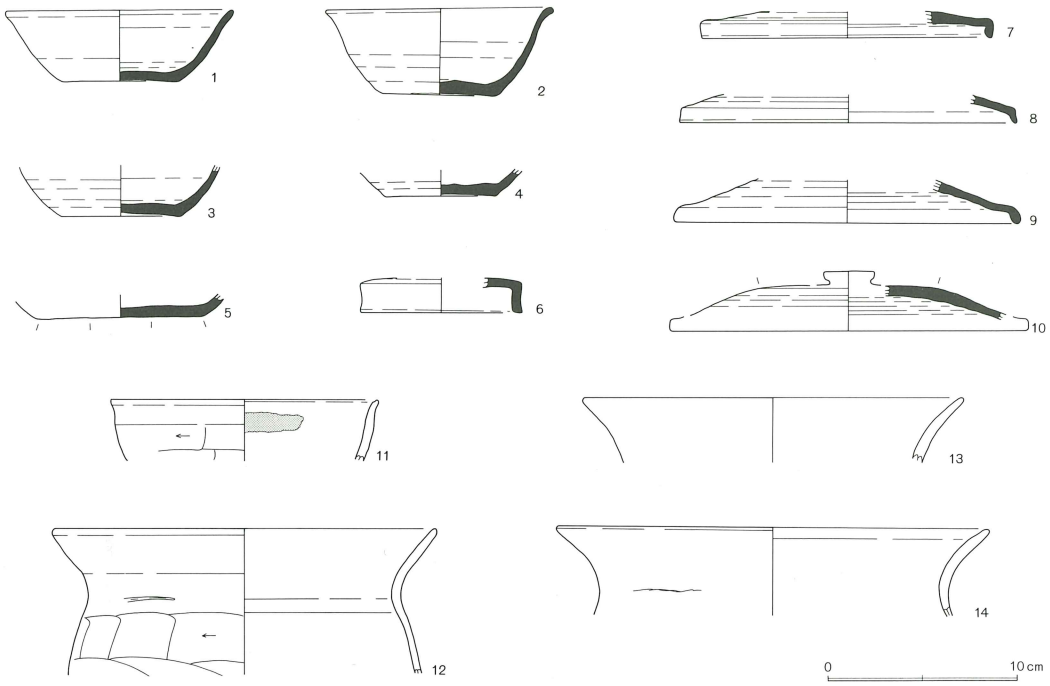
カマドは北壁に設置されている。規模は長さ1.76m、焚口幅93cmである。構造は、燃焼部の火床が床面から13cm程の掘り込みをもち、灰のかき出しをしたと考えられる前庭部の掘り込みも認められる。また、火床は地山のローム面がかなりの被熱のため焼土化している。煙道部は長く伸び徐々に立ち上がり屋外に排気する。カマド袖は残存していないが両袖部分には柱状をした石が検出され、さらに天井石と考えられる長さ65cmの片岩を検出した。このような袖石を立てその上に天井石を載せるカマド構造は、本集落において唯一の例である。

出土遺物は、須恵器の坏、蓋、土師器甕、坏が検出された。１～５が須恵器坏である。５以外は底径小さく上げ底気味で、底部糸切り離しのままである。１は淡灰色をし、器面がさらさらし粉っぽい土器である。２は内外面に火襷の痕跡を残し、底部内面には指押さえの凹みが付く。５は底径のやや大きな須恵器坏で、底部糸切り離し後、外周回転ヘラケズリを施す。12・13は「コ」の字状口縁へと移行する段階の土師器甕である。

時期は稲荷前XII期と考えられる。



第71図　第22号住居跡カマド



第72図　第22号住居跡出土遺物

第22号住居跡出土遺物観察表（第72図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.7	3.1	BCDF	C	淡灰色	50%	№16,17,23　一括
2	坏	12.0	4.5		BCDF	C	褐灰色	70%	№11
3	坏		2.7	6.2	BCDF	A	褐灰色	80%	一括
4	坏		1.4	(5.8)	BCDF	B	灰色	50%	№13
5	坏		1.2	(8.6)	BCDF	A	青灰色	80%	№10,19,20　一括
6	蓋	8.6	1.8		BCDF	A	灰色	20%	一括
7	蓋	(15.4)	1.4		BCDF	B	白灰色	10%	№14
8	蓋	(17.8)	1,5		BCDF	A	黒灰色	10%	一括
9	蓋	(18.4)	2.2		BCDF	A	灰色	10%	№1　一括
10	蓋		1.8		BCDF	A	灰色	20%	№6,15　一括
11	鉢	(14.2)	3.2		ABCDF	B	橙褐色	10%	№18
12	甕	(20.0)	7.7		ABCD	B	橙褐色	20%	カマドNo.3
13	甕	(25.6)	3.4		ABCD	C	褐色	10%	№12
14	甕	(23.2)	3.8		ABCD	C	橙褐色	10%	

第23号住居跡（第73図）

H・I－14区に位置する。北側の調査区にあたり、周辺には第28～30号住居跡がすぐ南側に存在する。平面形態は方形で、規模は、長軸3.40m、短軸3.19m、深さ14cmである。主軸方向はS－65°－Wである。

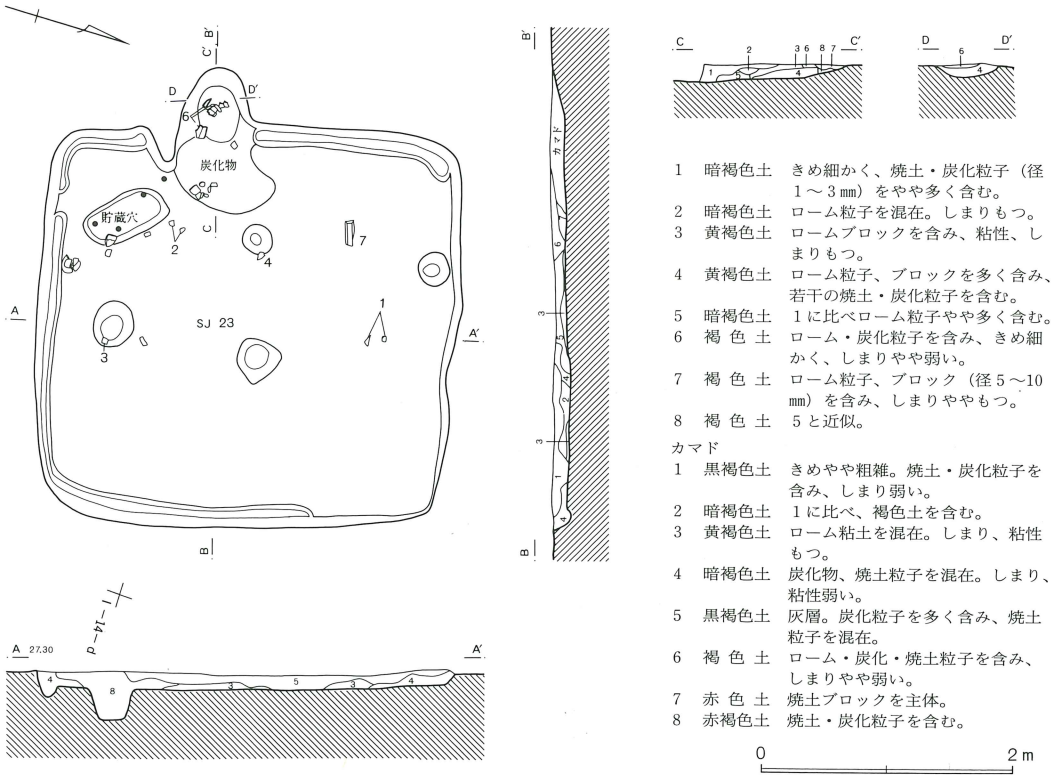
床面は概ね平坦である。カマド周辺および北壁側はやや堅くしまっている。主柱穴は不明だがカマド前面に並ぶピットが上屋を支える柱穴として関連する可能性がある。貯蔵穴は、やや不整形で

はあるがカマド左側に設けられている。壁溝は北壁以外で確認され、幅11～20cm、深さ７cmである。

カマドは西壁に設置されている。規模は長さ1.10m、焚口幅59cmである。構造は燃焼部が床面と同じ高さであり、わずかに先端が凹む。煙道は短く屋外に立ち上がり、カマド袖は左側がわずかに地山ロームを屋内に伸ばしている。

出土遺物は、須恵器の坏、蓋、土師器甕、砥石を検出した。１は糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリの須恵器坏である。４は口唇部が肥厚し、内面に平坦面をもつ。６は胴部に張りをもち、「コ」の字状口縁の土師器甕である。７は砂岩質の砥石である。残存長11.0cm、最大幅4.5cmである。

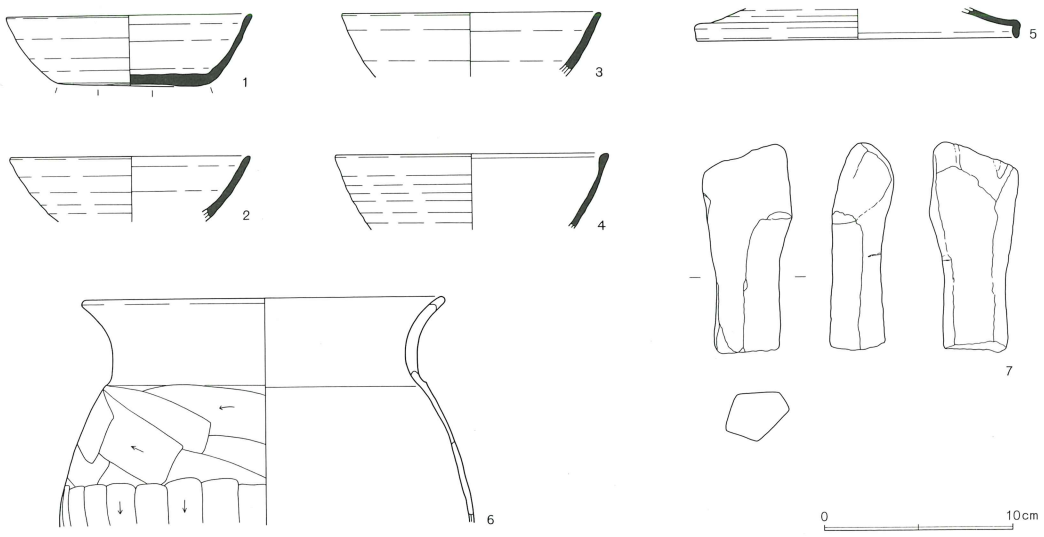
時期は稲荷前Ⅸ期と考えられる。



第73図　第23号住居跡

第23号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.0	3.6		BCDF	A	灰色	100%	№15,16
2	坏	(12.4)	3.3		BCDF	A	淡灰色	10%	№9,10
3	坏	(13.6)	3.1		BCDF	A	灰色	10%	№12
4	坏	(14.4)	4.0		BCDF	A	灰色	10%	№14
5	蓋	(16.9)	1.6		BCDF	A	灰色	10%	覆土
6	甕	19.0	12.0		ABCD	A	褐色	30%	カマドNo.1,2,3,5,8,10
7	砥石								№13



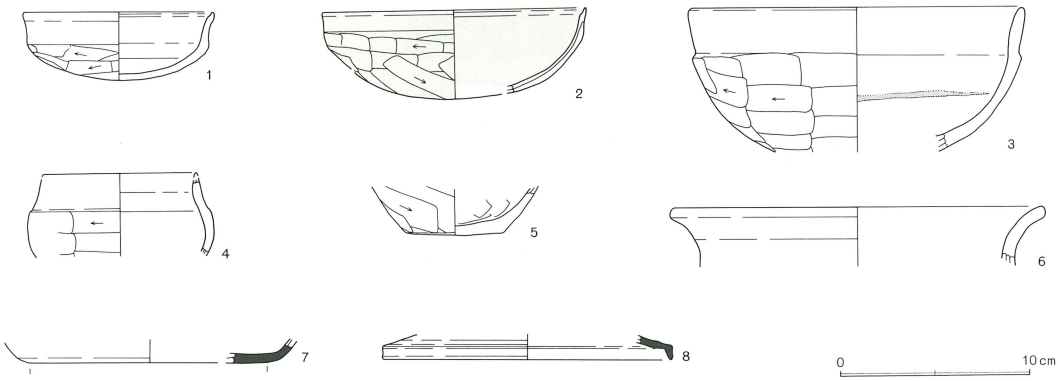
第74図　第23号住居跡出土遺物

第24号住居跡（第76図）

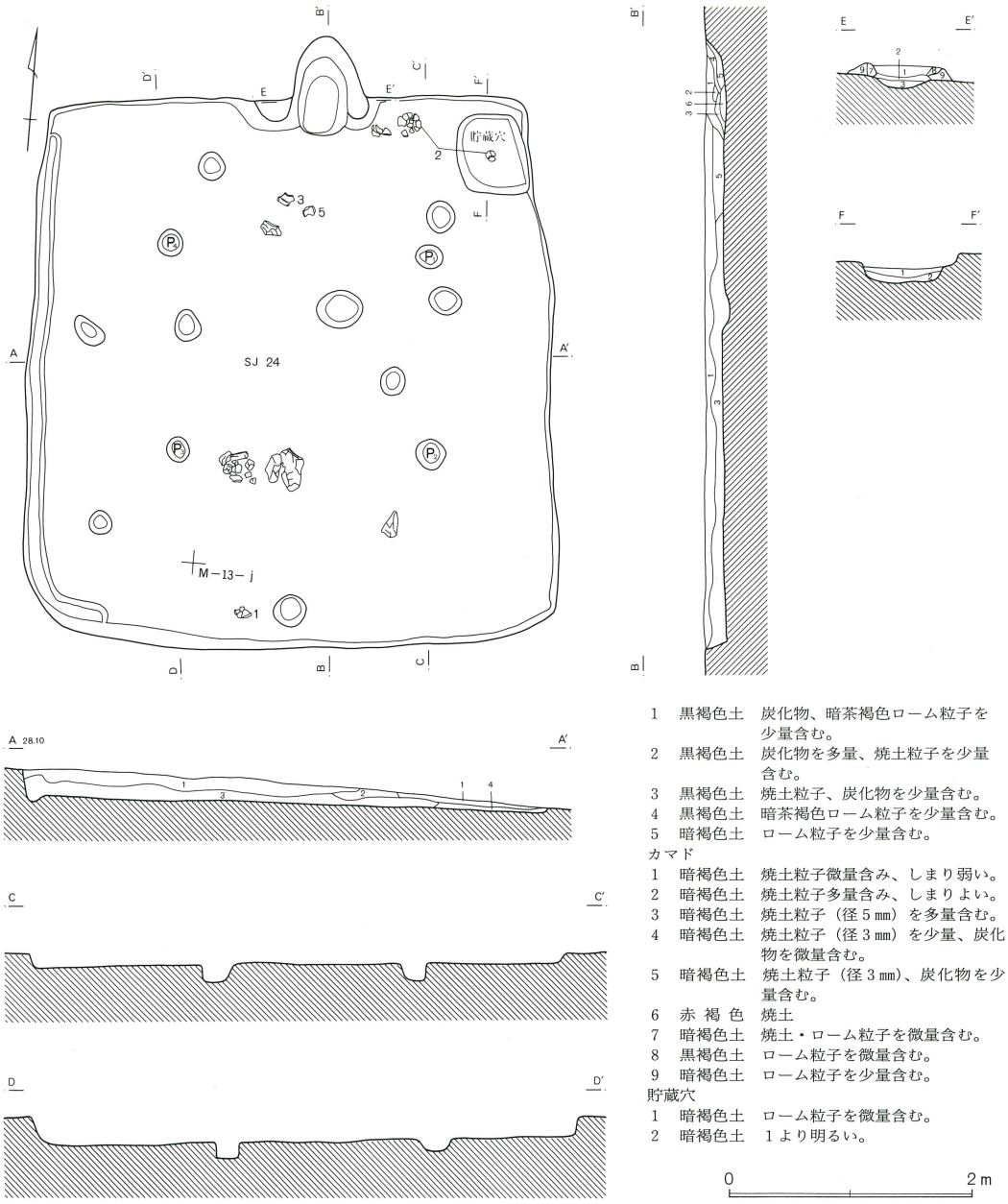
本住居跡は調査区の北東にあたり、M－13区に位置する。舌状に伸びる台地の東側斜面部に造られ、周辺には北西方向に第21号住居跡が存在する。重複遺構はなく、斜面部に造られているため北壁および西壁、南壁は地山のローム土を切り込んで造られ、南東壁はわずかに地山を掘り込み辛うじて全体の規模が確認できた。平面形態は長方形である。規模は長軸4.55m、短軸4.43m、深さ22cmである。主軸方向はN－7°－Wである。

床面は全体に平坦であるが、わずかに、中央部分が盛り上がり堅くしまっている。主柱穴はＰ１～Ｐ４があたると考えられ、深さはＰ１が14.9cm、Ｐ２が15.8cm、Ｐ３が13.4cm、Ｐ４が9.5cmである。貯蔵穴はカマドの右側に設けられている。壁溝は西壁部分のみ確認された。幅15～20cm、深さ７cmである。

カマドは北壁中央に設置され、規模は長さ0.80m、焚口幅30cmである。構造は、わずかに掘り窪められた燃焼部の火床から短い煙道が立ち上がる。カマド袖はローム粘土を主体とした土で張り込



第75図　第24号住居跡出土遺物



第76図　第24号住居跡

み、短いながらも両袖を残存させている。

出土遺物は、須恵器坏、蓋、土師器甕、坏、鉢を検出した。また、住居跡中央のＰ２・Ｐ３の中間にまとまって石を検出した。１・２は口縁部内面に沈線を持つ比企型坏と考えられる。特に、２は内外面に赤彩を施し、器肉は二枚の粘土板が合わさって成形されている。３は鉢と考えられる。４は短頸の小型壺である。

時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。

第24号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.0	3.6		ＡＢＣＦ	Ｂ	赤褐色	60%	№11
2	坏	14.0	4.7		ABCDF	Ａ	赤褐色	80%	№5, 13
3	鉢	(17.8)	7.5		ＡＢＣ	Ａ	褐色	40%	№1
4	壺	(8.1)	4.4		ＡＢＣ	Ｂ	赤褐色	30%	
5	甕		2.7	5.4	ＢＣＤ	Ｂ	黒褐色	70%	№2
6	甕	(19.4)	3.1		ＡＢＣＤ	Ｂ	淡褐色	30%	
7	坏		1.3	(12.8)	ＢＣＤＦ	Ａ	白灰色	20%	
8	蓋	15.2	1.3		ＣＤＦ	Ａ	灰色	10%	

第25号住居跡（第78図）

本住居跡は北側調査区にあたり、Ｋ－13区に位置する。本住居跡も舌状に伸びる台地の東側斜面部に造られ、周辺には北方向に第26・27号住居跡が存在する。重複遺構はない。斜面部に造られているため北壁および西壁、南壁は地山のローム土を切り込んで造られている。東壁はわずかに地山を掘り込み辛うじて全体の規模が確認できるが、南東コーナー部分は不明であった。平面形態は方形であり、規模は、長軸5.10m、短軸4.90m、深さ20cmである。主軸方向はＮ－５°－Ｗである。

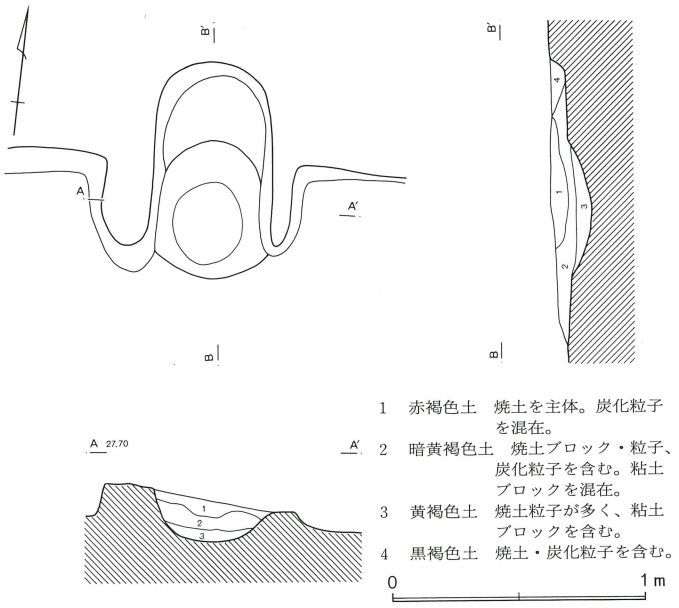
床面は全体に平坦であるが、わずかに、中央部分が盛り上がり堅くしまる。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４があたると考えられ、深さはＰ１が38.4cm、Ｐ２が30.9cm、Ｐ３が42.5cm、Ｐ４が37.5cmである。貯蔵穴はカマドの左側に設けられている。壁溝は、カマド左側から西壁を巡り南壁部分まで確認され、溝幅23～42cm、深さ９cmである。

カマドは北壁中央に設置され、規模は長さ0.86m、焚口幅43cmである。構造は両袖を掘り残し屋内に伸び、わずかに掘り窪められた燃焼部の火床から短い煙道が立ち上がる。

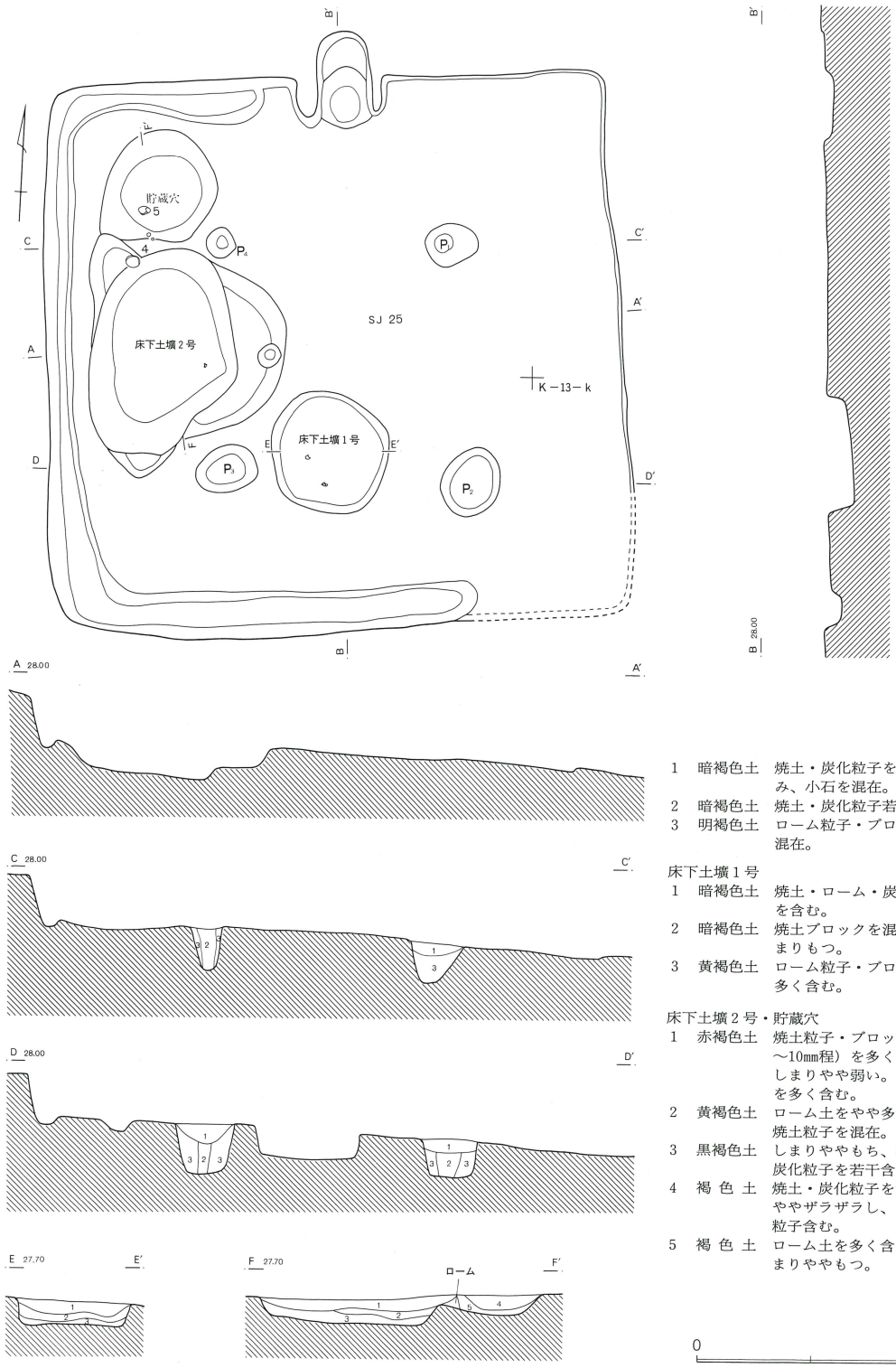
また、西壁側とＰ２・Ｐ３の中間からは、第１・２号床下土壙を検出した。覆土はいずれも焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子を含んでいる。

出土遺物は、須恵器坏、鉢、蓋を検出した。１～５は須恵器坏で、糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリを施す。４・５は内面ややザラザラしているものの意図的に体部を欠き割れ口を擦って丸くしている。転用硯もしくは他の用途に利用されていたものと考えられる。6は須恵器鉢で、口唇部上端に面をもつ。

時期は稲荷前Ⅵ～Ⅶ期と考えられる。



第77図　第25号住居跡カマド



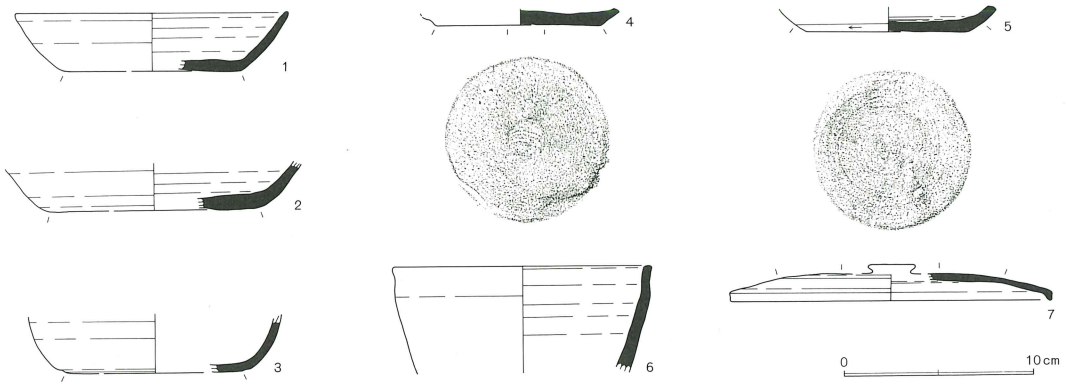
1　暗褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、小石を混在。
2　暗褐色土　焼土・炭化粒子若干含む。
3　明褐色土　ローム粒子・ブロックを混在。

床下土壙1号
1　暗褐色土　焼土・ローム・炭化粒子を含む。
2　暗褐色土　焼土ブロックを混在。しまりもつ。
3　黄褐色土　ローム粒子・ブロックを多く含む。

床下土壙2号・貯蔵穴
1　赤褐色土　焼土粒子・ブロック（5～10mm程）を多く含み、しまりやや弱い。土器片を多く含む。
2　黄褐色土　ローム土をやや多く含み、焼土粒子を混在。
3　黒褐色土　しまりややもち、硬い。炭化粒子を若干含む。
4　褐色土　焼土・炭化粒子を混在。ややザラザラし、ローム粒子含む。
5　褐色土　ローム土を多く含み、しまりややもつ。

0　2m

第78図　第25号住居跡



第79図　第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.4)	3.1		BCDF	A	褐灰色	30%	一括
2	坏		2.5	(11.2)	BCDF	A	灰色	20%	一括
3	坏		2.8	12.0	BCDF	C	褐色	10%	一括
4	坏		0.9	8.8	BCDF	A	白灰色	100%	№4
5	坏		1.4	8.6	BCDF	A	白灰色	100%	№2
6	鉢	(13.6)	5.6		BCD	A	灰色	20%	貯穴№2
7	蓋	(17.0)	1.4		BCDF	C	褐灰色	30%	貯穴№2

第25号住居跡

第26号住居跡（第81図）

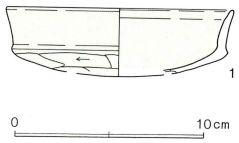
本住居跡は北側調査区のＪ・Ｋ－13区に位置する。舌状に伸びる台地の東側斜面部に造られ、周辺には第25・27号住居跡が存在する。遺存状態が悪く、カマドと住居跡中央部の掘り方を検出しただけで、全体の規模は確認できなかった。残存規模は長軸2.88m、短軸2.70m、深さ５cmである。主軸方向はＳ－72°－Ｗである。

床面はカマド前庭部から中央部のみ残存する。平坦ながらも東側に向け緩やかな傾斜をもつ。

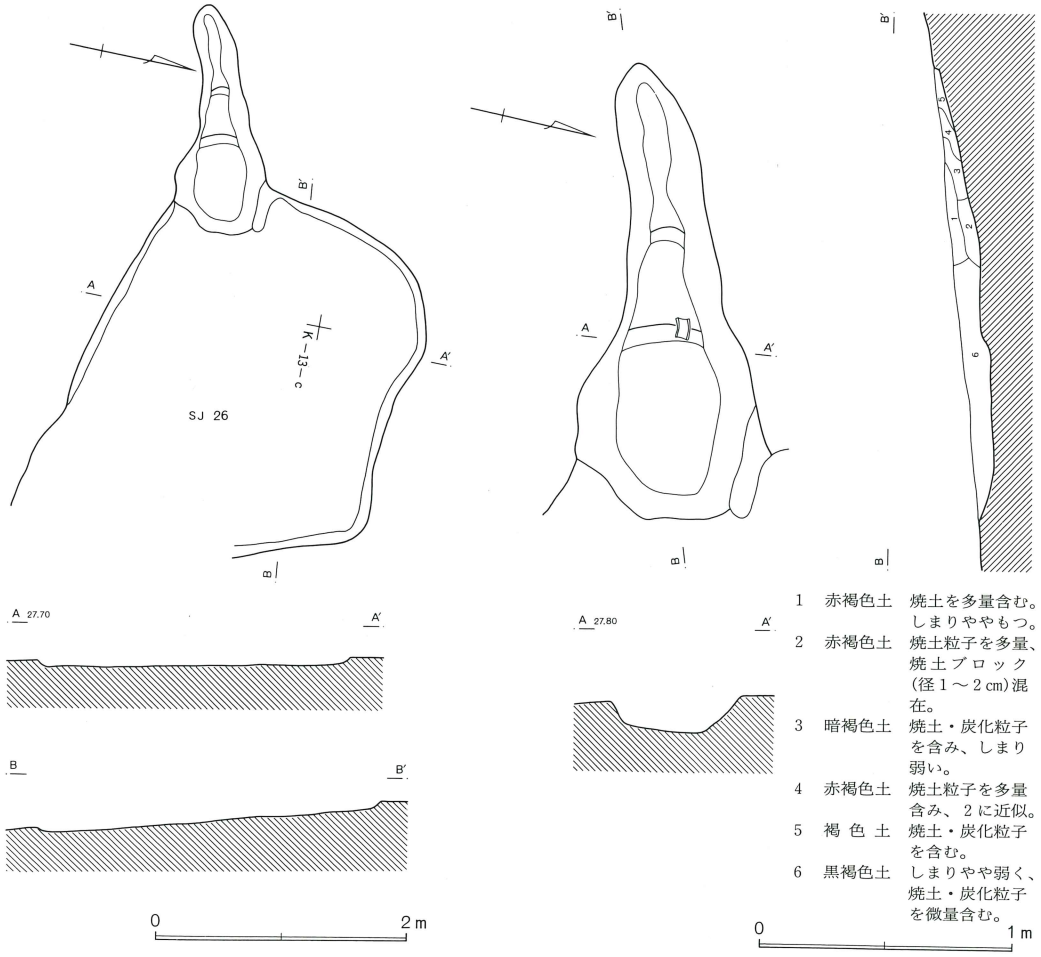
カマドは、西壁中央に設置されていたものと推定される。規模は長さ1.31m、焚口幅42cmである。構造は、燃焼部の火床を床面から８cm程掘り下げ幅70cmの火袋を造り、煙道は細長く、徐々に立ち上げて途中に段をもって屋外へ伸びる。

出土遺物は、１の土師器坏を検出した。口唇部内面に沈線をもち、口縁部外面には弱いながらも稜をもつ内外面に赤彩を施すいわゆる比企型坏である。

時期は稲荷前Ⅴ期と考えられる。



第80図　第26号住居跡出土遺物



第81図　第26号住居跡・カマド

第26号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.6		ＢＣＤ	Ｂ	赤褐色	30%	

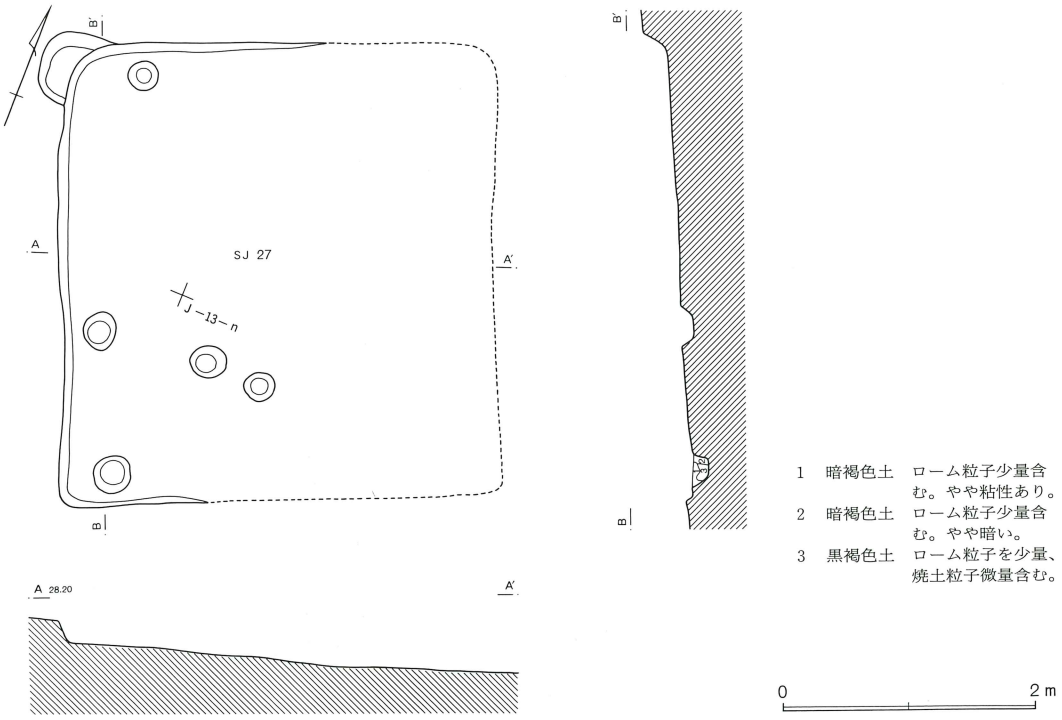
第27号住居跡（第82図）

本住居跡は北側調査区にあたり、Ｊ－13区に位置する。第25号住居跡と同様に舌状に伸びる台地の東側斜面部に造られ、周辺には第25・26号住居跡が存在する。重複遺構はないが、斜面部に造られているため北壁および東壁、南壁の一部は地山が自然と削り取られてしまったためか不明である。規模は長軸3.54m、短軸(2.10)m、深さは西壁の最も遺存状態の良いところで18cmである。主軸方向はＮ－22°－Ｗである。

床面は全体に平坦であるが、わずかに、東側に向け緩やかな傾斜をもつ。

カマドは検出できず、竪穴住居跡としては斜面部という立地条件のもとで遺存状態が悪いため、北カマドを想定するとその痕跡が残らない結果となる。斜面部に構築された住居跡には南カマドが存在しないことからも北カマドの可能性が強いものと考えられる。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第82図　第27号住居跡

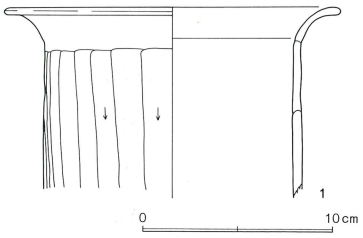
第28号住居跡（第84図）

本住居跡は北側調査区にあたり、Ⅰ－13・14区に位置する。舌状に伸びる台地の東側斜面部を下った一段低い台地平坦面にあたる。この低い台地上には、本住居跡のほかに第23・29・30号住居跡が存在する。住居跡は掘り込みが浅いため、焼土・炭化粒子を含む暗黒褐色土の堆積部分を範囲として推定した。また、焼土・炭化粒子の集中する部分をカマドと推定した。東側には縄文時代中期の加曽利Ｅ式土器を伴う第１号集石土壙が存在する。主軸方向はＳ－19°－Ｅである。

床面は概ね平坦である。わずかに、中央部分が盛り上がり堅くしまっている。主柱穴の検出はできず、カマドは南壁中央に設置されていたと推定される。わずかに、掘り込みが認められる。

出土遺物は、覆土中から土師器の甕を検出した。器肉が薄く外に大きく開く口縁部の形態に特徴がある。整形は胴部外面を下方へのヘラケズリを施す。

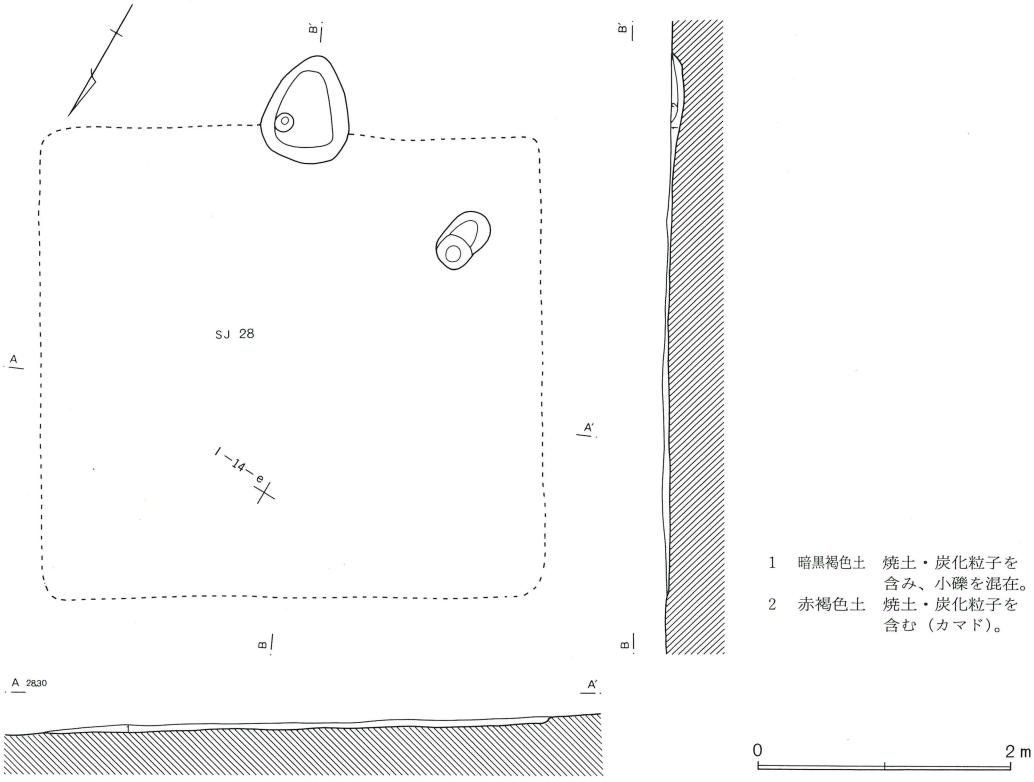
時期は稲荷前Ⅳ期と考えられる。



第83図　第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕	17.8	9.9		ＢＣＤＦ	Ｃ	淡褐色	12%	



第84図　第28号住居跡

第29号住居跡（第85図）

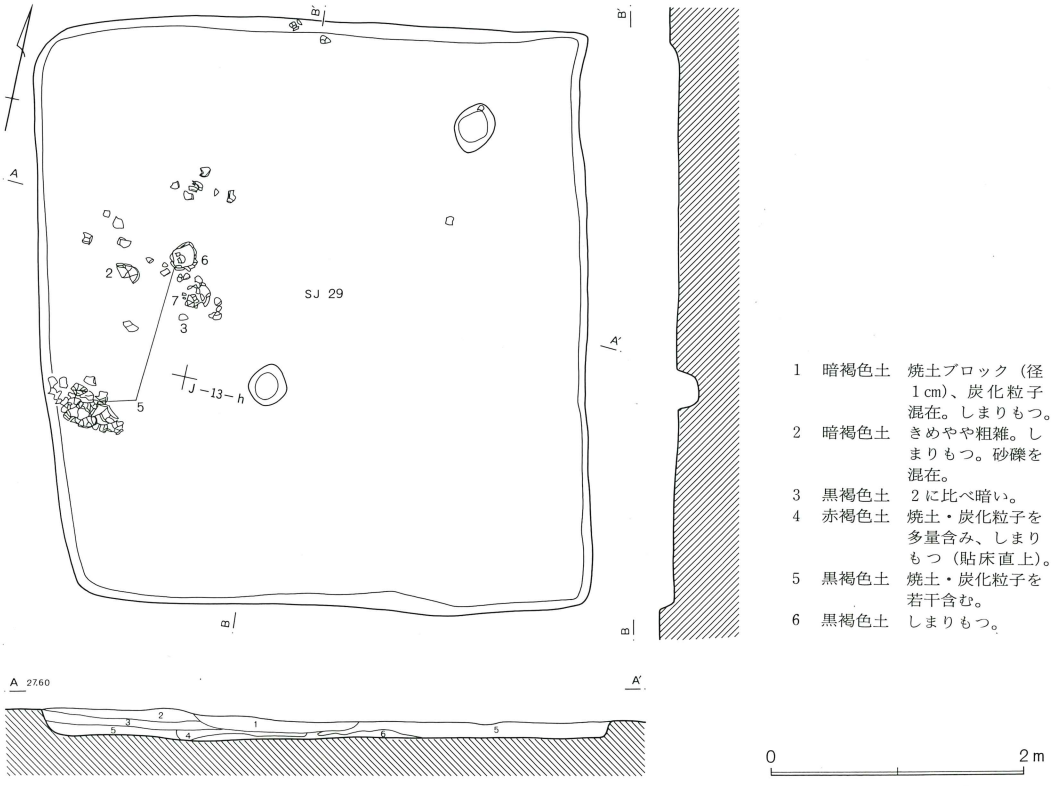
本住居跡は第28号住居跡の南側にあたり、Ｉ－13・Ｊ－13・14区に位置する。重複遺構はない。掘り込みは浅く、平面形態は長方形である。規模は長軸4.57m、短軸3.58m、深さ23cmである。主軸方向は長軸方向でＮ－15°－Ｗである。

床面は小砂利を含むローム土を利用しており、全体に平坦である。

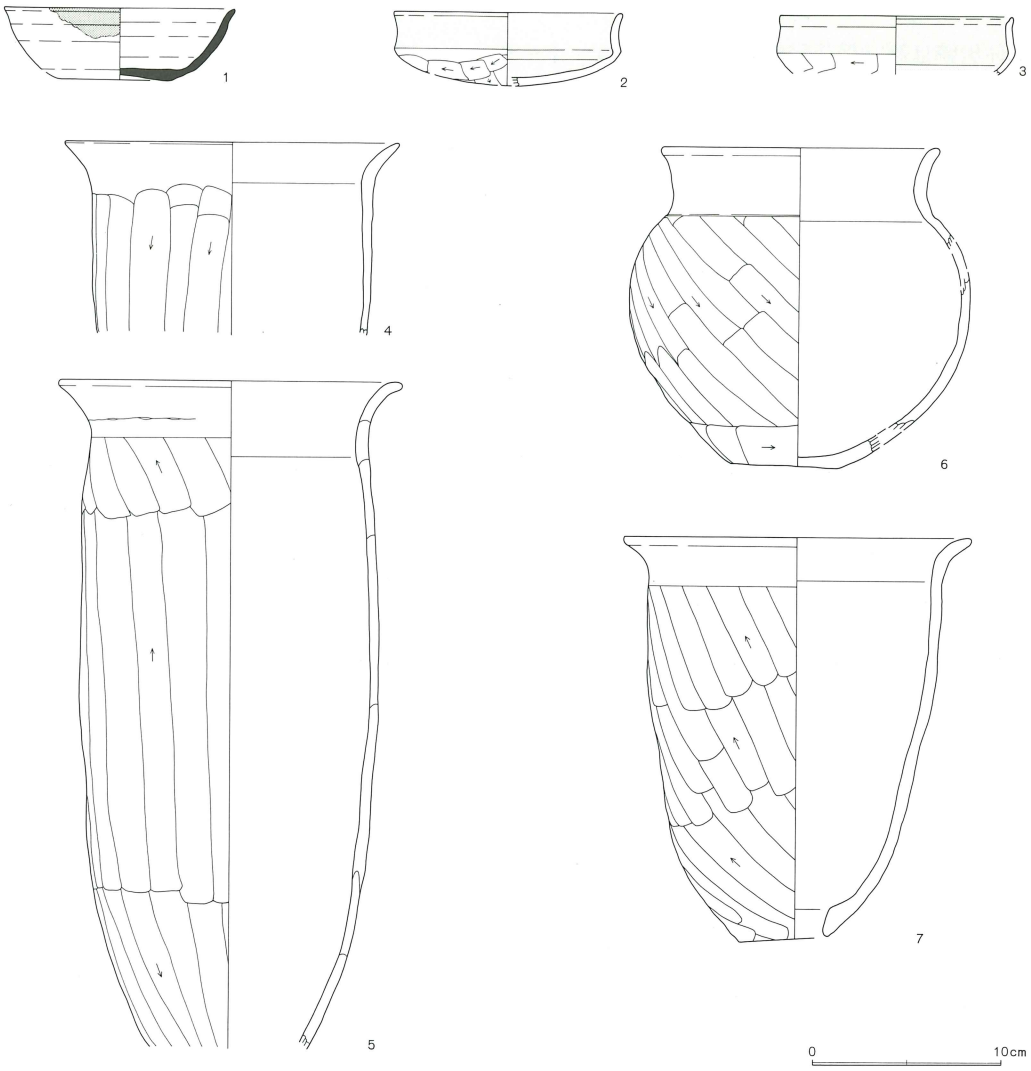
カマドは検出できなかった。

出土遺物は、土師器甕、坏、鉢、甑を西壁寄りでまとまって検出した。１は覆土上面から検出された須恵器坏である。底部は、糸切り離しのままで上げ底気味である。内面中央部には指押さえの凹みを残す。口縁部から体部にかけて油煙が付着する。２・３は比企型坏である。いずれも、内外面に赤彩を施す。口径12.0cm、器高3.8cmとやや小振りの坏である。口縁部はやや屈曲をもって開き気味に立ち上がる。体部との境に稜を僅かに残す。４・５は長胴甕である。口縁部は外に開いて立ち上がり、胴部は僅かに膨らみをもちながらも直線的に伸びる。器肉やや厚く輪積み痕が見られる。６は胴部球形をした鉢である。底部外面に木葉痕をもつ。７は甑である。いずれも土師器には胎土中に白色針状物質を含んでいる。

時期は稲荷前Ⅲ期と考えられる。



第85図　第29号住居跡



第86図　第29号住居跡出土遺物

第29号住居跡出土遺物観察表（第86図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.8		BCDF	B	灰色	60%	覆土
2	坏	12.0	3.8		CDF	A	赤褐色	80%	№29　覆土
3	坏	(12.2)	3.0		ABCDF	B	赤褐色	10%	№23
4	甕	(17.6)	10.1		ABCF	C	橙褐色	20%	№24
5	甕	18.2	35.2		ABCD	B	橙褐色	80%	№20,25
6	鉢	14.6	16.7		ABCD	B	褐色	70%	№20
7	甑	18.2	21.3		ABC	B	褐色	70%	№21

第30号住居跡（第87図）

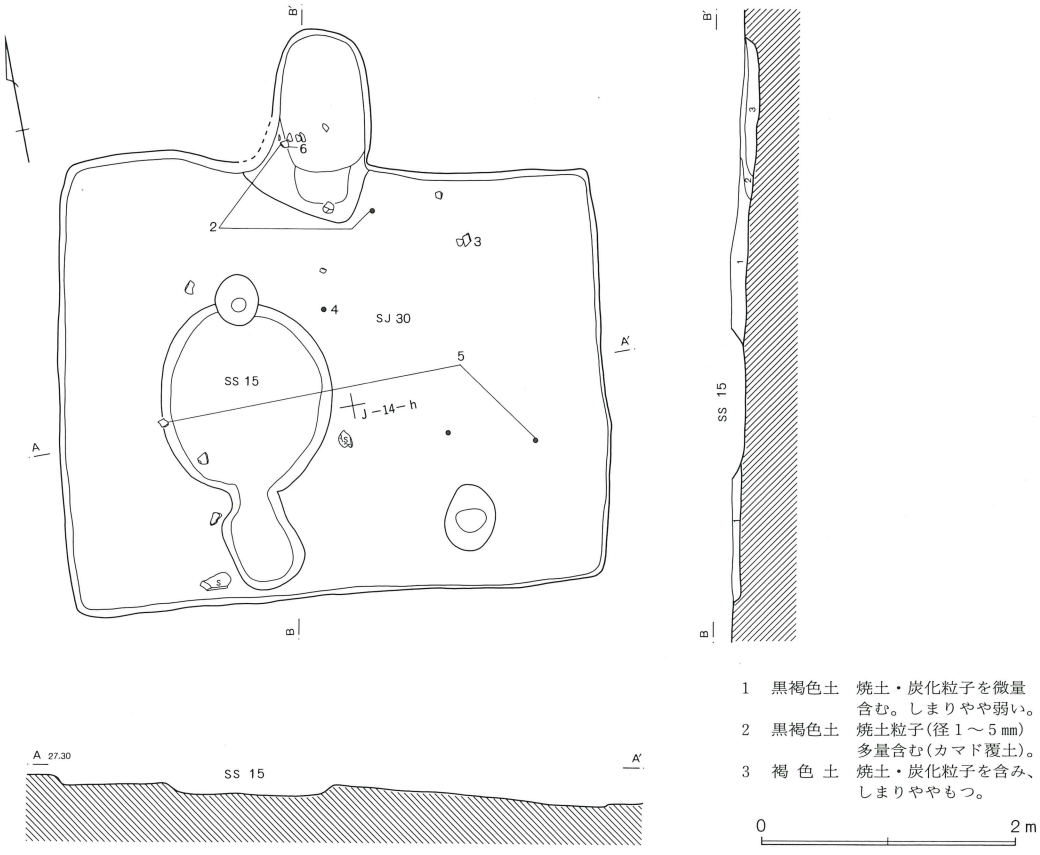
本住居跡は北側調査区にあたり、Ｊ－14区に位置する。舌状に伸びる台地よりも一段低い東側に広がる平坦なローム台地に存在する。このローム台地は西側から流れでたローム土が再堆積した二次堆積ロームと考えられる。この台地上に本住居跡をはじめとする第23・29号住居跡が展開している。重複遺構としては、中世の鋳造遺構が中央にあり、平面形態は長方形である。規模は長軸4.30m、短軸3.62m、深さ13cmである。主軸方向はＮ－17°－Ｅである。

床面は全体に平坦であるが、わずかに、東側に向けて傾斜している。

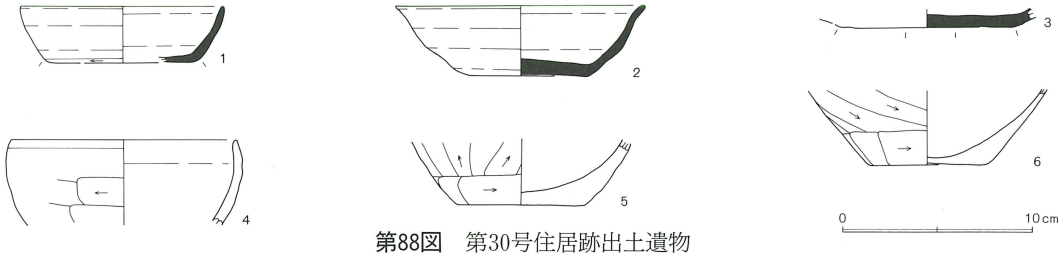
カマドは北壁中央に設置され、規模は長さ1.50m、焚口幅70cmである。カマド袖は残存しない。燃焼部の火床は床面からわずかに掘り込められ焼土・炭化粒子が堆積している。煙道は長く伸びる。

出土遺物は、須恵器坏、土師器甕、坏を検出した。１～３は須恵器坏である。１は体部外面下端を回転ヘラケズリする。２はカマド内から出土しており本住居跡士の時期を考える資料である。４は器高の深い土師器坏である。５・６は甕底部である。

時期は稲荷前Ｘ期と考えられる。



第87図　第30号住居跡



第88図　第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物観察表（第88図）

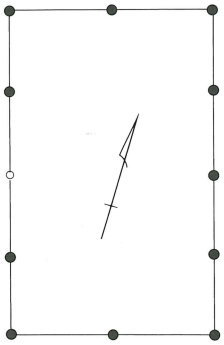
番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.6)	3.0		BCDF	A	灰色	20%	覆土
2	坏	13.2	3.6		BCDF	B	黒灰色	50%	№4,6
3	坏		1.0	9.4	BCDF	A	灰色	60%	№8
4	坏	(12.0)	4.5		ABCF	B	茶褐色	10%	№10　覆土
5	甕		3.5	6.8	ABCF	C	橙褐色	40%	№11,15
6	甕		3.9	6.2	ABC	A	橙褐色	25%	№4

第2表　住居跡一覧表　　（単位　m）

新番号	旧番号	位　置	重複遺構	形　態	長軸	短軸	深さ	カマド	主軸方向
SJ-01	SJ-01	T-6, 7	SJ-02, 03　SD-04	方　形	5.60	(5.45)	0.35	西	S-75°-W
02	02	T-6	SD-01	長方形	3.63	2.81	0.29	北	N-8°-E
03	03	T-7	SJ-01　SK-01	長方形	4.72	3.95	0.15	北	N-7°-W
04	04	S-8	SB-01　SK-37	長方形	4.04	3.05	0.15	東	N-97°-E
05	05	S-8	SE-02　SD-01	方　形	4.22	4.15	0.20	北	N-10°-W
06	06	Q-8		方　形	4.80	4.33	0.18	東	N-72°-E
07	07	R-6, 7		長方形	3.35	2.57	0.06	西	S-70°-W
08	08	O-7 P-7	SK-27, 49	方　形	3.85	3.80	0.27	東	N-62°-E
09	09	R-11 S-11	SB-14	長方形	4.50	4.05	0.31	北	N-24°-W
10	10	R-11,12	SJ-12	長方形	2.77	2.45	0.19	東	N-70°-E
11	11	R-12,13	SD-05	方　形	4.40	4.35	0.09	東	N-52°-E
12	12	R-11,12	SJ-10　SK-69, 70	長方形	3.85	(2.83)	0.12	北	N-18°-W
13	14	T-7	SD-04	長方形	5.05	(2.70)	0.19	北	N-10°-W
14	15	T-7, 8	SD-04　SB-01	長方形	3.87	(2.14)	0.07	北	N-10°-W
15	16	P-10	SD-08, 12		(2.57)		0.09	東	N-75°-E
16	17	S-13			(4.03)	(2.15)	0.07	北	N-21°-W
17	18	S-13,14			(3.72)	(3.05)	0.13	北	N-15°-W
18	19	P-10,11	SD-12 SK-110,115,116	方　形	3.07	3.00	0.08	西	S-60°-W
19	20	P-12,13		方　形	2.62	2.50	0.15	東	N-79°-E
20	21	Q-13	SS-06	長方形	4.50	4.30	0.27	北	N-31°-W
21	22	L-12 M-12			2.80	(2.25)	0.15	北	N-22°-W
22	23	O-12,13		長方形	4.07	3.80	0.36	北	N-26°-W
23	24	H-14 I-14		方　形	3.40	3.19	0.14	西	S-65°-W
24	25	M-13		長方形	4.55	4.43	0.22	北	N-7°-W
25	26	R-13		方　形	5.10	4.90	0.20	北	N-5°-W
26	27	J-13 K-13		長方形	2.88	2.70	0.05	西	S-72°-W
27	28	J-13			3.54	(2.10)	0.18		N-22°-W
28	29	I-13,14	SC-01	長方形	(7.00)	(4.57)	0.06	南	S-19°-E
29	30	I-13 J-13,14		長方形	4.57	3.58	0.23		N-15°-W
30	31	J-14	SS-15	長方形	4.30	3.62	0.13	北	N-17°-E

2　掘立柱建物跡

金井遺跡Ｂ区からは26棟の掘立柱建物跡を検出した。このうち、古代の堀立柱建物跡は15棟である。建物の中心的占地場所は台地中央の東側調査区南寄り部分で、周辺には第１～５と13・14号住居跡が存在する。また一方、北側の低台地部分に建物跡を検出した。このことは台地上と低台地部分とが対峙関係にあることが窺える。台地上では第１号掘立柱建物跡が最も規模が大きく柱掘り方も方形で四隅は「Ｌ」字状の掘り方をもつ。また、第２～４号掘立柱建物跡や第７～９号掘立柱建物跡の各３棟は殆ど主軸方向を揃えて建てられている。低台地には第25・26号の２棟の掘立柱建物跡を検出した。



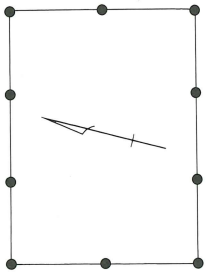
第１号掘立柱建物跡（第89図・90図）

Ｓ・Ｔ－７・８区に位置する。調査区南西隅にあり、周辺には第２～13号掘立柱建物跡が検出され古代の建物群の占有地区であることが窺える。その中にあって本建物跡は最も規模が大きい。重複遺構は、第４・13・14号住居跡と中世の第１号井戸跡、第１・２号溝跡が存在するが、本遺構はいずれの遺構よりも古く、２×４間の南北棟の建物である。規模は桁行8.60m、梁行5.40mであり、主軸方向はＮ－17°－Ｗである。

柱穴は隅丸方形をしており、隅柱は４箇所とも「Ｌ」字状の掘り方をもつ。規模は比較的大きく長さ0.94～1.20m、深さ34～54cmである。柱間寸法は桁行2.00m、梁行2.60mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。柱穴は11本確認できたが、このうちの、６本からは平面観察で柱痕を確認することができた。いずれも柱穴掘り方の内側に寄った位置である。また、断面観察によると柱穴掘り方は、黒褐色土と暗褐色土で埋められ中間にローム土を主体とした黄褐色土で構成され版築され突き固められていた。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕の破片が検出している。１は球状石製品である。２は須恵器蓋、３はＰ10から出土した須恵器坏で推定口径12.5cm程と考えられる。

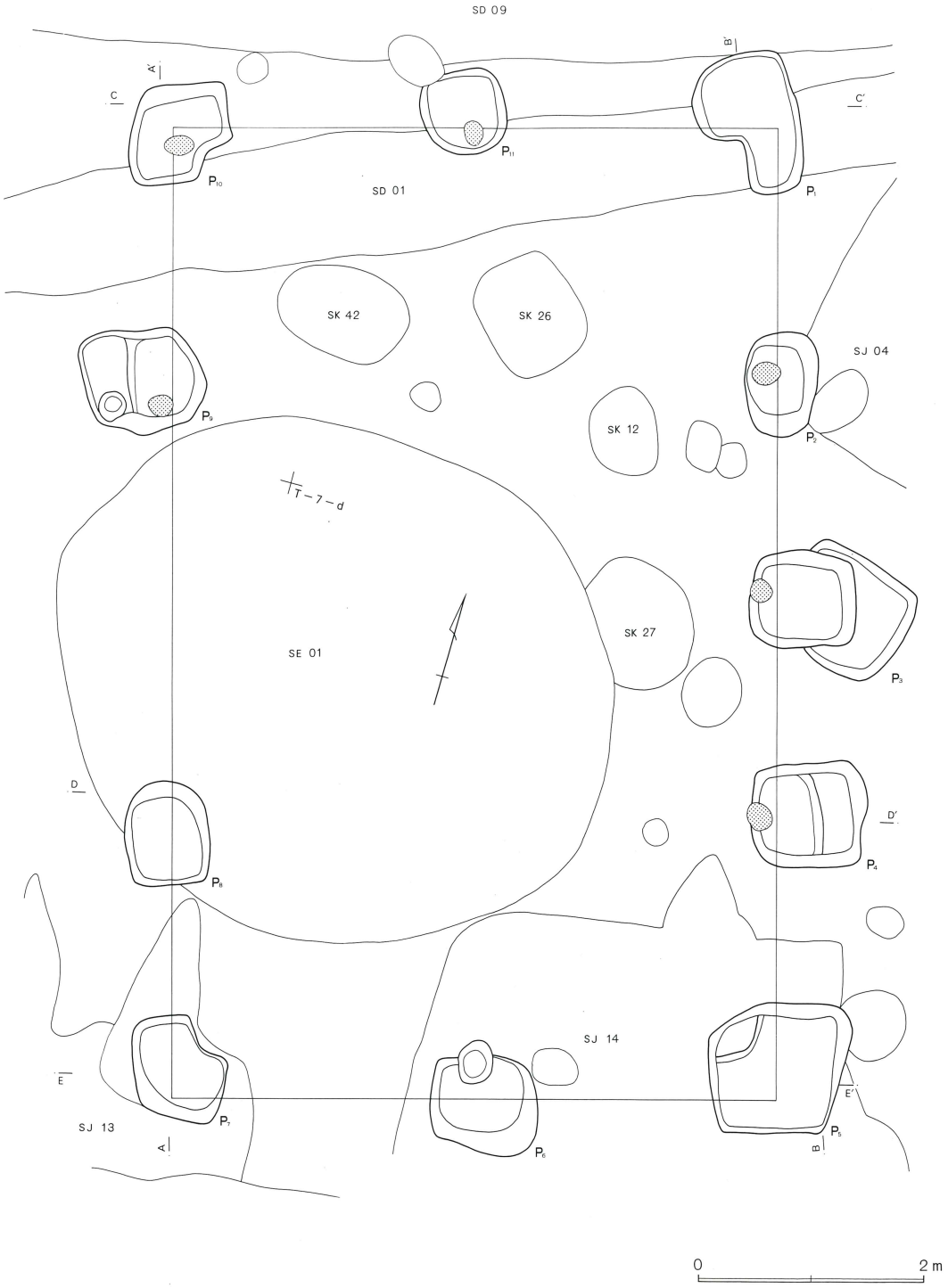
時期は稲荷前Ⅸ期と考えられる。



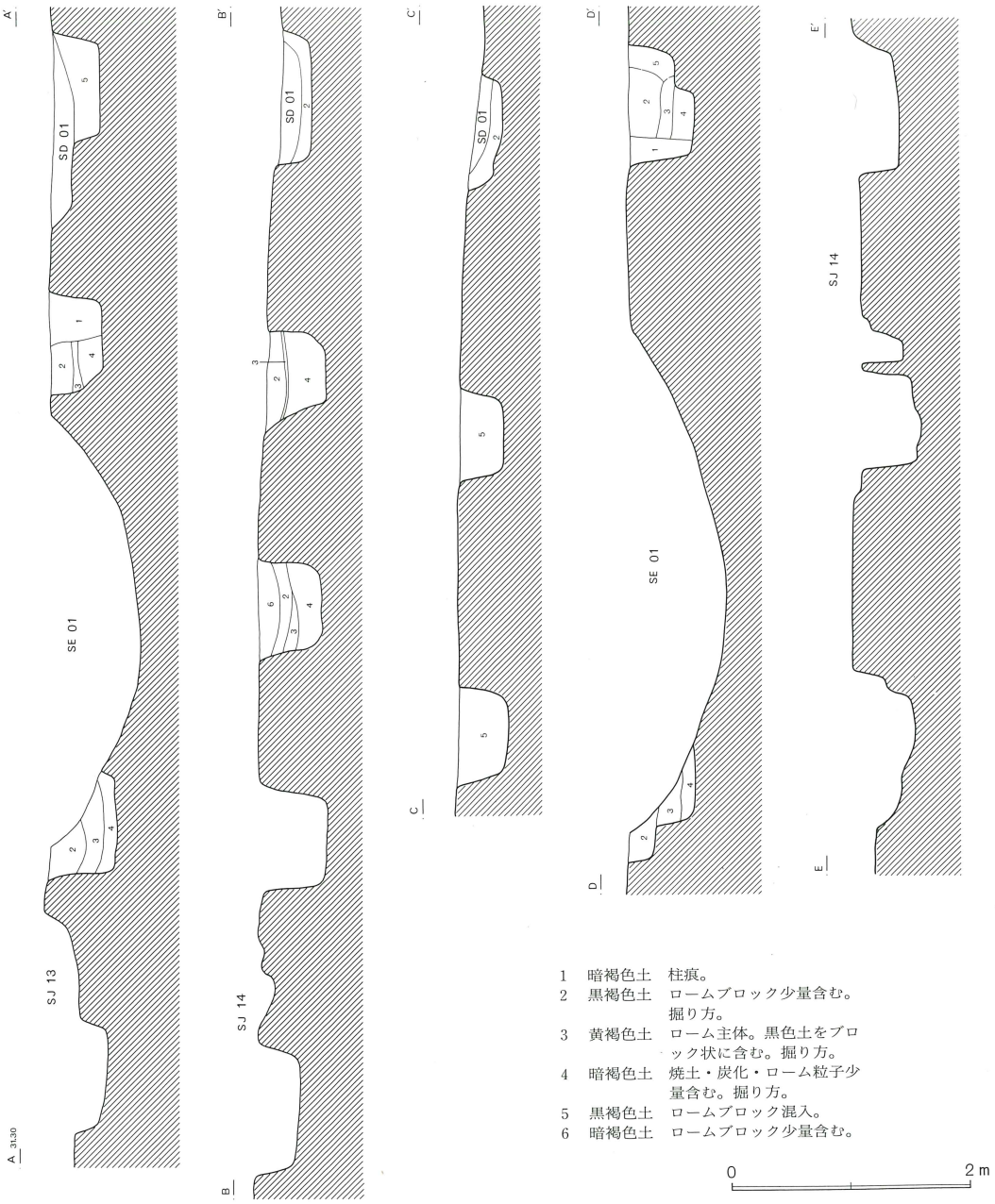
第２号掘立柱建物跡（第91図）

Ｒ・Ｓ－８・９区に位置する。調査区南西部にあたり、周辺には第１・３～13号掘立柱建物跡が検出され古代の建物群の占有地区であることが窺える。その中にあって、本遺構は第３・５号掘立柱建物跡と建物方向を全く同じくして直線的に東西方向に並ぶ。これら３棟が規模、方向、位置という点で計画的に建てられたことは間違いないものと考える。本遺構は２×３間の東西棟の建物である。桁行6.70m、梁行4.90mであり、主軸方向はＮ－75°－Ｗである。

柱穴は円形の掘り方をもち、規模は長径0.40～0.60m、深さ25～40



第89図　第１号掘立柱建物跡(1)

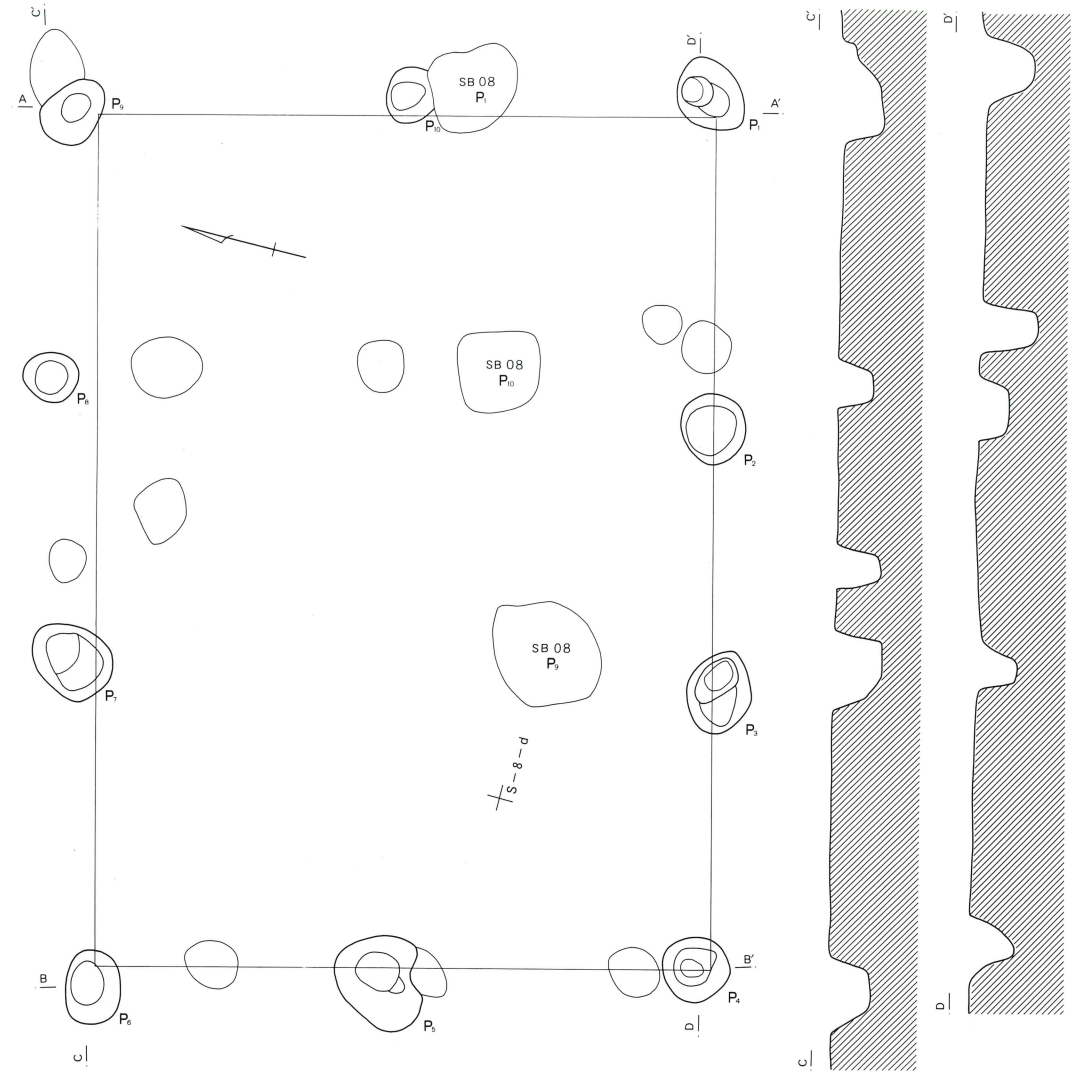


第90図　第１号掘立柱建物跡(2)

cmである。柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.50mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。柱穴掘り方の断面観察によると柱痕は、１層もしくは２層の暗褐色土と黒褐色土であり、４本の隅柱で確認できた。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕の小破片が検出された。Ｐ４から検出した須恵器坏は体部下端を回転ヘラケズリによる面取り調整を施す。

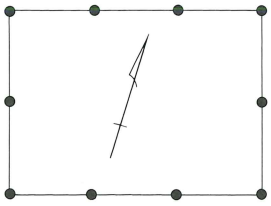
時期は稲荷前Ⅴ期と考えられる。



1　暗褐色土　焼土・炭化粒子含み、しまり強い。
2　暗褐色土　ローム土多量、若干の焼土粒子含む。
3　暗褐色土　2に比べ、ローム土少量含む。
4　黄褐色土　ローム土を主体。砂粒子含む。
5　黒褐色土　しまり弱い。微量の焼土粒子を含む。
6　暗褐色土　若干の焼土・炭化粒子を含む。
7　褐 色 土　砂粒子を含み、しまり強い。
8　黄褐色土　ローム粒子・ブロックを含む。
9　暗褐色土　ローム・焼土・炭化粒子を含む。

0　2m

第91図　第2号掘立柱建物跡



第３号掘立柱建物跡（第92図）

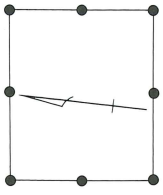
Ｒ・Ｓ－７・８区に位置する。調査区南西にあたり、東側に第２号掘立柱建物跡、西側に第５号掘立柱建物跡が建ち両建物に挟まれ検出した。本建物跡は第２号掘立柱建物跡と規模、方向が全く同じ２×３間の東西棟の建物である。桁行6.70m、梁行4.90mであり、主軸方向はＮ－75°－Ｗである。

柱穴は円形もしくは隅丸方形をしている。規模は長さ0.64～0.84m、深さ38～62cmである。柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.50mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。

断面観察によると柱穴掘り方は、第１層の暗褐色土が柱痕であることがわかる。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏、甕の小破片が検出された。

時期は稲荷前Ｖ期と考えられる。



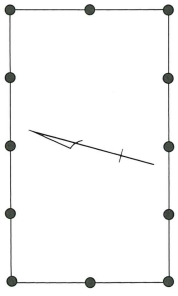
第４号掘立柱建物跡（第93図）

Ｓ－７区に位置する。調査区南西にあたり、ほとんど同じ場所に第５・６・11号掘立柱建物跡が建て替えられている。規模は小さく２×２間の東西棟の建物である。桁行4.50m、梁行3.80mであり、主軸方向はＮ－83°－Ｅである。

柱穴は円形をし、長さ0.45～0.60m、深さ28～50cmである。柱間寸法は桁行2.25m、梁行1.95mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。Ｐ５は第５・11号掘立柱建物跡と重複し、ＳＢ05＜ＳＢ04＜ＳＢ11の新旧関係がつかめる。また、Ｐ８は第６号掘立柱建物跡に切られ、ＳＢ04＜ＳＢ06の関係がつかめた。

出土遺物は須恵器坏、蓋の破片が検出されている。４はつまみ径4.2cmとやや大きめの擬宝珠の須恵器蓋でＰ５から出土した。５はＰ７から出土した須恵器坏である。体部は外傾に立ち上がりわずかに内湾させる。口唇部やや器肉を薄くさせ端部は膨らむ。６は口径12.5cm、器高3.6cmとやや大きめの須恵器坏で、Ｐ６から出土した。

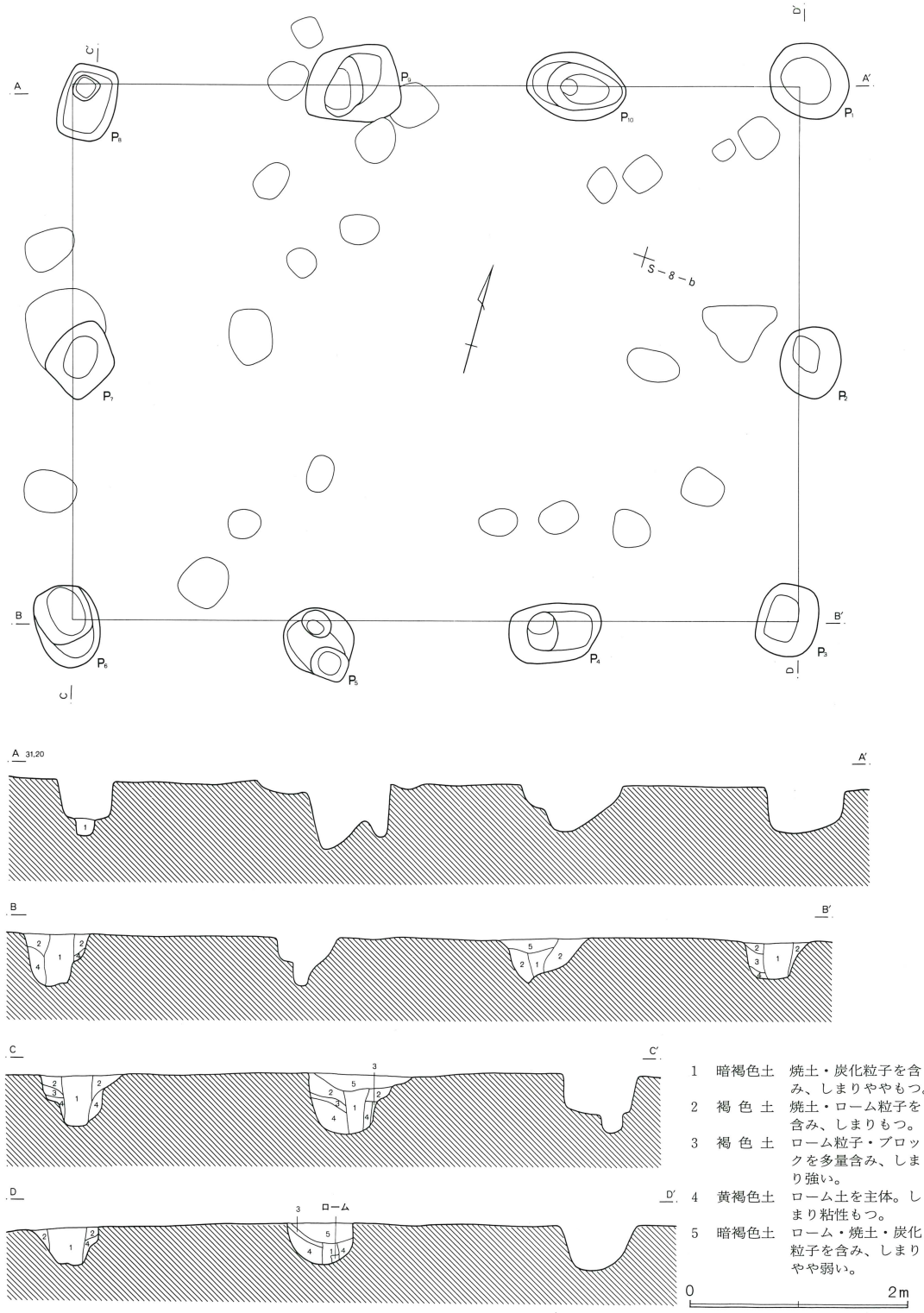
時期は稲荷前Ｖ期と考えられる。



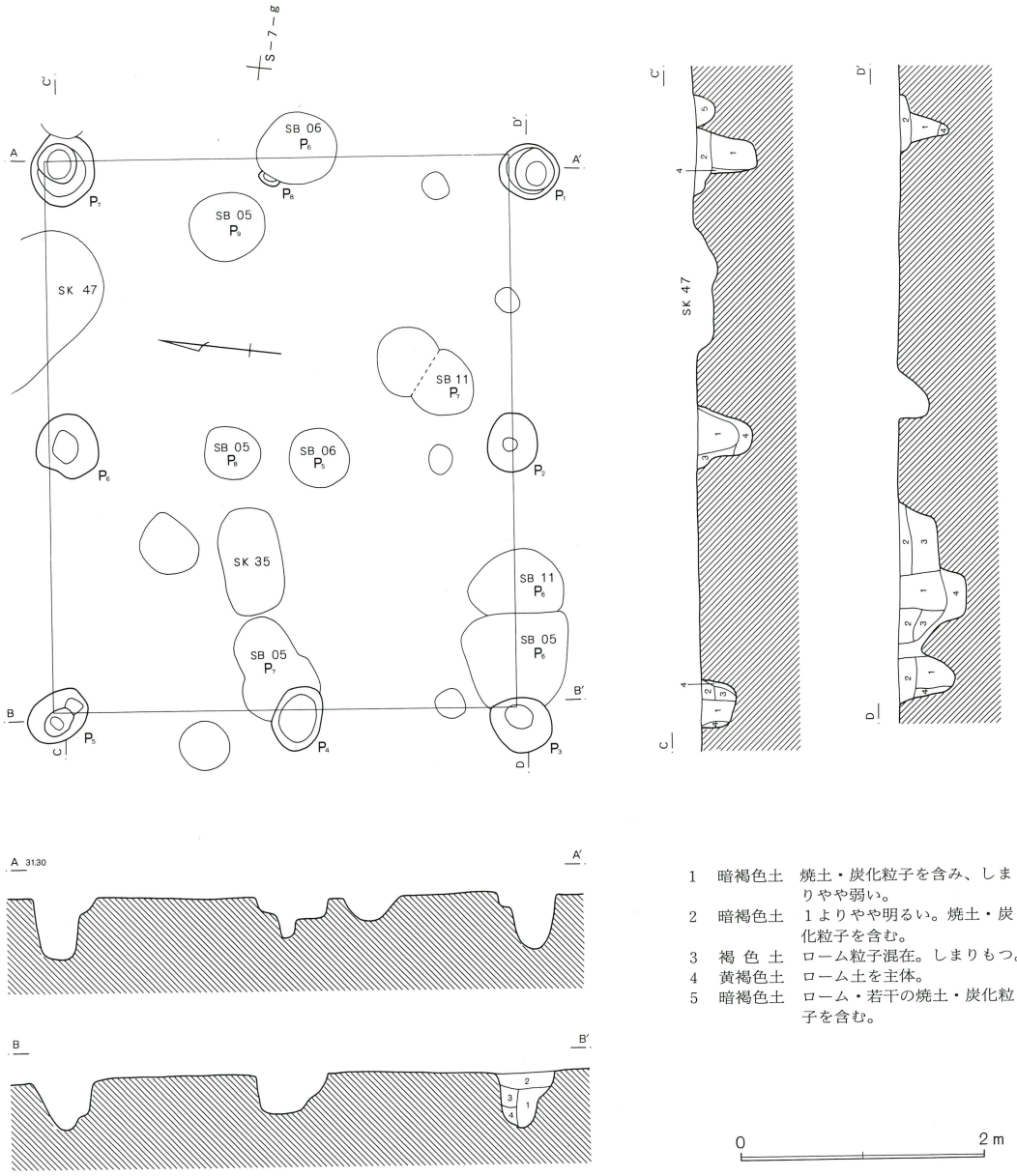
第５号掘立柱建物跡（第94図）

Ｓ－７区に位置する。調査区南西にあり、第４・６・11号掘立柱建物跡が重複して検出され古代の建物群の占有地区である。その中にあって、本遺構は規模が大きく古い。２×４間の東西棟の建物である。桁行6.70m、梁行4.20mであり、主軸方向はＮ－75°－Ｅである。

柱穴は円形もしくは隅丸方形をしており、隅柱のＰ５とＰ７はわずかに「Ｌ」字状の掘り方をもつ。規模は長さ0.48～1.07m、深さ26～53cmである。柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.10mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。いずれも柱穴掘り方の内側に寄った位置に柱痕を検出した。



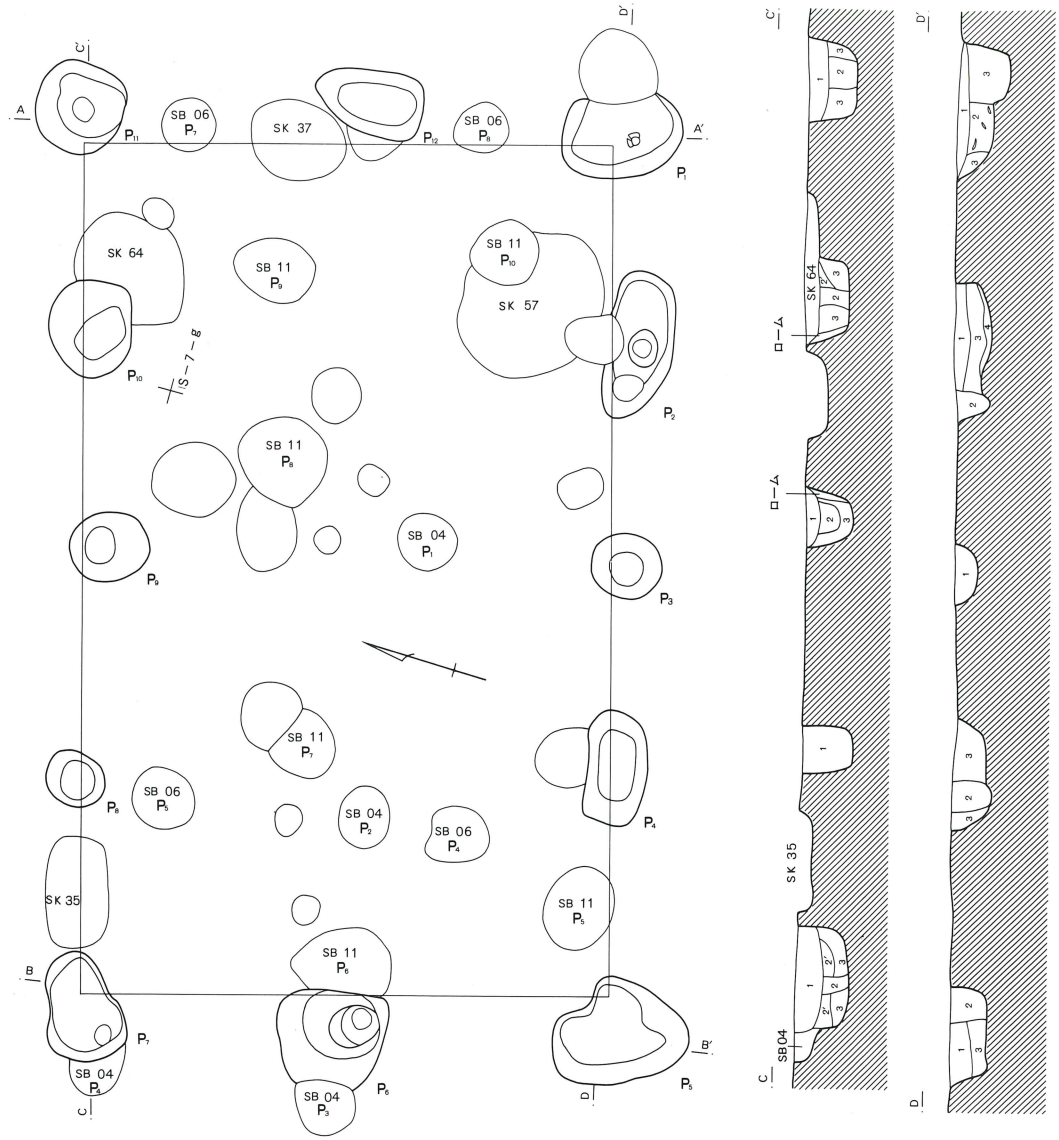
第92図　第3号掘立柱建物跡

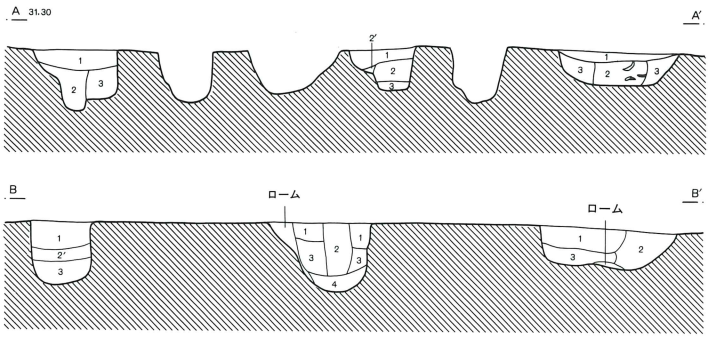


第93図　第4号掘立柱建物跡

出土遺物は土師器甕、須恵器坏・高台坏の破片を出土。8は底径7.6cmとやや大きめの底部である。底部外面は回転糸切り離し後、外周回転ヘラケズリを施し、9の底部も同様と考えられる。形態は器肉の厚い底部から体部が外傾にやや開き気味に立ち上がる。口唇部は器肉薄くやや尖る。10は「ハ」の字に開く高台が張り付き、体部は直線的に外傾に立ち上がる。12～14は「コ」の字状口縁甕である。器肉薄く口縁部ヨコナデ、胴部外面は横方向のヘラケズリを施す。内面にはヘラナデの痕跡が見られる。

時期は稲荷前Ⅸ期と考えられる。





1　黒褐色土　焼土・炭化粒子を混在。ローム粒子・ブロック(径1cm)を含む。

2　暗褐色土　ローム粒子、ブロックを多く含む。焼土・炭化粒子を混在。

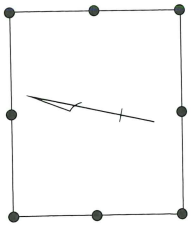
2′暗褐色土　2よりやや焼土・炭化粒子少ない。

3　黒褐色土　しまりやや強い。ローム土を混在。

4　褐色土　ローム粒子、ブロックを含み、焼土・炭化粒子を混在。

0　2m

第94図　第5号掘立柱建物跡



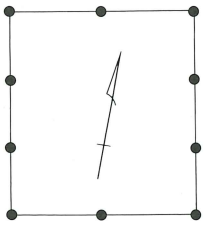
第６号掘立柱建物跡（第95図）

Ｓ－７区に位置する。調査区南西にあたり、第４・５・11号掘立柱建物跡と重複関係にある。その中にあって、本遺構は第４・５号掘立柱建物跡よりも新しく、Ｐ２はＳＢ11のＰ２よりも古い。２×２間の東西棟の建物で、桁行5.40m、梁行4.50mであり、主軸方向はＮ－77°－Ｅである。

柱穴は円形をしており、規模は長さ0.43～0.57m、深さ27～45cmである。柱間寸法は桁行2.70m、梁行2.70mであり、桁行側の柱間の方が長いことがわかる。柱穴掘り方の覆土は、第１層が暗褐色土で柱痕にあたり、第３層はローム土を主体としてしまりが強く、第２・４・５層と共に柱を支えるための版築土である。

出土遺物は検出されなかった。

時期は切り合い関係から稲荷前XIII期と考えられる。



第７号掘立柱建物跡（第96図）

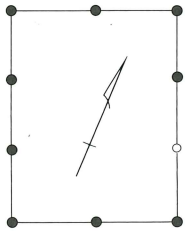
Ｓ－８・９、Ｔ－９区に位置する。調査区南西にあたり、第８・９号掘立柱建物跡と建物方向を同じくして、重複関係にある。周辺には第４・５・14号住居跡が西側に存在する。本建物跡は、２×３間の南北棟の建物である。桁行5.40m、梁行4.90mであり、主軸方向はＮ－12°－Ｗである。

柱穴は円形をしており、規模は長さ0.35～0.63m、深さ14～60cmである。柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.45mであり、梁行側の柱間の方が長い。柱穴掘り方は、断面観察によると第１層のややきめの細かい暗褐色土が柱痕である。

第７・８・９号掘立柱建物跡はほぼ主軸方向を同じくして位置を北側にずらしながら建て替えられたものと考えられる。いずれの建物も２間×３間の規模をもち南北棟である。柱穴は第７・９号は円形をした掘り方であるが、第８号は方形に近い掘り方をもち四隅の柱穴は「Ｌ」字状の掘り方である。このことは、時期的な違いが考えられる。一方、同じような２間×３間の規模の東西棟の建物である第２・３・４号掘立柱建物跡が主軸方向を同じくする存在形態とは異なり、第１号掘立柱建物跡に見られるような大型の建物でもない。本建物群が存在する場所には竪穴住居跡の存在は見られず重複関係にない。完全にある時期の建物区域と考えられる。

出土遺物は大型の鉄製鎌を検出した。

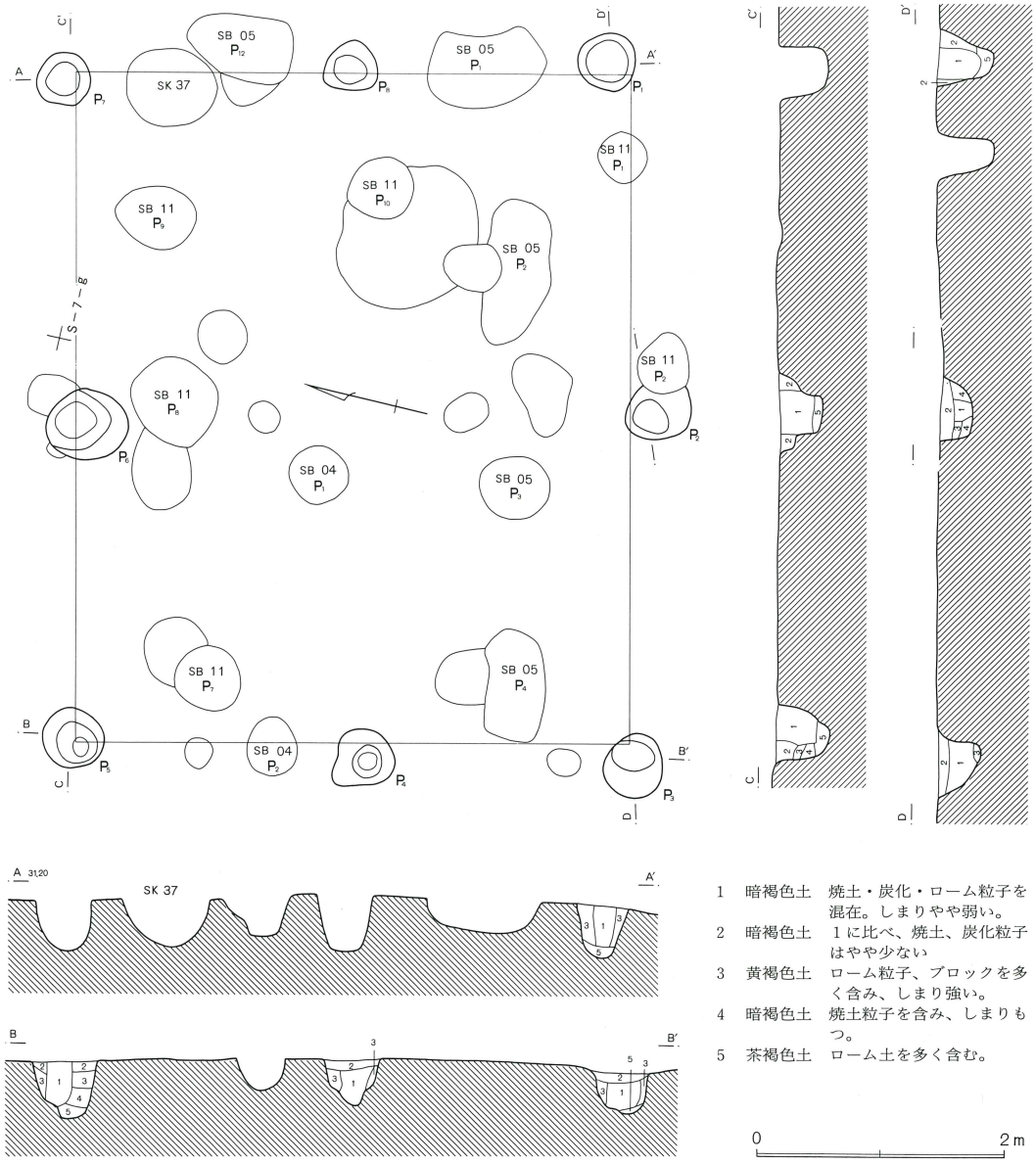
時期は不明である。



第８号掘立柱建物跡（第97図）

Ｒ・Ｓ－８・９区に位置する。調査区南西にあたり、中世の第１・２号溝が建物中央を走り、第２・７号掘立柱建物跡と重複関係にある。建物規模は第６号掘立柱建物跡と同じ２×３間の南北棟であり、桁行5.40m、梁行4.50mであり、主軸方向はＮ－24°－Ｗである。

柱穴は隅丸方形をしており、隅柱は弱いながらも４箇所とも「Ｌ」字状の

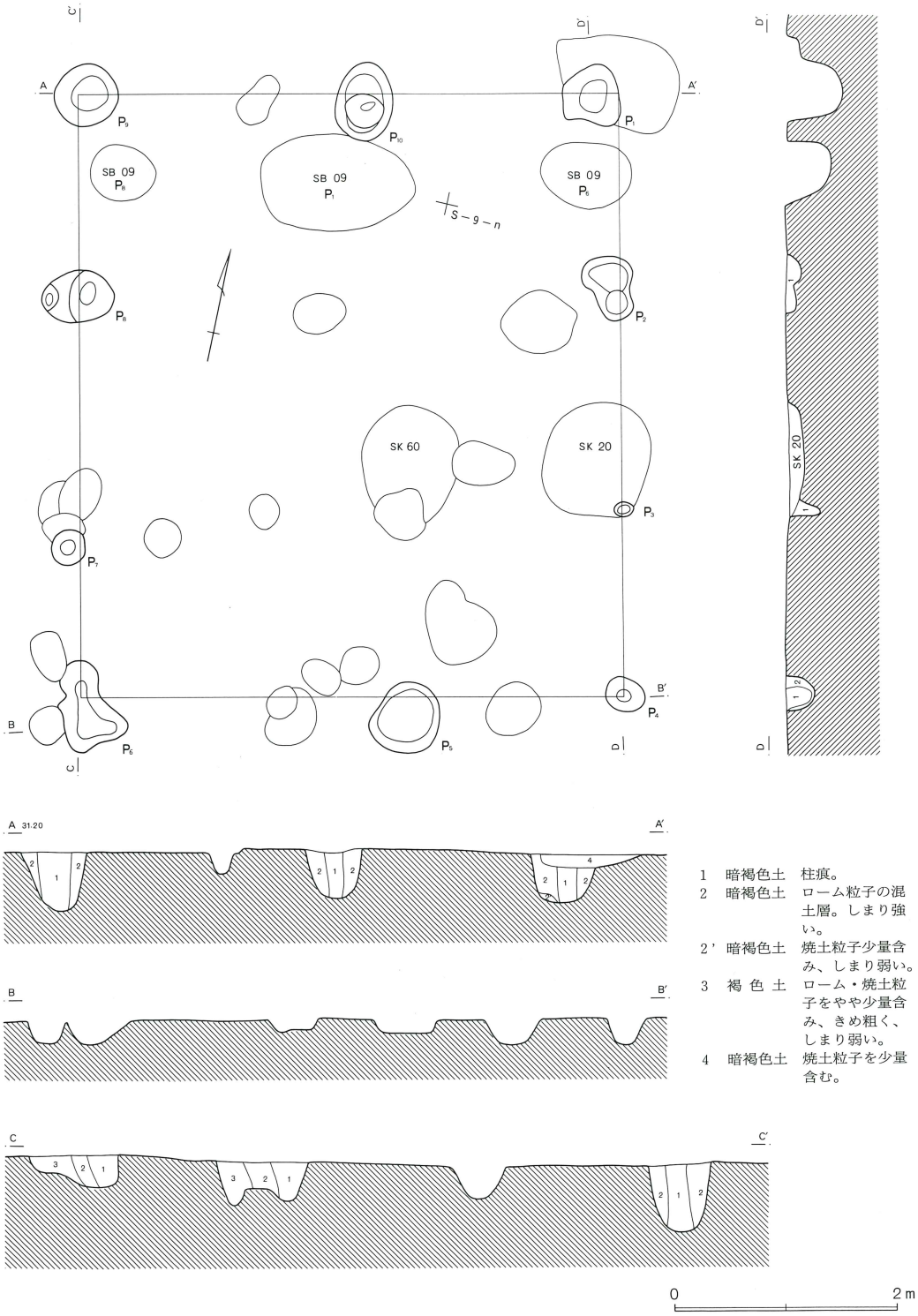


第95図 第6号掘立柱建物跡

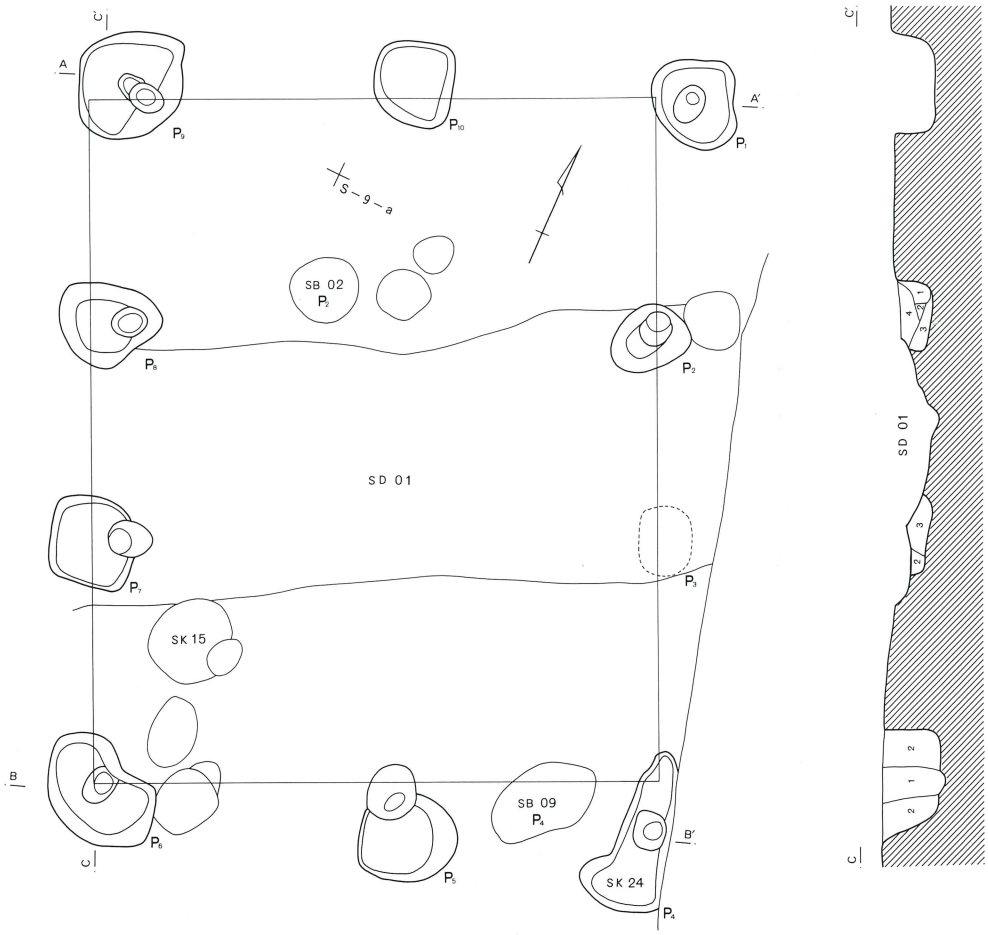
掘り方をもつ。規模は長さ0.66～0.86m、深さ31～48cmである。柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.25mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。また、柱痕は柱掘り方の内側に寄った位置にあったものと考えられ、断面観察によれば第1層の黒褐色土が柱痕にあたる。

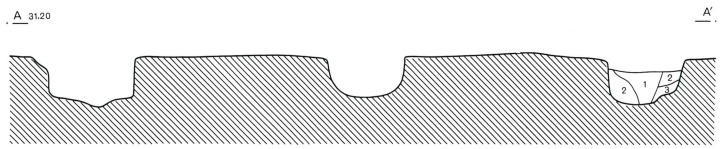
出土遺物は土師器坏、甕の破片が少量検出された。

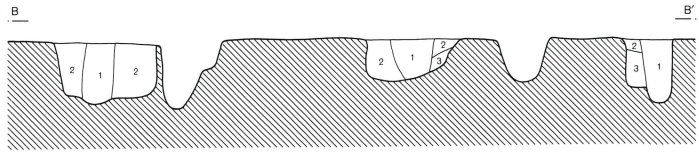
時期は不明であるが、建物規模から推定すれば第6号掘立柱建物跡と同規模であること、隅柱を「L」字状に掘る点で8世紀末から9世紀後半が考えられる。稲荷前Ⅸ～XIII期の間と考えられる。



第96図　第７号掘立柱建物跡



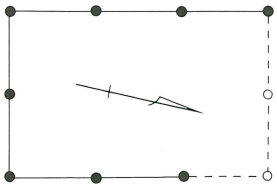




1　黒褐色土　柱痕。
2　暗褐色土　ロームブロックを少量混入。硬くしまる。
3　暗褐色土　ロームブロックとの混土層。
4　暗褐色土　小礫含み、しまり弱い。

0　2 m

第97図　第８号掘立柱建物跡



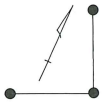
第９号掘立柱建物跡（第98図）

Ｓ－８・９区に位置する。調査区南西にあたり、第７・８号掘立柱建物跡と重複関係にある。また、中世の第１・２号溝跡が北側を走り妻側の柱穴を検出することができなかった。建物規模は２×３間の南北棟で、桁行6.90m、梁行4.50mである。主軸方向はＮ－13°－Ｗである。

柱穴は円形をしており、規模は長さ0.50～0.70m、深さ35～60cmである。柱間寸法は桁行2.30m、梁行2.70mであり、梁行側の柱間の方が長い。柱穴はＰ４・Ｐ５で断面観察によって柱痕を確認することができた。

出土遺物は土師器坏、甕の破片が少量検出された。

時期は不明である。



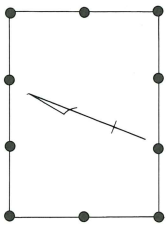
第10号掘立柱建物跡（第99図）

Ｒ・Ｓ－９・10区に位置する。東側調査区の南西隅にあたる。本建物跡は、北側および西側は調査区域外に伸びているため建物方向や規模は不明である。

柱穴は３本確認され、このうち、Ｐ２は全体を検出し「Ｌ」字状の掘り方をもつ南東の隅柱である。他のＰ１・Ｐ３は調査区域にかかり明らかではないが方形の掘り方であると考えられる。柱穴の規模は比較的大きくＰ２で長さ1.48m、深さ43cmである。柱間寸法は桁行2.00m、梁行2.40mであり、主軸方向はＮ－65°－Ｅである。柱間の間隔からすると２×３間規模の南北棟の建物の可能性が考えられるが不明である。

出土遺物はＰ２から土師器甕、須恵器坏の破片が検出されている。土師器甕は「コ」の字状口縁甕である。また、須恵器坏は口唇部が肥厚し外側に垂れ、器肉薄く、ロクロ目を細かくもつ。

時期は稲荷前XIII期と考えられる。



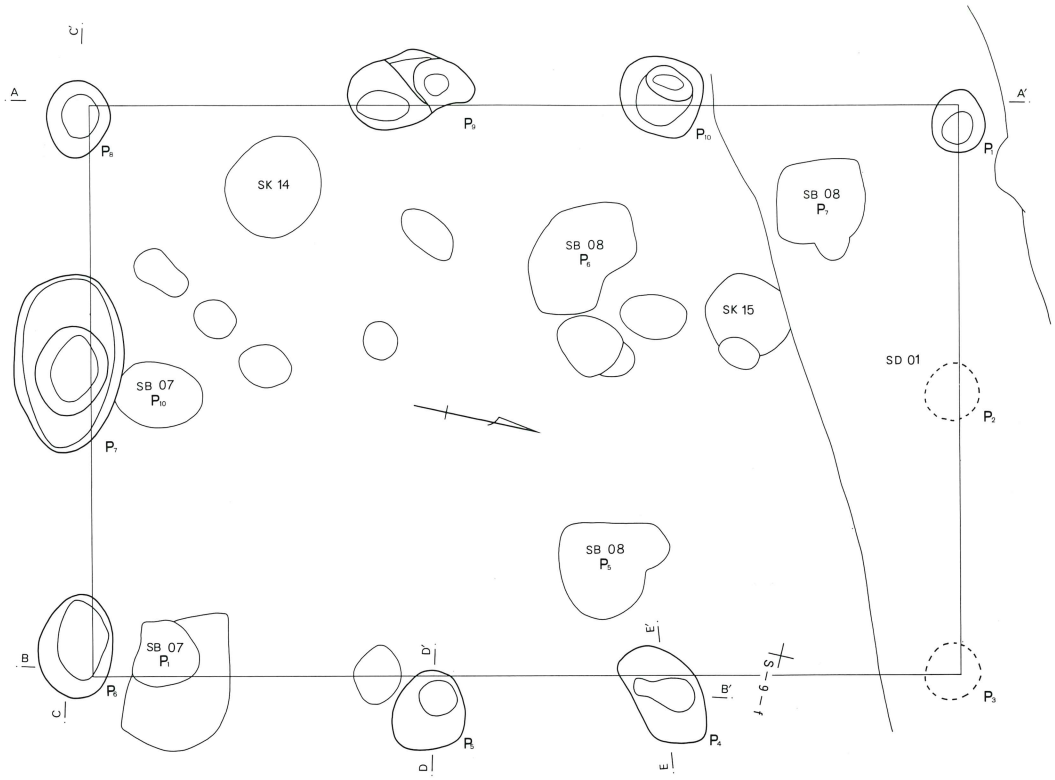
第11号掘立柱建物跡（第100図）

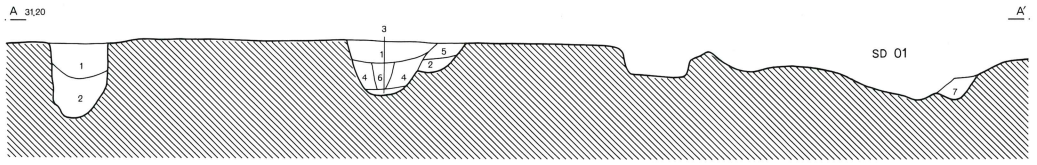
Ｓ－７区に位置する。調査区南西にあたり、第４・５・６号掘立柱建物跡が重複する。また、南側柱列は中世の第２号溝跡に切られている。建物規模は、東西棟で、桁行5.40m、梁行4.00mであり、主軸方向はＮ－69°－Ｅである。

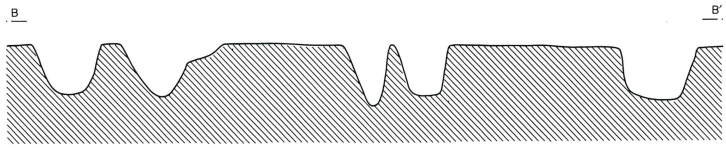
柱穴は円形をしており、規模は長さ0.45～0.70m、深さ33～48cmである。柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.00mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。柱穴はＰ６がＳＢ５のＰ６を切っていることで新旧関係がつかめた。

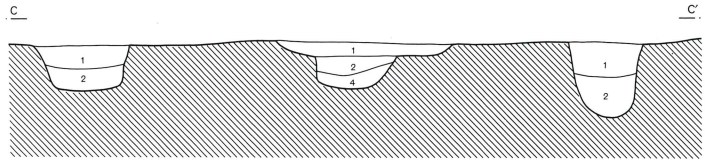
出土遺物は検出されなかった。

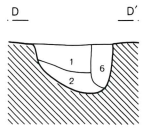
時期は不明である。

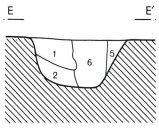








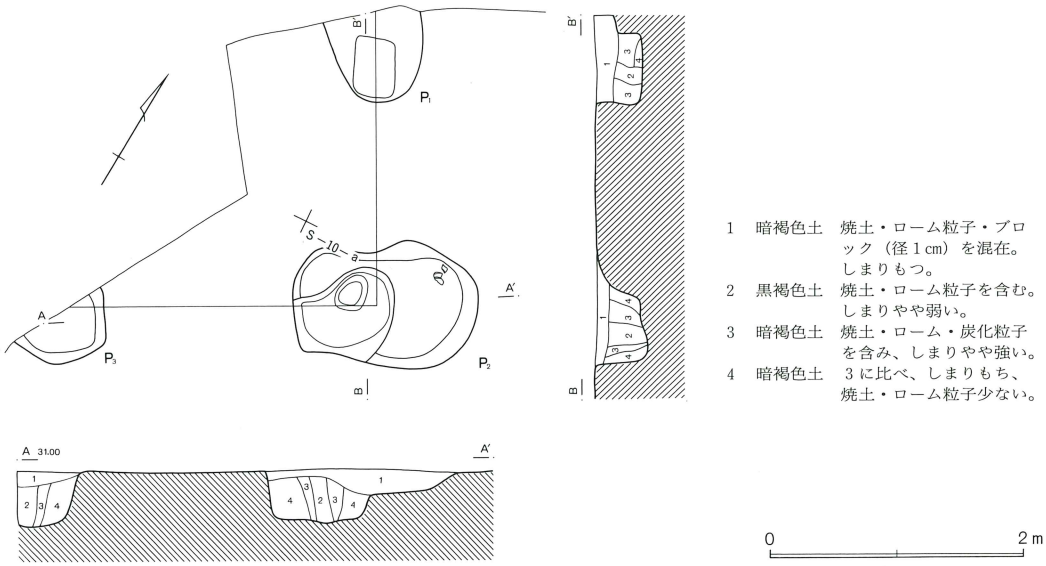




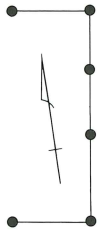
1　暗褐色土　きめ細かく、焼土粒子、小砂利を混在。しまりやや弱い。
2　黄褐色土　ローム土を主体。小砂利を多く含み、しまりやや強い。
3　黄褐色土　黒色土混入。しまり強い。
4　黄褐色土　暗褐色土との混土層。
5　暗褐色土　小礫、焼土粒子を少量含む。
6　暗褐色土　白色粘土、ブロックを少量含む。
7　暗褐色土　黄褐色土ブロックを少量含む。

0　2 m

第98図　第９号掘立柱建物跡



第99図 第10号掘立柱建物跡



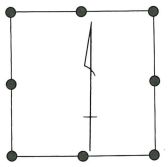
第12号掘立柱建物跡（第101図）

S・T－6・7区に位置する。調査区南西隅にあたり、南側に第1・2・3号住居跡、東側に第13号掘立柱建物跡が検出された。西側柱列は調査区域外に伸びている。建物規模は正確には把握できないが、2×3間の南北棟の建物と推定される。桁行5.40m、梁行は1間の柱間が2.00mであることから2間と仮定すれば4.00mとなる。主軸方向はN－9°－Eである。

柱穴は円形もしくは楕円形をしており、規模は長さ0.52～0.80m、深さ28～52cmである。柱間寸法は桁行1.80m、梁行2.00mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏の破片を検出した。

時期は不明である。



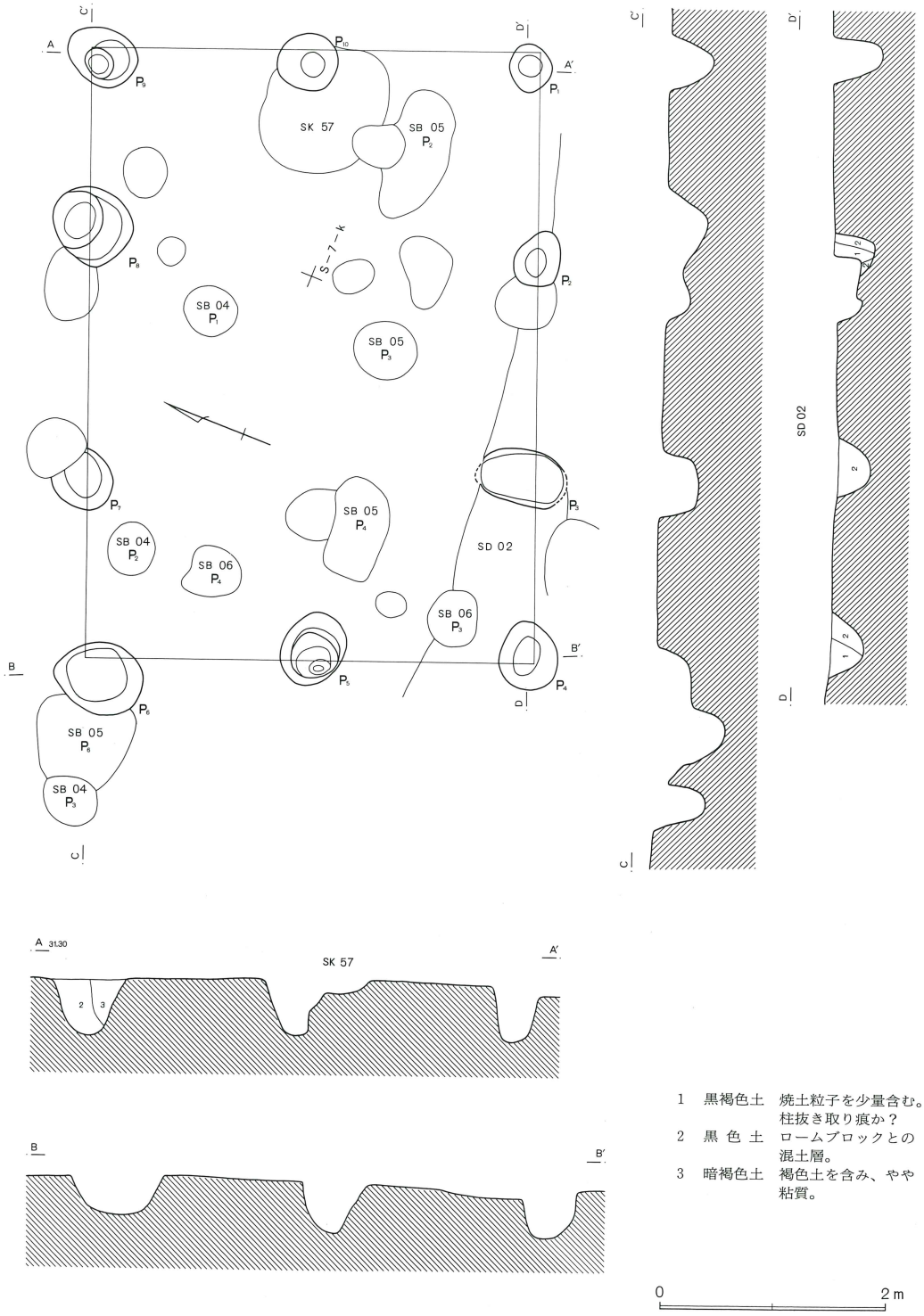
第13号掘立柱建物跡（第101図）

S・T－6・7区に位置する。調査区南西隅にあたり、第12号掘立柱建物跡の東側に近接して検出された。また、建物中央を第1号溝跡が東西に走る。建物規模は、2×2間の正方形の建物である。桁行3.60m、梁行3.60mであり、主軸方向はN－1°－Wである。

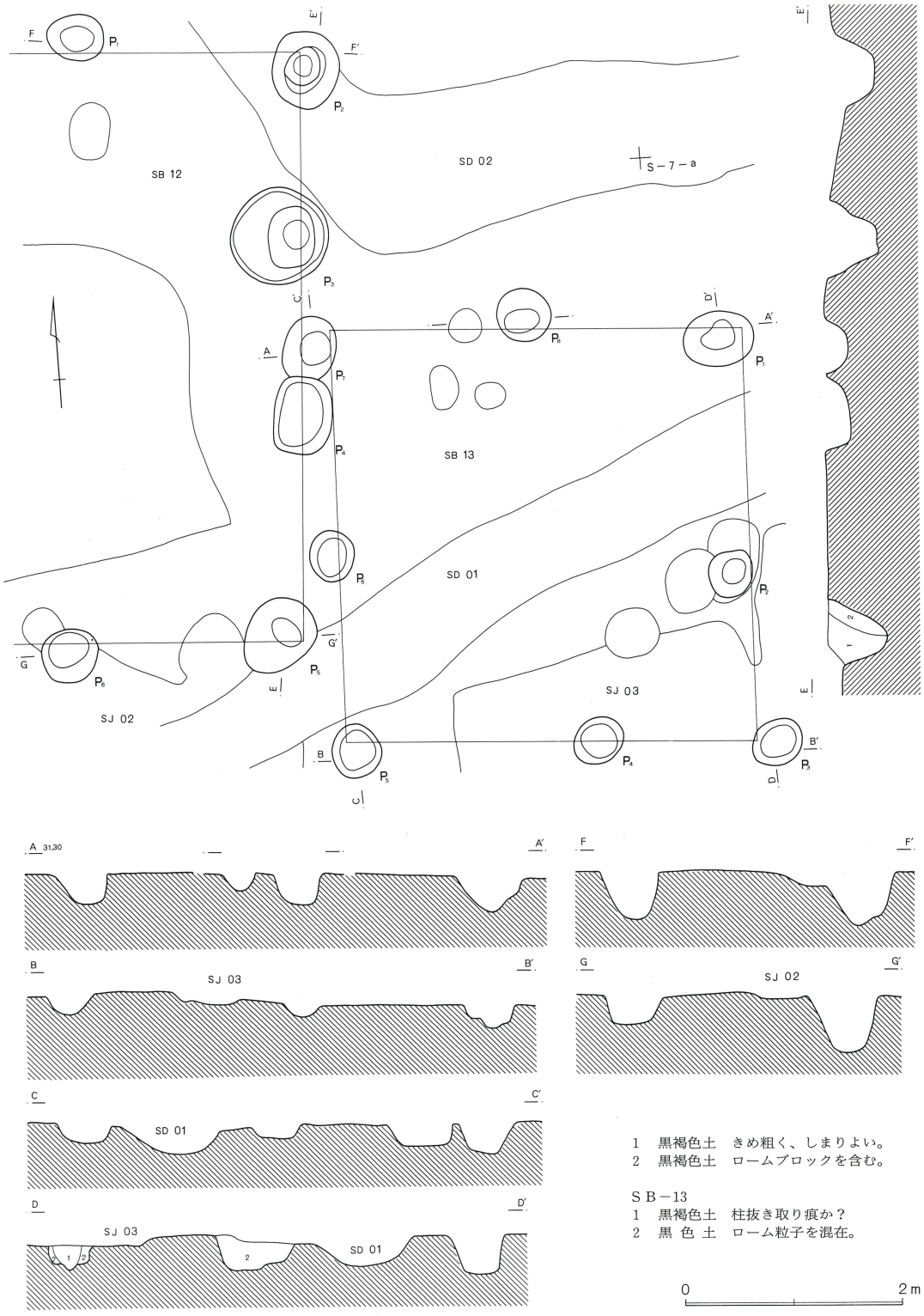
柱穴は円形をしており、規模は長径0.42～0.50m、深さ13～30cmである。柱間寸法は桁行、梁行とも1.80mである。

出土遺物は器肉薄く、口唇部やや肥厚する白灰色の須恵器坏破片をP3から検出した。

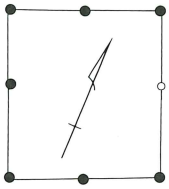
時期は稲荷前XIII期と考えられる。



第100図　第11号掘立柱建物跡

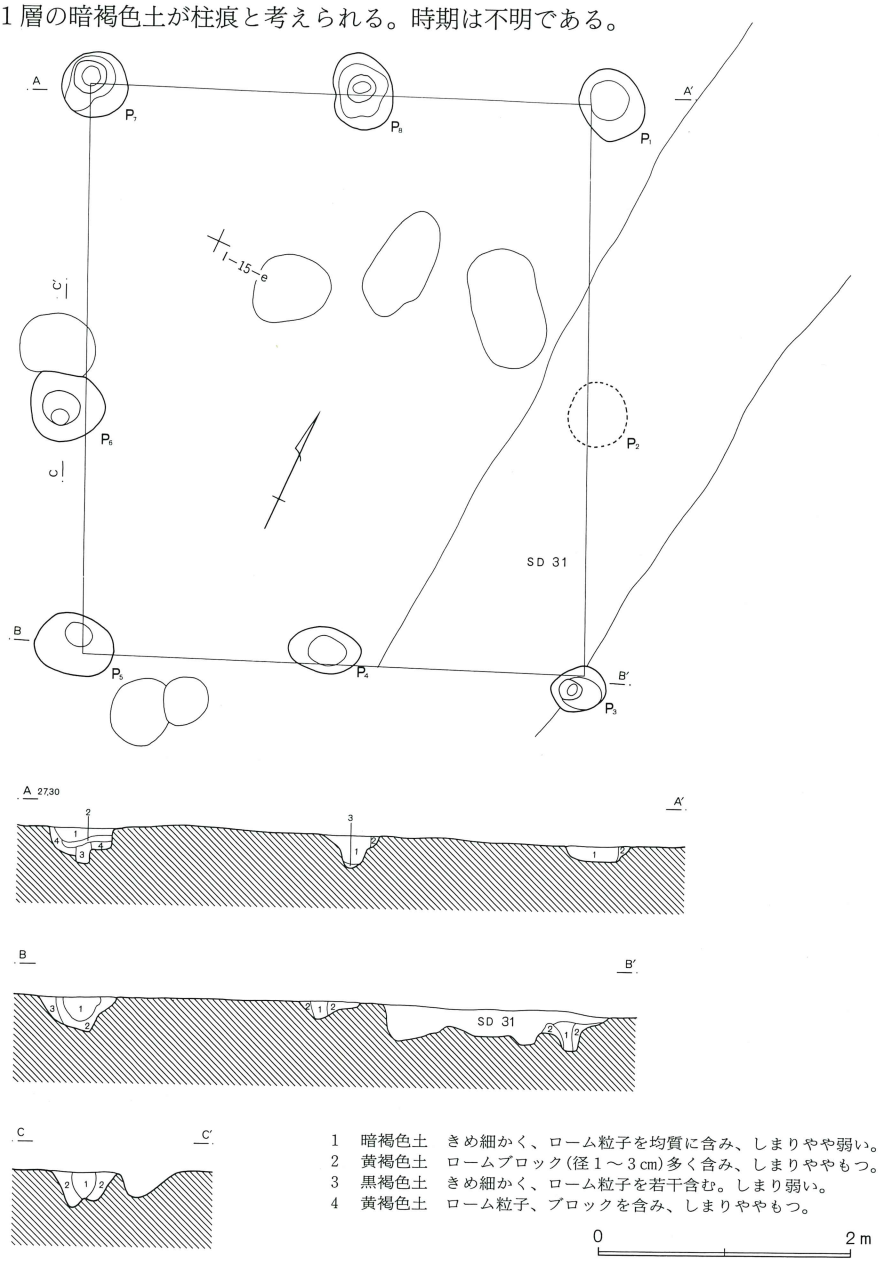


第101図　第12・13号掘立柱建物跡

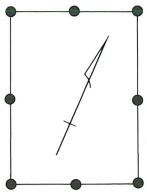


第25号掘立柱建物跡（第102図）

Ⅰ－14・15区に位置する。北側調査区にあたり、西側には第26号掘立柱建物跡が近接して検出された。第31号溝跡に東側の柱列は重複関係にあり、柱穴の方が深く掘り込まれていたためにＰ１、Ｐ３は検出できたが、Ｐ２は確認できなかった。平面および断面観察から溝の方が新しいことがわかった。２×２間の南北棟の建物で、桁行4.50m、梁行4.00mであり、主軸方向はＮ－68°－Ｅである。大きさは径0.34～0.57m、深さ11～27cmである。柱間寸法は桁行2.25m、梁行2.00mであり、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７では第１層の暗褐色土が柱痕と考えられる。時期は不明である。



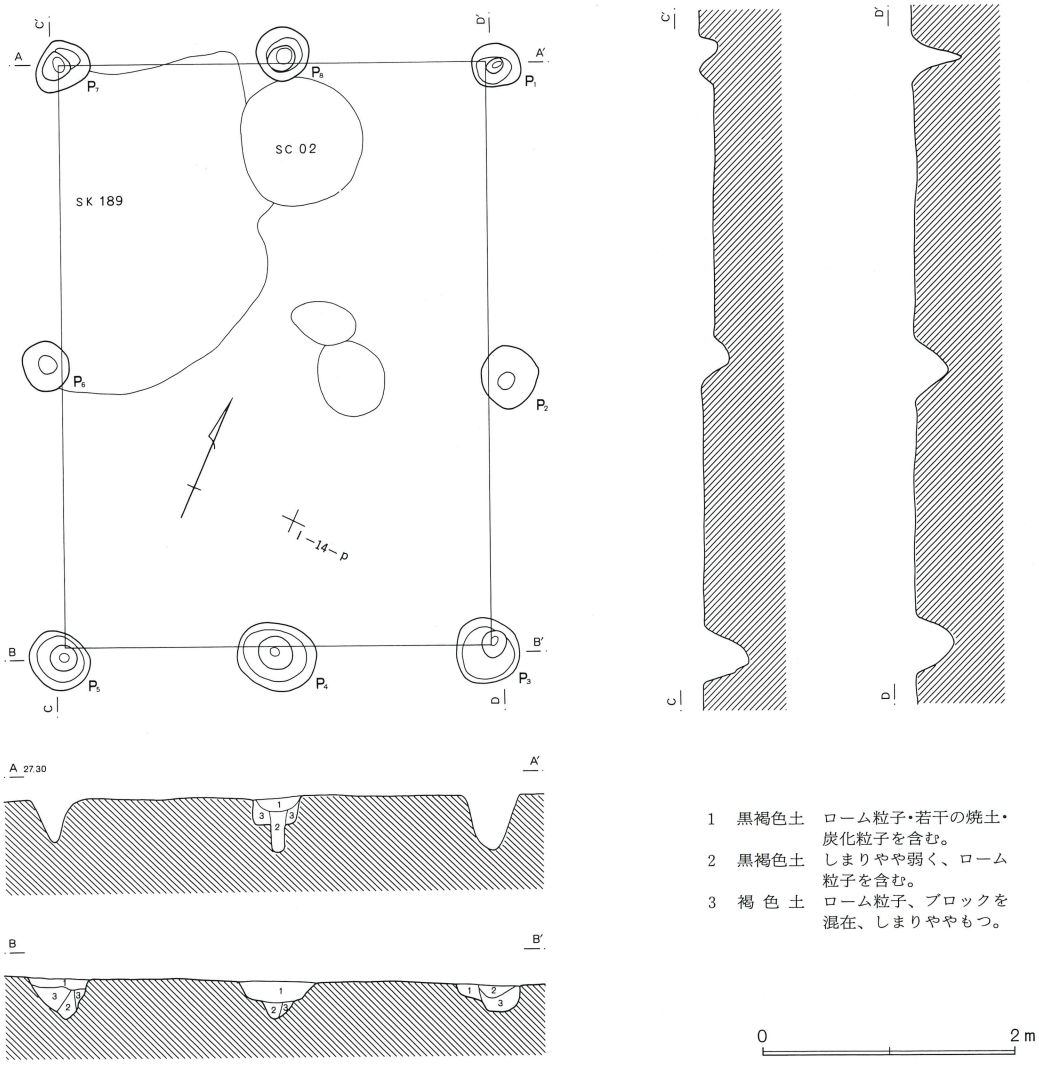
第102図　第25号掘立柱建物跡



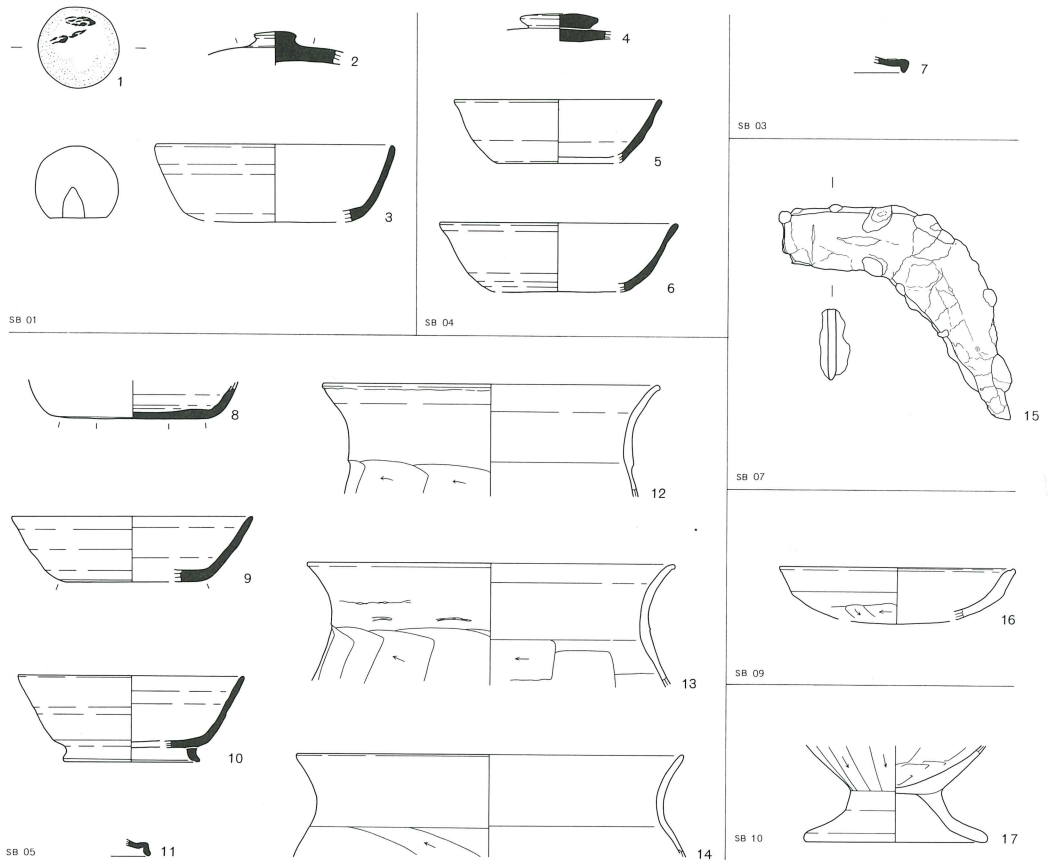
第26号掘立柱建物跡（第103図）

Ⅰ－14区に位置する。北側調査区にあたり、東側には第25号掘立柱建物跡が検出された。建物の西方10m のところには第15鋳造遺構群が、さらに10m 西方には東向きの緩斜面があり、この部分に第14鋳造遺構群が存在している。本建物との重複遺構は、第２号集石土壙と第189号土壙である。集石土壙は縄文時代の遺構であり、明らかに古いが、第189号土壙との新旧関係は不明である。建物の規模は、２×２間の南北棟で、桁行4.60m、梁行3.40m であり、主軸方向はN－24°－Wである。

柱穴は円形をしており、大きさは0.34～0.54m、深さ12～34cmである。柱間寸法は桁行2.30m、梁行1.70m である。時期は不明である。



第103図　第26号掘立柱建物跡



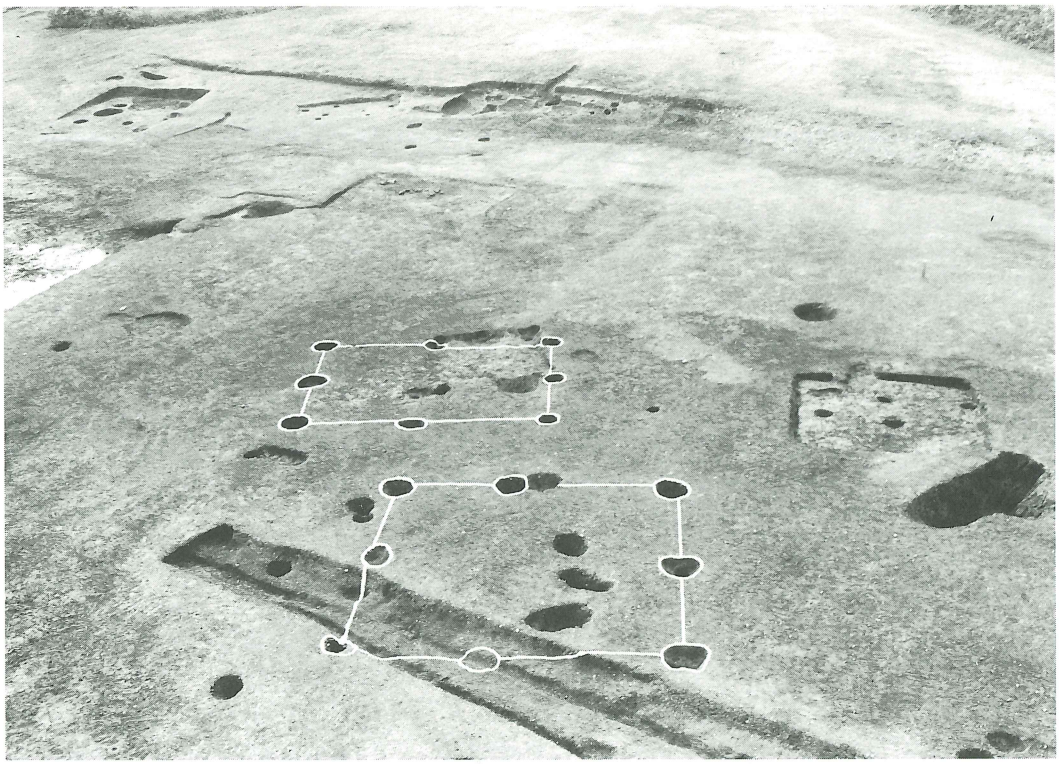
第104図　掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物跡出土遺物観察表（第104図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	石製玉					A	褐色		ＳＢ1－Pit4
2	蓋	2.4	1.6		ＢＣＤＦ	B	淡灰色	20%	ＳＢ1
3	坏	(12.5)	3.9	(6.4)	ＢＣＤＦ	B	灰色	10%	ＳＢ1－Pit10
4	蓋	4.2	1.4		ＢＣＤＦ	C	黒灰色	20%	ＳＢ4－Pit5
5	坏	(12.0)	3.4	(6.5)	ＢＣＤＦ	B	灰色	10%	ＳＢ4－Pit7
6	坏	(12.5)	3.6	(7.2)	ＢＣＤＦ	B	灰色	10%	ＳＢ4－Pit6
7	蓋				ＢＣＤＦ	A	青灰色	1%	ＳＢ3－Pit10
8	坏		2.0	(7.6)	ＢＣＤＦ	B	灰色	25%	ＳＢ5－Pit5
9	坏	(12.7)	3.4	7.8	ＢＣＤＦ	B	淡灰色	25%	ＳＢ5－Pit1
10	高台坏	(12.0)	4.6	(7.2)	ＢＣＤＦ	A	青灰色	30%	ＳＢ5－Pit1
11	蓋	(19.6)	0.9		ＢＣＤＦ	A	灰色	1%	ＳＢ5－Pit2
12	甕	(17.7)	5.9		ＡＢＣ	B	褐色	10%	ＳＢ5－Pit1　Ｏ.5
13	甕	(19.4)	5.4		ＡＢＣ	B	茶褐色	25%	ＳＢ5－Pit1№3
14	甕	20.5	5.4		ＡＢＣ	A	橙褐色	20%	ＳＢ5－Pit1№4
15	鉄製鎌					A	褐色		ＳＢ7
16	坏	(12.5)	3.0		ABCDF	B	橙褐色	10%	ＳＢ9－Pit8
17	台付甕			(9.8)	ＡＢＣ	B	橙褐色	20%	ＳＢ10－Pit2№2

第3表　掘立柱建物跡一覧表　　（単位　m）

新番号	旧番号	位　　置	重　複　遺　構	間×間	桁行	梁行	主軸方向	時　期
SB-01	SB-01	S-7,8　T-7,8	SE-01 SJ-04,05,14 SD-01	2×4	8.60	5.40	N-17°-W	古　代
02	02	R-8,9　S-8,9	SB-08　SK-02,03	2×3	6.70	4.90	N-75°-E	古　代
03	03	R-7,8　S-7,8	SK-04	2×3	6.70	4.90	N-74°-E	古　代
04	04	S-7	SB-05,06,11 SK-32,34	2×2	4.50	3.80	N-83°-E	古　代
05	05	S-7	SB-04,06,11 SK-06,34,43	2×4	6.70	4.20	N-75°-E	古　代
06	06	S-7	SB-04,05,11 SK-06	2×2	5.40	4.50	N-77°-E	古　代
07	07	S-8,9　T-9	SB-09　SK-38,85	2×3	5.40	4.90	N-12°-W	古　代
08	08	R-8,9　S-8,9	SD-01 SB-02,09 SK-02,03,	2×3	5.40	4.50	N-24°-W	古　代
09	09	S-8,9	SD-01 SB-07,08 SK-44,45	2×3	6.90	4.50	N-13°-W	古　代
10	15	R-9,10　S-9,10		1×1	2.00	2.40	N-65°-E	古　代
11	11	S-7	SD-02 SB-04,05,06 SK-33	2×3	5.40	4.00	N-69°-E	古　代
12	12	S-6,7　T-6,7	SJ-02 SD-01,02 SB-13	1×3	5.40	2.00	N- 9°-E	古　代
13	13	S-6,7　T-6,7	SJ-03　SD-01	2×2	3.80	3.80	N- 1°-W	古　代
25	21	I-14,15	SD-45	2×2	4.50	4.00	N-68°-E	古　代
26	22	I-14	SK-273　SC-02	2×2	4.60	3.40	N-24°-W	古　代



第25・26号掘立柱建物跡